

---

# 魔法とキズナと身体の関係

NAO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法とキズナと身体の関係

### 【Nコード】

N5355E

### 【作者名】

NAO

### 【あらすじ】

俺の弟子、キズナ（貧乳）は魔法使いだ。それもかなりの馬鹿で攻撃的ときてる。そんな愚かな弟子が動けば半分の確率で事件を巻き起こし、もう半分の確率で事件に巻き込まれる。はっきりに言って迷惑だ。それでも、魔法も戦闘もまだまだ未熟なキズナに、俺は心配しないではられない。そんなわけで、今回はある町で起こった（起こした？）事件の顛末をお送りするでしょう。……ふむ、今回は師匠である俺も力を貸してやるとするか　アクションと魔法、コメディ風味。つまりはそんなライトノベルです。

## ブローグ

俺は、お前に何もしてやれていないのかもいれない。

俺は、本当に、本当に駄目で、矮小で、哀れで、どうしようもない存在なのかもしれない。救いがたい存在なのかも知れない。

……どうか許して欲しい。いや、許さなくてもいい。きっと許されるはずなどないのだから。

そう、俺は馬鹿だ。大馬鹿なのだ。愚か者なのだ。

でも……でも俺は

「そんな自分が好きなんだっ！」

「いきなり言ってんのよっ！ 気持ち悪っ！」

路地裏に、まるで変態人間でも見つけたかのように叫ぶ。

「気持ち悪いとはなんだ、偉大なる師匠に向かって」

「偉大？ 痛い間違いなんじゃないの？ 痛い師匠リニオ・カーティス……くくっ、我れながら傑作ね。二つ名にでもしたらいいんじゃない？」

栗色の髪の毛を頭の左右に結わえる少女は、何がそんなに楽しいのか、俺を見てニヤニヤと笑みを浮かべている。

……馬鹿め、それで一本取ったつもりか？

「ふん、黙れ。じゃじゃ馬慣らしとはよく言ったものだ。いいか？ 俺はお前という キズナ・タカナシという馬鹿弟子を取り巻く森羅万象に対して、深く深く謝罪をしていたのだ。そして、そんな弟子をいつまでも、馬鹿で、愚かで、哀れなまま放置してしまい、挙げ句の果てはしつけられないでいる俺自身のふがいなさを叫んでいたのだ。……だが、そんな憂う俺自身もまた何かと絵になるもので、ついつい感慨にふけてしまった。涙なんか浮かべたら、それはそれは神々しいだろうよ。古来から水と色男の関係というのは」

「確かに、一理あるわね。リニオは水を得た魚のようにべらべらと良くしゃべるから」

鼻で笑いながら話の腰を折る。これから俺のすばらしさを語ろうって時に、お前は無粋な奴だな、キズナ。

「おい、馬鹿弟子。お前は、水もしたたるいい男、という言葉を知らんのか」

「妄想、妄言は、この際水だけに、水に流してあげるわよ」

「ふん、上手いことを言ったつもりだろうが」

「ところで」

「流すなっ！ 二つの意味で！」

人も寄りつかない薄汚い路地裏で、それは起こっていた。

馬鹿な弟子が困らないように会話のレベルを落としていることではない。

目の前には黒いスーツ姿の男二人。

内一人は壁に民間人を押しつけ、かつ腕を極めて拘束している。残りの一人は、両手にはめたレザーグローブに力を込めていた。レザーが絞られる耳障りな音を皮切りに、男の拳の周りを淡い光りが覆い始める。微細な文字列がレザーグローブの周りを発光しながら取り巻き始める。文字列はあつと言う間に周回速度を増し、男はそれごと打ち出すように拳を振り抜いた。

それは、この世界に住まうものならば誰もが目にすることの出来る、普遍的な力の形……魔力。

それを解き放つ行使としての形を、人は口をそろえてこう呼んだ。

## 魔法。

「問答無用らしいわね」

打ち出された魔力が、俺たちを押しつぶそうと路地裏を駆けめぐる。その魔力をまとった空気は、まさに巨大な波の衝撃。

空気が路地裏に落ちるゴミを巻き込んで渦を巻く。青いポリバケツが倒れ、ゴミが散乱し、魚の骨が俺の顔をかすめていく。波は外壁にひびを走らせながら、俺たちに急接近。

ふむ……なかなかの魔力量、敵はそれなりの訓練を受けていると見た。

「おい、キズナ」

キズナを見る。

「分かってるわ」

うなずき、戦闘に集中しようとするキズナ。

「慣れないことをするな、逆に笑える。それより……見る、ごみが散乱している。これはあとで掃除する人間が大変」

「潰すわよ」

町の美化を危惧する俺に、まるでげんこつでも落とすかのような怖い声が振り下ろされる。

直後、左右二つに結った髪の毛を振り乱して、壁を蹴りつけて舞い上がるキズナ。軽やかに、そして、しなやかな身のこなしで路地裏に奔騰した魔力の波動をやり過ごす。栗色の長い髪の毛が、舞い上がるキズナに従いながら美しい流線を描いた。

「ところで、キズナ。潰すって何をだ？ 男には潰されて困るものがいくつかあるんだがな。たとえばメンツとか」

「片方ぐらい無くなっても、機能的に問題ないわ」

……お、恐ろしい女！

身体の一部がきゅっと引き締まるような錯覚を感じる俺をよそに、衝撃波は舞い上がったキズナの視界の下を一過していった。三角飛びの要領で空中に身を投げ出したキズナは、黒いスーツの男にひじうちを落とすべく、さらに逆側の壁を蹴る。男は空中に身を投げ出している時点で、キズナの二手先をよんでいたようだ。

余裕を持ったバックステップでキズナと距離をとると、重心を低くとり、キズナの着地際を狙う。

それだけでなく狭い路地裏だ。選択肢は限られる。

男の予想通りならば、キズナに次はないだろう。

だが、キズナとて素人ではない。そのぐらいはお見通しだ。

……お見通しだよな？

「おい、キズナ、ちゃんと分かっているんだろうな？」

男のねらいを分かっている弟子思いの俺は、キズナに注意を促してやった。

「何を？」

分かってないのか！？

「冗談よ、冗談」

「本当だろうな？」

「冗談よ、冗談」

……おい、冗談にしないでいいところまで冗談にするな。

俺達の会話に、怪訝そう眉毛をたわめる男が見えた。

それはそうだろう。命のやりとりをしているのにこんなお気楽な会話をされたらたまったものではない。

ま、それも俺達には当たり前のことだ。逆にこの会話があることでまだ余裕があるという証明にもなる。

「……それはそうと」

キズナ、着地態勢。

男の拳に再度、魔力がみなぎる。

おそらくはさつきと同等か、それ以上の魔法を放とうとしていること分かる。

すでに魔法が言語となって男の拳の周りを覆っている。準備は万端と言うところか。

「キズナ、力をかそうか？」

「ふん、こっちからお断り！」

数瞬の間に、男が一言だけつぶやいた。それが魔法を発動するキとなる。

古来から、魔法は詠唱を必要とした。  
それは今でも変わらない。

……が、変わるものもある。

「古より胎動する風の精霊よ」

昔から、魔法を使用するには、精霊の力を借りるとか、契約するとか何とか、それなりの手順を踏まなければ体に宿る魔力を放出、あるいは具現化できなかった。

例えるならば、そうだな……今まさにキズナが実演してくれるだろう。

「我が盟約に従いその力を眼前にて示せ！」

キズナ、着地。

男はすでに魔法を放っている。

一方、キズナはまだ詠唱をすませていない。

路地裏を荒れ狂う熱波。空間ごと歪ませるような強力な魔力の放



出。

レンガ造りの壁がバラバラになり、竜巻に巻き込まれるように波動に吸収されていく。男はニヤリと口元をつり上げた。我が身の勝利を確信したのだろう。

おいおい、キズナ、さすがに危ないんじゃないのか。

「風、変換、壁、顕現！」

着地したままの態勢で、詠唱を終えるキズナ。一メートルにまで迫った衝撃波が、キズナを呑み込んでいく。体内から具現化された魔力が、ぎりぎりのところで衝撃波から身を守っている。

……だが、いかんせん魔力の絶対量が違った。

ぎりぎりまで余裕を持っていたため込んだスーツ男の魔力と、キズナの急造魔力。勝敗は火を見るより明らかだった。

ガラスが破れるような音を伴って、魔法の障壁が崩壊する。なすすべのないキズナの身体が、路地裏を吹き飛んでいった。

キズナの小柄な体がレンガ造りの壁に跳ね返り、地面にどさりと落ちる。

ふむ、どうやら先端に行く単詠唱魔法と、時代後れの詠唱魔法の差がはつきりと出てしまったようだな。俺はうつぶせに転がっているキズナと、勝利に浸る男の顔を交互に見比べながら、ため息をつく。理屈は、簡単なのだ。

人類の科学が進歩するように、魔法も進化する。

魔法だっていつまでも唱えるものであるはずがない。

魔法は、詠唱すればその詠唱の文言でどんな魔法が相手に想像されてしまう。

第一に、詠唱に時間がかかるようでは、魔法としては一流でも、武器として三流だ。

覚悟しなさいよねっ！ 私はこれから、アンタを剣で右横から斬りつけてやるんだからっ！ じゃあ、きっかり二秒後に行くわよ！（当社比二倍表現）

……そんなことを言っただけで敵に向かっていく人間がどこにいるだろうか。

そんなことをするのは、よほどの馬鹿か、よほどの自信家か、今ここで転がっている不肖の弟子くらいのものだろ。キズナは前者にも後者にも当てはまっているから、それこそ手に負えないのだが。

多少話はそれだが、魔法は、そういった詠唱と時間の二つのデメリットを背負っていた。それこそ時間をただただ無駄に費やすだけの歴史を重ねてきた。

だが、近代魔法として大成された単詠唱魔法はそれらを同時に解消させてみせた。男がキズナの詠唱手段とは違い、魔法の詠唱をたった一言で済ませてしまったのにはそれなりの理由があるのだ。

詠唱を脳内で行い、さらにそれをショートカットとしてある言葉に置き換えておくこと。

例えるならば、逆引きの辞書の関係に近い。

キヌゲネズミ科キヌゲネズミ類の総称。体長十五センチメートルほど。毛は絹毛状。顔が丸く、頬袋をもつ。背は明るい赤褐色。現在世界中で飼われているものは、すべて倭国で捕獲されたものから

増殖された。実験動物、愛玩用。

……以上を一言で言うならば、ハムスター、である。

つまりショートカットとは、魔法をいち早く発動するために、一連の詠唱を一つの言葉として取り決めてしまうことだ。言葉遊びに近いが、簡単に説明するのならば、今のが一番分かってもらえるように思う。

魔法学に賢い方なら、ここで一つの疑問が発生するはずだ。

単詠唱と言うが、やはり最低限言葉を発しなければいけないじゃないか、と。

実は現在……おっと、悠長に説明している場合ではないな。ご静聴ありがたいが、説明は追々していくとしよう。

「寝心地はどうだ？」

キズナの顔をのぞき見ると、キズナが口に入った砂を吐き出しているところだった。おい、つばを吐きかけるな、汚いじゃないか。

「ふふ……最高よ。もう少し寝ていたいぐらい。ベッドはアスファルト、硬いし、冷たいし、何より口の中がしゃりしゃりするし。最高……ふふ、最高……」

怒りに声が震えている。キズナ、強がると余計空しいぞ。

「おまけに生ゴミ臭いしな」

キズナの前であからさまに鼻をつまんでやった。そんな俺の仕草

にキズナは唇を噛む。キズナの悔しがる顔が俺の嗜虐心を呼び覚ます。

「おい、生ゴミ女、助けが欲しいか？」

「うるっさいわね！」

歯ぎしりするキズナの叫びに先んじて、拳が飛んできた。俺は間髪でそれを避ける。言葉より手が先か、なんと短絡的な。

「ふむ……分かった」

俺は納得し、キズナの腰にぶら下がっているヒップバックにちらりと目をやる。

「じゃ、手をださない代わりにあとで例のものをくれ。俺はもうどうなっても知らんぞ」

キズナの額に青筋が浮かぶのを見て、俺は引っこ込む。触らぬ神……いや、馬鹿にたたりなし、だ。

まあ、キズナにその気がなければ、どうせ俺は手を出せないしな。

「分かってるわよ！ アンタはそこで黙ってなさい！」

どうやら感情がキズナの堪忍袋の緒を断ち切ってしまったようだ。こうなってはもう手が付けられない。

キズナは身体の反動を利用して跳ね起きると、短すぎるミニスカートの裾を乱暴に払う。揺れるミニスカートからのぞくのは、キズ

ナお気に入りの黒い下着。

……相変わらず黒が好きな奴だ。

黒はもつと大人見た女性が着てこそ、色気が出るというのに。お前みたいなお子様は、水玉模様か、クマさんパッチが分相応というものだ。

そもそも姿は女学生と変わらない制服姿……ま、対魔法用の特殊な繊維で編まれてはいるから、一概に制服とは言えないのだが。加え、胸は発展途上にしろ、成長限界にしろ、一見して分からないほどしかない。まるでイチゴののつていないショートケーキ。やはり胸は大きいに限る。大は小を兼ねるものだからな。

「……黙れと言っただけだ？」

「おっと、失礼」

慌てて口にチャックする。いけない口だな、うん。

「あゝ……良い感じに、いらついてきたわ」

膝に血がにじんでいるのを見たキズナは、より一層怒りのボルテージを上げていく。

女のヒステリーは嫌いだ。何をしでかすか分からない。

「……制服、傷ついちゃった」

だったら日頃から着るなよ、とは口が裂けても言えない。

「高いのに」

オーダーメイドだからな。

「高いのに！」

わざわざ二回言うほどのことか？

ゾンビのようにゆらりゆらりとスーツ姿の男に近寄っていくキズナ。

そのあまりの無防備さをやけっぱちと見たのか、男は残りの魔力を拳に収束させ、接近戦を挑んでくる。

物理的な手段で、直接手を下そうという算段らしい。

戦いぶりを少しだけ見た感じでは、男はなかなかの手練れだ。とどめをさそうとする行為にも手を抜いていない。

敵が一人ならば、例えば相手は何であろうと全力でしとめる。

その気概がスーツ男に見て取れた。敵対するには嫌な傾向だ。

男の足が魔力によって補助されている。加えて拳にも同等の魔力。足首と拳の周囲を輝く文字列が踊っている。

「加速、強打」

聞こえた男のつぶやきは二つ。つまりは、単詠唱魔法を同時に二つ。

やはり、手を抜いている様子はない。

「……クリーニング代、高くつくわよ」

対するキズナのつぶやきは、男の耳には入らなかったであろう。地面を蹴る直前に、魔力が男のスピードをアシストした。魔力を風に変換したらしい。男の靴の裏から吹き上がるように風が吹いたかと思うと、急接近してくる。男の蹴った地面はくぼみ、いびつな

靴跡を残す。一呼吸の間もおかずにキズナの目の前まで切迫。

男は魔力の込められた必殺の拳を振り抜く。

キズナは避けることが出来ずに、拳は顔面を直撃。

キズナは脳天を砕かれて即死する。

排除完了。

……それが男の描いたシナリオだろう。

だが、残念ながらシナリオは編集長によって却下される。  
編集長はもちろん。

「残念でした」

キズナ。馬鹿だが、一応自慢の弟子だ。

「私の相手じゃなかったみたい」

男は目を見開いた。

確かに殴りつけたはずのキズナの顔面。

しかし、キズナはそこにはおらず、男はキズナに耳元でささやかれる。

男の背には戦慄が駆け抜けたはずだ。

敵として認識していたはずの女が、一度は下したと思えた弱者が、絶対的な捕食者へと変貌したのだから。

男は恐怖を振り払うようにキズナに裏拳を見舞う。

風の魔力まとった強力な裏拳。

触れればコンクリートの難なく破壊することのできる鉄の拳。

だが、キズナはそれを容易に受け止めた。魔力をまとわないキズナの手のひらは、渦巻く魔力に削り取られて裂傷を負っている。

痛みさえも忘れたか、キズナよ。

……いかな、アドレナリンがあふれ出しているぞ。

もはや男は化け物でも見るような体だ。

キズナはそんな男を一撃のもとに葬り去る。

キレると強くなるというのは普段おとなしいヤツに適用される語句だと思っていたが。

いやはや、天然というか、不器用というか。

体中に魔力をみなぎらせて、常人にはとらえられない速度にまで加速をかけている。青白く輝く文字列と化した魔力が、縦横無尽にキズナの周囲を駆けめぐり、キズナの動きに遅れてキズナを追随する。

普段からこんな風に魔力をコントロールできると痛い目を見ないですむのに、とは口が裂けても言えない。

間違っても、ヘタレとは言わないで欲しい。

キズナの掌底をうけた男は、レンガの壁を突き抜けていく。

さらにはレンガの先にあつた壁を一枚つきぬけ、冷蔵庫にぶつかつてようやく止まる。

中にいたおばさんが、冷蔵庫から取り出した牛肉を握りしめた態勢で目を丸くしていた。今までそこにあつたはずの食物満載の冷蔵庫は横倒しになり、それを抱きしめて男が失神している。

……ああ、叫ぶな、きつと。

俺の予想通り、我に返つたおばさんの悲鳴が路地裏にまでとどいた。

悲鳴は耳をつんざくばかりだ。腹の底からの叫びを上げたおばさんが、牛肉を放り出して逃げ出す。



俺の方に弧を描いて飛んでくる牛肉。

おお！ 見目麗しき高級肉ではないか。美味しそうだ。キズナ、キャッチしてくれ。地面に落ちる前に！

願いも空しく、キズナは牛肉を無視して、残りの男に突進していく。

ぎゅ、牛肉が！

思いつきり手を延ばすが、すんでのところで届かない。

ふわりと舞った牛肉。

スローモーション。

伸ばす俺の手。

訪れたのは……悲劇。

高級牛肉は、俺の悲しみの涙とともに路地裏の汚れた地面にぽとりと落ちていた。

俺がこらえきれない涙とともに牛肉の哀悼を祈っているうちに、勝敗は決する。

男の単詠唱魔法よりも早く、キズナは懷に潜り込んでいた。

「馬鹿な！ 早すぎ るっっ！」

それが男の最後の言葉となった。語尾が悲鳴とが混ざり合い、高速で路地裏を滑っていく。

牛肉を失った悲しみ。涙でかすむ視界で見れば、男がゴミにまみれて転がっていた。生ゴミや破れたストッキングを頭に乘せて、だらしく気を失っている。

時間差で落ちてきたポリバケツのふたが、男の顔を覆い隠す。まるで臨終の白いハンカチ。

どうやら片は付いたようだな。

キズナは大きく息を吐く。体の周りを周回していた魔力の文字列が、息とともに空気中に霧散していった。それに伴い、怒りもどこかへ飛んでいったようだ。

いや、殴り飛ばしてストレス発散といったところか。まったく、単純な奴だ。

直後、キズナは尻餅をついてぐったりとしてしまう。

「【せきわい鵲鴿】を使わずに撃退したことは褒めてやろう」

「ありがと、素直に受け取っておくわ」

「それよりも、だ」

声色の変わった俺の声に、キズナの顔がとたんに渋面になる。

「時代後れの時間を要する詠唱魔法。ノーモーションから放てる単詠唱魔法。両者とも威力は同じ。この二つから選べと言うなら、俺は後者を選ぶぞ」

「分かってる、分かってるわよ。もうそのセリフは聞き飽きたわ」

「分かっていてしないのは、愚の骨頂だ」

「……………できないんだからしょうがないじゃない」

唇を尖らせて抗議してくる。

「もっとよく練習しないからだ。そもそもキズナはいつも」

「あゝはいはい。そだ、リニオ。例のものよ」

キズナがヒップバックに手を突っ込む。迷い無く例のものを一つかみし、無造作に放り投げた。

「ふおおおおおっ！ ひまわりの種！ ひまわりの種えええええっ！」

きらきらと輝く宝石のような種。

俺は狂ったように飛び出し、空中で見事に種をキャッチする。

素早く着地すると、落ちてくる残りの種を両手と口で次々にキャッチしていく。

見事、全てを確保し、十点満点の試技。スポットライトを浴びたなら、拍手喝采だろうな。思わずダンディズム溢れるポーズを決めてしまう格好良い俺。

「ふっ……師匠といえど所詮はリニオ。気をそらすのなんて造作もないわね」

キズナがいやらしい笑みを浮かべていた。

くっ……師匠を見下すような目は、非常に許し難い。

しかし、ま、今回はひまわりの種に免じて許してやるとしよう。

本当に心が広いな、俺は。

「はあはあ……なんていやらしいラインなんだ、お前は……そうやっていつも俺の心を興奮させる……はあはあ……ここか？ ここがええのんか？」

食べてしまいたくなる衝動を抑えて、ひまわりの種を愛撫する。ストイックな俺。ひまわりの種を愛でるなんて、罪な男だぜ俺は。

……二度目になるが、ここでも言わせてくれ。

「俺は、そんな自分が大好きなんだっ！」

「大変態、気持ち悪い」

毎度失礼だぞ、キズナ。

あ……ちなみに、俺か？

キズナの胸ポケットにいた世界一かわいい愛玩動物。

ひまわりの種を優しく愛撫するハムスター、それが俺だ。

何か色々と大事なことを忘れている気がしないでもないが、そのうち思い出すだろう。それよりも、今はひまわりの種を愛でてやることが先決だ。

言い忘れていたが……俺は雑食である。

## 第一話・「……………狙い通りね」

……………凶悪だ。凶悪すぎる。

ひまわりの種を頬張りながら、俺はある一点をじっと見つめていた。

「この度は、本当にありがとうございました」

先程助けた民間人が、キズナに向かって鷹揚に一礼する。長い黒髪ポニーテールが肩口から胸元に向かって落ちてくる。黒髪を挟み込むようにして屹立する二つの大きな谷間は、見ているものを釘付けにする大きさと形を誇っていた。

むむう……………やはり俺の見込んだとおりだ。着ているメイド服は所々つぎはぎだらけで痛んでいる一方で、つぎはぎのぬい間が、押し上げられる内側の弾力に今にもはじけ飛びそうになっている。なんというか、こう……………苦しそうな胸元を楽にしてあげたいとさえ思える。そのためには、まずはそのエプロンを取っ払ってしまおう、うん、それが良い。

（ねえ、馬鹿。馬鹿リニオ）

（なんだ、馬鹿キズナ。俺のことは師匠と呼べといつも言っているだろう）

深々と頭を垂れる女に聞こえないように小声で会話する。人語を話すハムスターというものは、俺という例外を除いてこの世界には存在しない。発見されれば色々と面倒であるのは明らかだ。自ずと

人前では、小声での会話が必須となる。

（用事がないなら呼ぶんじゃない。俺は今忙しいんだ）

（へえ、どこがどう忙しいのかしらね）

（もちろん研究だ）

キズナが胸元のポケットにいる俺に向かって、ジト目を向けてくる。俺はそれには気がつかない振りをし、頭を下げ続けている女を観察して……お、おおっ……頭を下げているから、まるで熟した二つのリンゴが今にも枝から落ちそうなぐらいに、たわわに、たわわにつっ！

（キズナ、師匠の崇高なる研究のために彼女のエプロンを脱がせるがいい）

（ド直球でくるわけ！？）

（直球でも変化球でもいい。俺はアスファルトで寝るより、羽毛の布団で寝たいのだ）

俺は女の胸、キズナの胸とを見比べる。

「……それは遠回しに私の身体的特徴を言っているわね？」

ポケットの縁から両腕を垂らしていた俺は、怒り心頭のキズナにつまみ出され、あろうことかキズナは俺のひげを両手で持つ体勢へ移行する。

「おい、引っ張るな！ ひげを引っ張るな！ 抜ける！ せつかくセツトしたのに抜けてしまいうつつ！」

「抜ける、抜けてしまえっ！ アンタなんかただの変態よ！」

「あ、あの……一体どなたと会話なされているんですか？」

「えっ！？」

（フゴッ！？……むぐう……キズナ……貴様、無理矢理……！）

慌てたキズナによって、胸ポケットに乱暴に押し込まれる俺。

「いや、なんでもないのよ、なんでも！ あはは……」

頭からポケットに押し込まれ、足だけを胸ポケットに出したままの体勢は非常に息苦しい。

（…………く、くそ……息苦しいぞ、キズナ……体勢のせいか鼻が押さえつけられて……全く、態度が態度なら、胸も胸だな。弾力の欠片もないこの胸……もみもみ……やはり成長が感じられんな。何とかならない フゴゴッ！？）

（…………どさくさに紛れて私の胸を揉むんじゃないわよっ！ この腐れエロネズミ！）

「あ、あの……大丈夫なのですか？」

気を失いかける俺。

どこからか天使のような声が聞こえる。

「ねずみさんがとても苦しそうにもがいていらっしやるのですが…」

「はっ!？」

胸ポケットを押さえていた手をどけるキズナ。

「大丈夫、ノープロBLEM、問題なし！　これが飼い主としてのスタンダードなのよ！」

「そ、そうなんですか……？　それならばよいのですが」

よくない！　それに誰が飼い主か！　俺はこの馬鹿弟子の師匠だぞ！　勘違いするな女！

落ちそうになるほどぶんぶん両腕を振って抗議する。そんな俺の頭を指で押さえながら、キズナはあきれたようにため息をつく。

「ふふ、ペットさんと仲がよろしいんですね」

俺たちを見て口元に手を当てて上品に笑う。

初めて胸以外を見たが、なかなかの美人だ。どこかおっとりとした雰囲気を感じさせる垂れ目を、長いまつげが覆っている。少しふっくらとした風体だが、脂肪が多いという印象は全くない。受ける印象があるとすれば、豊満、だろう。

加えて、豊満だからこそもてる安心感、抱擁力のようなものが、見ているだけで自然と心に広がっていくようだった。肩口から下がる黒髪のポニーテールは光りを称えながら、つややかな潤いを保っている。

そのポニーテールはまるで溪谷の間に築かれた道路。



その意味するところは、彼女の最大で最強の象徴にある。

ふむ……やはり、大は小を兼ねるな。

「私は、ティアナ・ノーリンと申します」

再び頭を下げる。仕草はあくまで丁寧かつ鷹揚。その風体も相まって、おっとりとした雰囲気がある。場を包み込んでいく。まるで時間の流れを遅らせていると感じるほどに。

「ふーん、ティアナね。私はキズナ・タカナシ。こっちはペットのリニオ」

頭を上げたティアナにふんぞり返るように自己紹介を返す。なんだ、このふてぶてしさは。まるでオセロの表裏。誤答と正答。分かってはいたが、ティアナの爪の垢を煎じて飲ませたいぞ。

「それじゃ、改めましてリニオちゃん、よろしくね」

「チュウ！」

俺の鼻先に差し出された人差し指を、握手とばかりに両手でつかんでやる。

ふっ……かわいいハムスターを演じてやることも人を欺くには必要なのさ。

「あら、自己紹介をしてくれるの？ リニオちゃんはお利口さんね」

屈んで俺をのぞき込んでくるから、胸元が……谷間が！

……さらには、もう少しで頂に咲く百合の花をつ！

「チュウ！ チュチュウ！」

ゴクリ……もう少しだ……ハアハア……もう少し……。

ん？ ……おい、キズナ、その目はなんだ。

止める！ 軽蔑するような目でこっちを見るんじゃない！

く……師匠をそんな目で見るとは、許せん。

俺がキズナの教育方針を真剣に考えていると、突然、下方から地響きのような音が発生した。地震ではない。爆発でもない。発生源は、キズナであった。

「あら、まあ……キズナさんったら。ふふふ」

恥ずかしい。俺は恥ずかしいぞ、キズナ。

「ふんっ、我慢してたのっ！ 戦っている最中だって、ずっと……お腹……減ってたんだからっ……」

俺を見下していたのは一瞬で吹き飛んで、真っ赤になってそっぽを向くキズナ。

子供のような仕草で頬をふくらませる。

「でしたら、こうしませんか？」

ティアナの顔が楽しそうに華やぐ。何かを思いついたのか、胸元で、ぱん、と両手を一叩き。その勢いでたわわに実った果実が上下に揺れる。……重力、万歳。

「私にお礼をさせてください。こつ見えても私、宿屋のオーナーなんですよ」

「……………狙い通りね」

きらりと瞳が輝く。

「はい？ 何か言いました？」

頭に疑問符を浮かべるティアナ。

「うつん、なんでもない。それより、遠慮無くごちそうしてくれるんでしょね？ 私ってば、もう魔法を唱えることも出来ないほど空腹なの」

「ええ、もちろんです。遠慮なんてなさらないでください。キズナさんは命の恩人なのでから」

ティアナ、キズナは遠慮なんてしていないぞ。

## 第二話・「最重要最優先事項なのだ！」

ゆつたりとしたスピードで街道に行くティアナ。

「ねえ、まだ着かないの？」

「はい、もう少しお待ち下さい」

ティアナの斜め後ろに付き従いながら、キズナは愚痴をもらす。おっとりとした口調が後ろに流れてくる。ティアナの背中で時計の振り子ように揺れるポニーテールを眺めながら、俺はこの顛末を考えていた。

……………狙い通りね。そうキズナが言った顛末だ。

（今更、罪悪感にでも駆られているわけ？）

（いや、そういうわけではないが……）

たまたまだ。たまたま路地裏に逃げ込んでいくティアナと、追いかけるスーツ男を目撃した。端から見ても短時間で終わる鬼ごっこに、俺たちは遭遇したのだった。助ける義理はない。しかし、俺たちはなんというか……。

慢性的な金欠だった。

邪悪な笑みを浮かべたキズナは、俺に悪魔のような声色でささやいてきた。

情けは人のためならず、いい言葉よね。

空腹とは人の判断力をこうも鈍らせるのか。ひまわりの種は安価なのでそうでもないのだが、大食らいのキズナにしては別だった。さかのぼること一週間。前にいた町でも散々な目に遭った。キズナは、色々と金のかかる問題ばかりを起こす。そのせいでオーダーメイドの対魔法用制服は破損するわ、破壊した施設の修復費用はかさむわで、金はあつと言う間に底をつく。馬鹿な弟子を持つと、色々大変なのだ。そのくせ、キズナはいつこうにそういった自分を変えようとしなない。一度寝て起きてしまえば、罪の意識はどこへやら。

お前はニワトリか。三歩歩けば忘れるほど健忘症なのか。

（言っておくけど、リニオも共犯なんだからね？ 私はぎりぎりまで思いとどまっていたんだから）

（確かに、ゴミ箱の影からうかがっていたな）

宿までの案内役であるティアナに気がつかれないように、師弟で声量を下げる。

（そうよ、でも私の一言でノリノリになったじゃない）

（ノリノリではない渋々だ）

そこは重要なので、きつちり否定させてもらおう。

（嘘ね、その証拠に……）

へっへ、師匠、あいつら女をつれてますぜ。（注・キズナ）

男は殺せ。女は……（チラリ）……好きにしる。（注・リニオ）

（あの少ない間で、胸を見て判断下すアンタはすごいわよ）

（く……我が弟子がなかなかの観察力だ。だが、俺は自分の名誉のために、あえて最後まで否認させてもらう）

（ふん、往生際が悪いわね。でも、恩を着せて飯にありつこうっていうのは、無事に成功したじゃない。それに胸も大きかったし）

（ああ、俺の見立てに間違いはなかった。あれはいい胸だ）

（……………）

お前も、そんな人を卑下する笑みを浮かべられるようになったんだな、キズナ。師匠として、本当に悲しい。

（……キズナよ）

（ふふん、一応、弁解ぐらいは聞いてあげないでもないわ）

（今の俺の発言に対して、議事録からの削除を要求するっ！）

キズナは無言でにっこりと笑い、俺はその笑みにわずかな救いを見出そうとする。

（もちろん！ 却下っ！）

そんな救いは、すぐるだけ無駄だった。

「キズナさん、着きました。ここが……」

墓穴　胸ポケット　に落ちて、墓穴の中でのたうち回る俺など知るよしもなく、ティアナが誇らしげな声をかけてくる。

「ここが私の経営する宿屋、【旅人の止まり木】です」

言って指差したそこには、確かに【旅人の止まり木】という看板が張り付けてあった。

「え？ ……ここ、なの？」

「そうですよ、ここです」

満面の笑みで応えるティアナに、口角を引きつらせるキズナ。無理もない。宿屋と言うには、あまりにもそこは寂れ、廃れていた。

何気なくこの宿の前を通った旅人に、ここは実は廃屋なんです、と告げたとする。すると旅人はもれなく、そうですね、と二つ返事で納得してしまうだろう。

それぐらいにボロボロだった。

風が吹けば立て付けの悪い看板が貧血で倒れそうになり、補修だらけの壁が悲鳴を上げ、屋根がなんとか飛ばされまいと釘にすがりつくだろう。すきま風上等、そんな言葉が聞こえてきそうだった。

きつと雨が降れば家の天井が涙を流し、テープで繋ぎ止めてある窓ガラスの隙間から冷たい水がにじみ出すに決まっている。【旅人の止まり木】という宿屋らしいが、旅人が止まるにはあまりに弱々しい木であった。というか、人間とは別の生き物を常駐させていそ

うな雰囲気だ。

俺は巨大な不安に駆られ始める。

「皆さん最初は驚かれるんですよ、でも安心してください、ちゃんと泊まりますから」

泊まれなかったら、そもそも宿屋ではない。

「ま、まあ、見かけだけってことはあるわよね……？」

「大丈夫です、キズナさん。見かけ通りですので」

……何が大丈夫なんだ？

胸ポケットからキズナを見れば、ほっとしようとした息を詰まらせて、盛大に咳き込んでいるところだった。

「ささ、どうぞです」

客を案内することが嬉しいのか、花咲くような笑顔を浮かべて宿に入っていく。咳き込んでいるキズナがやっと思を整えたところで、俺はこそつとキズナに声をかける。

（おい、キズナ）

宿屋の廃れ具合を我慢する決心をしたのか、それとも空腹が疑問の余地を与えなかったのか、キズナはティアナの笑顔につられて宿屋の玄関を通り抜けようとする。



（何よ、またなの？）

あきれたような視線で俺を見てくる。声には気だるさのおまけ付き。

「またって言うな、またって！」

思わず声を出してしまう。

「これは死活問題なんだぞ！ 最重要最優先事項なのだ！」

俺はキズナの顔をひつかいてやろうとぶんぶんと腕を振り回すが、いかんせん手が短いので届かない。しつぽで叩いてやろうと思ったが、やっぱり届かなかった。……空しい。

「ティアナ、リニオが嬉しそうにしてるわよ」

「まあ、この宿を気に入っていただけたようで嬉しいですよ」

違うから！？

勢いのあまり身を乗り出してしまい、危うく胸ポケットから落ちかける。

（ええい！ キズナ、これは師匠命令だ！ ティアナに早く聞くのだ！ この宿に我が永遠の天敵）

俺はごくりとつばを飲む。

（あの【猫】がいないか、侵入経路や、たまり場、品種、利き腕に

至るまでな！ それと近隣の住宅に飼い猫がいないか、良く飼い慣らされているかいないか、とりあえず思いつくだけの猫の情報を子細詳しく！)

(イヤよ、面倒くさい)

(師匠の生死がかかっているんだぞ！？ 俺が猫に食べられてもお前は良いのか！？)

(イヤよ、面倒くさい)

(鬼畜っ！ なんとる鬼畜っ！ 同じ言葉を繰り返すあたりにいつそ面倒くさが感じられる！？)

振られた恋人にすぎるように、キズナの制服を必死に引つ張る俺。

(いいか……彼奴等<sup>きやつら</sup>は恐ろしい……忘れもしない、あの眼光……あの強靱で柔軟な体躯と狡猾な頭脳を駆使して、鋭い爪と牙を振りかざし必殺とばかりに襲いかかってくるのだぞ！？ 彼奴等は、キャッツらは……)

「ティアナ、リニオがさつきよりも嬉しそうにしてるわよ」

「もう、リニオちゃんったら、はしゃぎすぎですよ」

だから、違うと！？ それにキズナが俺のユーモアを流した！？

「分った、分ったわよ……。あゝ、それはそうとティアナ、ここら辺ってけっこう猫っているの？」

「そうですね、昨日なんて調理中、お魚を持って行かれちゃいました」

……俺は泡を吹いていた。

### 第三話・「クソネズミとませガキ」

もりもりばくばくむしゃむしゃ、ごくん。  
もりもりばくばくむしゃむしゃ、ごくん。

擬音語で説明してみたわけだが、分っていたただけであろうか。  
分っていたただけのであれば……嬉しい。

「おかわり！ 特急よ！」

「はいはい、もう少し待ってくださいね」

食堂の奥、調理場からほのぼのとした声が響いてくる。

「少しも待つてられないわよ、私の胃袋は！ 超よ！ 超特急！」

お聞きの通り、キズナの食べっぷりと言ったら、それはそれは豪  
快で、女であることをとくに捨て去っている。拳が一つはいらん  
ばかりに口を開いたかと思えば、フォークを突き刺したステーキを  
一口で口の中へ放り込む。

真っ白で強靱な歯、虫歯一つ無い圧倒的なナチュラルパワーで、  
口に含んだ食物をあつと言う間に咀嚼する。

鯨飲馬食とは言うが、きっとこの光景に対しての言葉だろうな。  
我が弟子ながら遠慮と慎みと作法を放棄した姿に、俺は頭痛を隠  
せない。キズナがヒップバックから取り出したひまわりの種を優し  
く愛でながら、俺はそれらを頬袋に詰め込んでいく。

実は、この瞬間がたまらなかったりする。

口の中を大好きなもので埋め尽くすのだ。愛で埋め尽くすと言い  
換えてもいいだろう。つまりそれは一種のハーレムの快樂でもあ

り、疲れた身体でバスタブに肩まで使ったときの極楽感にも似ている。

「リニオ……もぐもぐ……アンタはこの料理食べないの？」

「飲み込んでから話せ、行儀が悪い」

「あにほ……はんはも……ごっくん……食べながら話してるじゃない」

「俺は食べてなどいない。その証拠にほら、頬袋に」

俺は口を開けて見せてやった。

「ほらな、食べてないだろう」

「うげ……アンタ、自分で言っていることと、やってることが矛盾してることに気がつきなさいよ」

「これがハムスターなのだ。生き物の存在を頭から否定するな」

「いや、そんなコトするハムスターはアンタだけだから」

食べ物が無くなったテーブルに頬杖をして、フォークで俺を指し示すキズナ。

そのとき、調理場から聞こえてくる調理器具の軽快な音の合間に、玄関が開く音が混じった。

「姉さん、ただいま」

それは小柄な少女だった。

「…………む？」

「何よ、この子」

首をかしげながらも、皿に付いていたソースを指で取り、それを口に持っていくキズナ。意地汚い奴。お前は、こういうときぐらい少しは食欲と決別しろ。

「あ、イリスちゃん、おかえりなさい」

調理場から大皿を抱えてやってくるティアナ。少女……イリスに挨拶をして気を取られたのか、ボロ屋ゆえの段差につまづいてしまう。哀れ大皿が宙を舞い、山盛りのパスタが無重力状態となる。

「姉さん、保安官呼んでくるから」

顔色一つ変えずに、玄関に引き返そうとする。

「ちょっと待ちなさいよっ！…………もぐもぐ…………あら、これいけるじゃない」

転んだティアナを助けずに、パスタを助けるとは、お前は鬼か。

「あ、ありがとうございます……………」

顔面を床にぶつけたままティアナが返事をする。シュールな光景だな。

「やっぱり、保安官呼んでくる」

「あ、イリスちゃん、違うのよ、私はこの人に危ないところを助けられたの」

「……本当なの？」

「本当」

「そ、ならいい」

「何よ、このちびっ子は。いきなり失礼かましてくれちゃって」

お前が言うな。

「それに礼儀がなっていないわね」

だから、お前が言うな。

俺は弟子に対して特大のため息をついてやった。だが、そんな俺にキズナは気がつくはずもなく。

「イリスちゃん、この人はね、キズナ・タカナシさんといって、とても強いのよ」

あつと言う間にパスタを食らい尽くしたキズナが、貧相な胸を張っている。

「ふふん、遠慮はいらないわ。もっと褒め称えていいのよ」

……。につこりと笑って沈黙を埋めるティアナ。

「それで、この子がリニオ・カーティスさん。キズナさんのペ  
ットです」

「ちょちよつ、ちょつと！ 他にはないわけ！？」

身の程を知れ、キズナ。俺はそれだけを声を大にして言いたい。

「あ……」

少女のつぶやく声が聞こえた。

俺の紹介が終わったと思ったら、いつの間にか少女が俺の目の前  
までやってきて、しゃがんで顔を寄せてくる。とてつもない早業だ  
った。

床に着きそうなほどの長い髪が、思い出したように重力に引かれ  
て落ちてくる。ふんわりと少女の髪が元の位置に戻る様は、まるで  
天使が舞い降りたよう。俺をのぞき込んでくるつばらな瞳は瑠璃色  
で、ラピスラズリもかすむほどの清廉さを誇っていた。鼻梁の通っ  
た童顔は、小さく人形のように端正。美麗な白磁器のような肌と、  
小柄な体つきは、図らずも幼児体型を如実に表している。服装は残  
念ながらティアナと同じボロボロのメイド服。姉と呼んだティアナ  
とは比べるまでもなく圧倒的にボリウム不足の体つき。

見る人が見ればそれはステータスなのかも知れないが、俺は残念  
ながら興奮の一つも覚えなかった。キズナと同じく、俺の守備範囲  
ではない。俺はティアナのような豊満な女が好きなのだ。

大は小を兼ね、小には出来ないことを大は出来る。大に出来て、  
小に出来ないことは山ほどある。この差は大きいのだ。

「ふふ……かわいい。……私は、イリス、よろしく」



悪戯っ子のような微笑。どうやら、無表情というわけではないらしい。

とすると限りなく無表情に近いだけなのかも知れない。

「えい……えい……ぷにぷに……」

無遠慮に指で俺の頬をつついてくる。  
ぬ、く……失礼な奴だな。

「……ハムスター……ムス太……おい、ムス太……」

虫の鳴くような声で俺の頬袋つついてくる。や、止め、止める、俺はひまわりの種を……く、くすぐりたいぞ、コラ。

それにムス太ってなんだ？ さっきティアナが紹介しただろう。俺はリニオ・カーティスだ。偉大なるリニオだぞ。

……と声に出したいが、出来ない。なんだ、このジレンマは。

「あらあら、イリスちゃんが夢中になるなんて珍しい」

「よしよし……良い子、良い子……」

頭を撫でられた。ちょっと嬉しい。

「ねえ、ちょっと、そこのガキ」

キズナの声がしたような、しないような。

「ムス太……ひまわりの種、好き？」

こくこくこくこく。俺は反射的にうなずいてしまった。  
ふっ……本能って奴はこれだから……。

「ムス太、ひまわりの種、あげる」

「チュウ！」

手品かなのか、大量のひまわりの種がイリスの手からこぼれ出す。

俺は知らずの内に歓喜にしっぱを振り回していた。……負けたぜ、俺の負けだよ。もう、どうにでもしやがれ。

「……姉さん、私……この子に一目惚れしたみたい。ムス太も……私と居たいって」

ひまわりの種。ひまわりの種。右も左も、ひまわりの種。

ふふ……今日はどいつを愛でてやろうか。お前か？ それともお前か？ おいおい、みんなそんな目で見るな。順番だぞ。順番に並んでくれ。なに？ 嫉妬してしまうって？ 安心してくれ、俺はそんな狭量な男じゃない。みんな同じぐらい愛してやるさ……ふふ、ふふ、ふふふ……じゅるり。

「おい、コラ、クソネズミとませガキ」

現実世界から乖離していた俺の意識が、物々しい声によって強引に連れ戻される。異様なオーラをまとったキズナが、しゃがみ込むイリスと愛人（ひまわりの種）に囲まれる俺を見下していた。

「簡単に懐柔されてるんじゃないわよ！ 馬鹿！」

右手が一閃したかと思うと、俺はキズナに首根っこをひつつかまれている。

「あ……ムス太……」

名残惜しそうな瞳と、か細い声。俺と遊んでいたときのイリスの笑顔は、一瞬でもとの無表情に戻ってしまう。

「いい？ コイツは私のペットなの！ あんたなんかにあげたりしないの！ 分かった？」

（ペットではない、師匠だ）

（黙れ、浮気者）

（ふん……それは嫉妬か？ ……あ、いや、訂正する）

キズナの眼光があまりにも鋭利すぎて、俺は慌てて訂正していた。今の殺気は、百戦錬磨の強者でも射すくめられる。

「そう言うことだから、私の許可なく勝手なコトしないで」

「……………」

キズナの鋭い視線に負けず劣らず、イリスも冷たい視線をキズナにぶつける。いまにも戦いの火ぶたが切って落とされそうな雰囲気だ。まさに一触即発だな。

「あのあの、皆さん、仲良くしてください」

慌てた様子でティアナが仲裁に入ってくる。

「お腹が減っているから、イライラしちゃうんですよ、皆さん仲良くご飯にしましょう」

「そうね、私も大人げなかったわ」

日頃からな。

「……」

さつさと席に着いてしまうキズナ。俺はキズナの胸ポケットに戻さてしまい、動くに動けなくなってしまう。そんな俺の姿を、イリスは寂しそうに見つめている。ティアナは人数分の食事を用意するようで、急ぎ足で調理室に戻っていく。途中でつまずいて転びそうになっているのが何とも不安だった。

キズナに怒鳴られてから、イリスは微動だにしないで、置物のようになたずんでいる。俺と遊んでいたときのような笑顔も、声も、そこにはなかった。ただ、キズナの胸ポケットにいる俺を、哀切な瞳でじっと見つめているだけ。

……まったく。

（キズナ、お前は大人だよな？）

栗色のツインテールをかき分けて、キズナに耳打ちする。

（そうよ、だから？）

俺はそれ以上何も言わず、キズナの肩口から食卓へと飛び移った。

「ちよつと！ リニオ！」

キズナが平らげた皿の間隙をすり抜け、イスに飛び乗る。そこから床に降りると、小柄な天使の人形の元へ走り寄る。ボロボロのメイド服をまとう美しい少女。つぶらな瞳に俺の美麗な姿が大写しになっている。俺はイリスに向かって両手を伸ばす。イリスはそんな俺を手のひらに包み込むと、優しく抱きしめてくる。きめの細かい肌。深遠な瞳。吸い込まれそうだった。

ふむ……不思議な少女に出会ったものだ。

「……ムス太、優しい……大好き」

……いいか、本来ならば胸のない女などには近付いたりしないのだぞ。今日は、その……特別だ。……って、こら、イリス、頼ずりするな。

「……ふん、大人なんだから。私は大人なんだから……」

ぶつぶつ言っているキズナと、嬉しそうに微笑むイリスに辟易する。

「さ、ご飯にしましょう」

両手に皿を持って、楽しそうに食卓に料理を並べていく。  
そんなティアナの揺れる双丘だけが、俺の一服の清涼剤だった。

第四話・「……よほど欲に目がくらんだのね」

「れおぼるどぺらん？ 何それ？ 食べ物？」

食後の紅茶を味わうこともなく飲み干すキズナが、初めて他国語を習う素人のようにティアナの告白をオウム返しにした。

「いいえ、レオポルド・ペランは人間です。彼は食べられませんよ」

語尾を伸ばすこともなく、落ち込んだ気分で言葉を吐き出す。

俺の観察の結果、気分が良いときでないと、語尾は伸びないらしいことが判明した。

蛇足だが、胸の大きさはキズナの六まわり上であるということも分った。テーブルに腕をのせながら話しているだけなのに、その有り余る柔和な脂質はテーブルの上に乗ってしまっている。

ふむ……キズナにも分けてやりたい。

「彼は、この町を裏の法律と言っても過言ではない権力者なのです」

「……そう……ペランが右と言ったら右。……左と言ったら左。これは……絶対なの」

「ふん、なんかむかつく奴ね。世の中自分の思い通りになると思っているような奴って、いなさそうで必ずいるのよね。まるで食べ物があると寄ってくる茶色の甲殻虫みたい」

キズナ、お前は一度自分というものを見つめ直した方が良いと思う。でなければ、自分探しの旅に出る。ふっ、我ながら、ナイスなアイディアだ。

そう思わないか、キズナ？

足を組んでふんぞり返るキズナに、心の中で問いかける。

「でも、それと今日ティアナが襲われていたことってなんの関係があるのよ？ 何かそいつの気に触るようなことでもしたの？」

考え込み、少しの間をおいて馬鹿にするような顔つきでティアナをのぞき込む。

「あ、ぺらんぺらんとか言って馬鹿にしたんでしょ？ 馬鹿ねー、ティアナは」

ティアナはそんなことはしない。するとしたら、お前だけだぞ。

「……姉さんは、そんなこと言わない。言うとしたら、キズナだけ」

小さな声で姉をかばうイリス。お、なかなか気が合うな。

いらだつキズナに俺の足場が危くなる。俺はキズナの組んだ足の上でうとうとしかけていた。組み直される足の上で睡魔に襲われている俺が悪いのだが。

俺はうとうと天国と決別し、キズナの組んだ足の上からテーブルに飛び乗る。

キズナの近くは危ないかもしれないので、イリスの方に駆け寄る。イリスはそんな俺に気がつく、無表情を少しだけ笑みに変えて、そつと手のひらを差し出してくる。

……どうやら、乗ってこいということらしい。

「私とイリスちゃんは、義理の姉妹なんです」

今更の告白だな。そんなものは、胸の大きさを見れば分ることだ。

「悔しいけど、そんなの胸の大きさを見れば分ることよ」

……俺は今、無性に後悔している。まさか、お前と同レベルな発言をしてしまうとは。この偉大なる俺が、お前の馬鹿さ加減に感化されてしまったということなのか。

「……おいで、ムス太」

俺は失意の後押しのおかげ、半ばうなだれるようにイリスの手のひらに上で丸くなる。イリスはそんな俺を愛おしそうに見つめると、細く小さな指で俺の頬を撫でてくる。

「……眠い？ ……つんつん……ふふ、かわいい……」

おい、イリス、俺は少し眠いのだ。そつとして欲しいところだが……まあ、その無垢な瞳に癒えなければいけないだろう。これも大人のつとめというやつだ。俺の寛大さに感謝するんだな。

「この宿屋……【旅人の止まり木】は、身寄りのない私を育ててくれた、おじいさんとおばあさんが経営していたものです。私とイリスちゃんは孤児なんです。私がここで働かせてもらうようになって、五年目にイリスちゃんがやってきたんです」

キズナが一気飲みした紅茶が無くなっているのを目につけ、会話の間を告ぐようにティアナはティーポットから紅茶を注いでいく。柔らかな香りが、食後のテーブルを彩っていく。



「おじいさんとおばあさん、私とイリスちゃん、とても幸せでした。おじいさんとおばあさんが亡くなって、私がこの宿屋を継いでからも、何とか貧しいながらも頑張ってきたんです。私に幸せを教えてくださいましたおじいさんとおばあさん……お二人に報いたかったんです。お二人にいただいた幸せを、救っていただいたこの命をかけて。でも、それが出来なくなってしまった」

「過去形なわけね」

「はい……」

注ぎ終わったティーカップの中では、悲しげなティアナの顔が紅茶に反射していた。ティーポットから落ちた最後の一滴が、ティーカップに波紋を広げる。

「……ムス太、ムス太」

なんだ、イリス。俺は今日は色々あつて疲れているのだ。いい加減に眠らせろ。つついてくるイリスの指を、俺がしつぽではじく……という作業が、しばらく繰り返される。

「なら……奥の手」

「ごそごそ、という何かを探る音が、目をつぶった俺の隣から聞こえてくる。」

「……これは……なんでしょう」

イリスが空いている左手で何かをつまんで俺に差し出してくる。俺は香ってくるかぐわしい香りにたまらず目を開けていた。

……ん？ ……おおっ！ これはっ！？

驚天動地な魅惑のラインを称えつつも、決して肥大化することなく、太陽の光を浴びて健康的に育ち、なおかつ左右対称、中身がぎゅっしり詰まった高品質かつ艶やかなひまわりの種ではないかっ！

俺は一瞬のうちに目が覚めてしまっていた。

「ムス太……欲しいの？」

俺は手を伸ばす。

……だが、寸前のところでイリスがひまわりの種をお預けにした。  
む………どういふつもりだ、イリス。

「はい……ムス太」

そうそう、素直によこせばいいものを………どれどれ………。

「……………（ひょい）」

またしても種をつかむ寸前に遠ざかる。むむ………。

「ふふ………」

悪戯な笑みを浮かべているイリス。それは天使のように愛らしく、馬鹿な大人ならばころりとだまされてしまいそうな笑みだった。瑠璃色の瞳に、悪戯心の灯火がともる。瞳の色と同じ長い髪が楽しそうに揺れている。

……コイツ、俺を挑発しているな？

イリスがゆっくりひまわりの種を近付けてくる。

なめるな。ここは一時的に興味のない振りをして、あきらめたところを背後から一気に急襲してやる。題して、だるまさんが転んだ大作戦だ。

「……ムス太ー……種だよー……」

押して駄目なら引いてみる。個人の偉大なる教えを実践するのだ。

「……むう……いらないの……？」

悲しげな声が俺を包み込む。そろそろか……？ ひまわりの種の気配が遠ざかっていく。

「……いらないなら、しまっ」

あきらめたような氣勢。今だっ！ チャンスは今しかないっ！ 種を気にならない風を装っていたのを一変させて、狂気の瞳でダッシュにかかる。

種っ！ たああああねえええっ！

「ふ……」

イリスの瞳がきらりと光る。俺はそこに敗北を悟った。

しかし、敗北するからと言って、今更引き下がれない。兵士は戦うものを指す言葉。たとえ自軍が劣勢であろうとも、敗北が必至になろうとも、兵士は戦うことが宿命なのだ。戦わない兵士は兵士で

はない。戦うからこそ兵士として存在できる。いわば戦闘こそがアイデンティティー。

逃走という行為を忘れたバーサーカー、それが今の俺だ。

そこに敵がいる。愛したい者（ひまわりの種）がいる。

戦う理由はそれで十分だ。

それ以外に、何がいる？

否、何もいない！

背後から種を捕捉、後ろ足の筋力を最大限にまで高め、跳躍。俺は宙を舞い、腕を最大限に伸ばす。もう少しだ。もう少しで届く。だが、可憐な乙女の皮をかぶった小悪魔は、ぎりぎりのところで種を遠ざける。種の表面をかすめるだけに終わった俺の指は、恍惚の残滓を残して空を切った。

……むむむ……貴様、このリニオを愚弄する気か！？　許さん……  
…許さんぞ、イリス！

俺は空を切った体勢のまま、イリスの手のひらに着地する。そのまま、ひまわりの種の行方を探る。いまだ左手の指先にひまわりの種がある。対して俺は右の手のひら。その距離で、俺からひまわりの種を奪われなくても思ったか？　だとしたら、甘いな。

俺は、後ろ足二本立ちの体勢から、フリーだった両腕を地面に着く体勢へ。

知っているか？　ハムスターは四足歩行なんだぜ？

前足と後ろ足。臂力、加速力はこれで二倍と化した。俺はイリスの右の手のひらを駆け、手首を通り、さらに速度を上げる。半袖の

メイド服が近付いてくる。腕を駆け上り、肩へ。イリスがくすぐったそうにしているが、それはこの際どうでもいい。

イリスの肌から立ち上る小悪魔のように心をつかむ香りに頭がくらくらくしてくるが、俺はそんな誘惑には乗ったりしない。それが大人というものだ。

首元にたどり着くとロングヘアーが目の前を塞いでいる。俺は瑠璃色の滝に突っ込むとそのまま純白のうなじを突っ切り、反対側の滝を突き出る。

左肩にさしかかるが油断はしない。

勝利の余韻というものを、戦いの途中で味わおうとすることは、敗北に等しい。現実の戦いに勝利宣言などないのだから。誰かが勝利と言ってくれるわけでもない。たとえ勝利したとしても、それは戦士……兵士？ ……もう、どっちでもいい。とにかく戦士にとっては、勝利は次なる勝利までのスタートにすぎない。

余韻を味わうのは二流。

そうだ、戦士には勝利も敗北もない。

戦い続けることがアイデンティティーなのだから！

左手も半ばにさしかかったところで、俺は最後の跳躍のために後ろ足に最大限の負荷をかける。たわむ筋肉。俺は戦場（イリスの身体）を駆ける疾風になる。

身体を取り巻く風の音に視界がかすみ始めたとき、それは起こった。

左手にあったはずのひまわりの種が、今度は右手に移動していたのだ。

俺は驚愕する。何が起こったのか、少ない時間の中での判断を余儀なくされる。

導き出した答えは簡単だった。

纏っていた風を、身体を反転させることで捨て去り、元来た道程を最高速で引き返す。うなじを通り、右手へ引き返す。来た道を引き返した時間は、行きにかかった時間の半分。俺だからこそ出来る、まさに神業だった。

しかし、二度の驚愕に、俺は戦慄さえも覚えた。

ひまわりの種が、右手から左手へ、瞬間移動して居るではないか。それが二度三度と続き、さすがの俺も少しずつではあるが体力を消耗しつつある。本来ならば、消耗は漠然とした不安や、絶望を生み出す。

……が、俺は逆に失った体力を、ある感情が補填するのが分った。自分を突き動かそうとするのが分かった。

あえて一言で言おう、プライドだ。

……やるな、イリス……ならば俺も最大限の称賛を持って応えよう……。

この根比べ、貴様は最後まで追いついてこられるかっ！

「何を遊んでるの、あの馬鹿は？」

「うふふ……お二人とも楽しそうですね」

「あんなの、ただひまわりの種を右手から左手に持ち替えているだけじゃない」

「ぐるぐるぐるぐる……まるでメビウスの輪ですね」

「それすら気がつかないって……よほど欲に目がくらんだのね」

「ニンジンをぶら下げられた馬って感じですね」

「その例え、なかなかやるわね」

「うふ、ありがとうございます」

「……これで私の師匠って言うんだから、嫌になっちゃうわよ……」

「師匠……ですか？」

「あ、なんでもないのよ、なんでも。それより……んぐんぐ……ぷはっ！ ほら、紅茶無くなったわよ」

俺が何十回という往復運動に疲れ、遺憾ながら痛み分け宣言を心の中でしていると、ちょうどティアナがキズナに紅茶をついでいるところだった。

イリスが満足そうに俺を見てくる。

いいか、俺が遊んでやったんだぞ、それを忘れるな。決して遊ばれていたわけではないからな。

そこが大事だからな、勘違いするんじゃないぞ！

「話、途中になったけど……ペランに目がつけられる原因……一体あんた達二人に何があったの？」

俺は安息の地を求めて、イリスの頭のとっぺんにたどり着く。メイドらしい白い力チューシャに背を預けて、深く息を吐く。イリスの力チューシャから見える風景には、紅茶を無下に一気飲みするキ

ズナ。

「私ではないんです、原因は。……原因は。」

キズナの視線が俺をとらえたように見えたが、違う。俺を見ているように思えたのは、イリスを見ているからだ。俺がイリスの頭の上にいたから、俺は勘違いをしたのだった。

「イリスね？」

「はい」

和やかな陽気だった食後の団欒が、曇り空に覆われる。

「イリスちゃんは……【恩寵者】おんちゆうしやなんです」

……イリスがああ【恩寵者】だと？

俺に頭を貸す美少女は、うなづくこともなく、感情をあらわにすることもなく、ただ無表情で座すばかり。

俺と遊んでいたときのかすかな笑顔は、嘘のように消え去っていた。



## 第五話・「一緒にお風呂」

「ふん、イリスってば【恩寵者】なんだ」

軽い調子で値踏みするような目つき。

場に立ちこめかけた暗雲は、俺が思っていた以上にそこに停滞したりはしなかった。雲一つ無い脳天気なキズナに、雲はなすすべ無く吹き飛ばされてしまったかのようにだ。

「何を隠そう、私も【恩寵者】よ」

こいつ……それを言えばより災いが振りかかると分っていて……そういう向こう見ずな態度が今までどれだけの厄災となって降りかかってきたか。

知らないとは言わせないぞ。

降りかかる火の粉は払えれば確かに問題はない。問題はないのだが、自分一人では払いきれないで全身が火だるまになることもあったはずだ。最後の最後で俺の力を借りていることを、お前は身をもって知っているはずだ。

忘れたとは言わせないぞ。

イリスの頭の上から、キズナをにらみ付ける。俺の眼光に気がついたキズナは、大して気にしたような様子もなく、鼻で笑って手をひらひらと振ってみせた。

細かいことは気にするんじゃないわよ、とでも言いたげだ。

ああ……今回の旅も嫌な予感がする。

「でしたら、こういうのはどうでしょうか」

語尾が伸びている。ティアナにとって機嫌が上り調子にある証拠だ。イリスが【恩寵者】であることを告白してから黙っているとは思ってはいたが、なにやら熟考していたらしい。

いい予感が全くない。

イリスと遊んでやったおかげで、いい加減に疲れてしまい、それにもなつて誘発された惰眠をむさぼろうと思っていたが、そんな俺のささやかなリクエストは、睡魔に連れられて逃げ出してしまったようだ。

「キズナさん、しばらく【旅人の止まり木】に滞在して、ペラン達からイリスを守ってはいただけませんか？」

途端、キズナの横顔に企むような不穏なものがざわめき始めた。もちろん、それは師弟の間柄でないと読み取れない一種の機微たるものだ。表面は不敵な笑みを浮かべてはいるが、内心では願ってもない展開に小躍りをしているだろうキズナ。

解説するならば、こうだろう。

お腹と背中がくつつくぐらいに空腹だったけど、ちょうど良いぐらいに暴漢に襲われているなんて、なんて好展開なのかしら。難なく飯にありついただけじゃなくて、今度はどの誰かも知らないぺらんぺらんに狙われているってきたものよ。なんて偶然！ なんて幸運！ なんて僥倖なのかしらっ！ ふふふっ……近年まれに見るご都合主義的な展開に私もびっくりだわ。これで傭兵としてここに住めるってことは、当然、衣食住は保証される訳よね？ ま、確か

ここはボロだけど、料理は文句のつけようないくらいに美味しいわけだし？ 断る理由なんかこれっぽっちもない。逆にこちらからお願いしたいくらいよ。しめしめ、これでやっとその日暮らしからもおさらばって訳ね。

……とか何とか、当たらずも遠からず……いや、十中八九そんなことを考えているだろう。

というわけで、解説、終わりだ。

「いいわ、私も色々忙しい身分だけど、ティアナには一宿一飯の恩義もあるしね、引き受けてあげるわよ」

一宿一飯の恩義だと？ お前の脳内は、すでに一泊するつもりでいるのか。キズナ、ずうずうしいにも程がある。

「ありがとうございます」

ティアナよ。少しはキズナの本性に気がつく努力をした方が良くと思うのだが。

「イリスちゃんも、それで良いわよね」

「私は……ムス太と一緒にならいい」

白魚のような指が、頭の上に乗っている俺を包み込む。そっと手のひらで抱え上げると、俺はイリスの目の前に運ばれる。百パーセント無表情だった顔に、十パーセントの微笑みが加わる。

雪解けの清流水のようなきらめきで、ほのかに笑むイリスが、俺を真っ直ぐに見つめてきた。

「……一緒なの」

ふん……イリスの微笑みは、何か心をくすぐるものがある。

たとえば言うならば、砂漠の真ん中で見つけたオアシスであり、倭国で言うところの茶柱が立っているのを発見したときのような感覚だ。無表情であることが、良くも悪くも際だたせているのだろう。

「異議なし、決まりね」

テーブルに両手をついて、これから住まいを共にする面々を見回す。

ティアナ、イリス……最後に、俺の目をじっと見てくる。

悪いが、弟子に熱心に見つめられるのはぞっとしない。お前の考えは分っている。有無を言わさないつもりなのだろう？ アイコンタクトは一瞬で可能なのだから、そう念を込めるように俺を見るな。お前は俺を呪い殺す気か。お前の意思、意向は、付き合いの長さから分りたくなくても分ってしまうのだ。

ふっ……これでまた一つやかいことを抱えこんだな。……まったく、不肖の弟子が。

「とりあえずは、今日のところは解散しようと思うんだけど、いいわね？ はい、決定。ふあゝあ……たくさん食べ過ぎてなんだか、眠くなっちゃった」

はなから意見を聞く気もないくせに、是非を問うな。

「はい、それじゃ、私はお片付けをしますね」

「そ、何か手伝うことはある？」

「いえいえ、お気遣いには及びませんよ、もともとこれが私の仕事ですから」

キズナ、お前そうなることが分っていて、あえて聞いたな。

「イリスちゃん、お風呂の用意をお願いできるかしら？」

「うん……。終わったら、ハム太……一緒にお風呂」

悪いが、俺にそういう趣味はない。丁重にお断りさせてもらおう。イリスの手のひらから大ジャンプし、キズナの足下に追いつく。

「お風呂はいいから、部屋に案内してもらえない？」

「あ、そうでした」

大皿を何十にも抱えたまま、口元に手を当てて驚く。片手で何十にも積んだ皿の底を持格好だから、バランスが崩れてぐらぐらとし始める。

あ、あ、あ、と身体を揺らして慌てるティアナを横目に、イリスがキズナを追い抜く。

「こっち」

「放っておいていいの？」

「大丈夫……姉さんのバランス感覚は一流だから」

義妹が言うのだから間違いないだろうと思うのだが……この際深く考えるのはやめにしよう。

## 第六話・「ちゃぶちゃぶ」

階段を上ると一本の廊下があり、その左右にそれぞれ四つずつドアが配されていた。

単純計算で八部屋。宿泊スペースは二階だけだから、部屋数はそれほど多くないといっていいだろう。

ふむ……俺の視点で見る限り、宿屋【旅人の止まり木】の構造はこうだ。

一階がフロントで、フロントの周りは歓談の出来るスペース、奥には調理場があり、その前には大テーブル。歓談スペースにはテーブルとイスがいくつも並べられて、ちょっとした病院の待合室のようだ。壁には額に飾られた写真や何かもあるにはあるが、廃屋のような壁にはあまりにも不釣り合い。さらに言えば、額に飾られているにしてもガラスにヒビが入っているので、絵の雰囲気など台無しだ。四方の壁には一応窓があり、こちらのガラスにもヒビの入っており、ヒビにテープの補修が施してある。

いずれも劣らぬボロボロぶりで、視覚的に頼りない。二階の廊下などは、ジャンプしたら着地の衝撃で床を突き抜けて、一階でもんどり打つことになってしまいそうだ。

俺は設備のつたなさにため息をつく。

「……ここ」

一番奥の部屋に通された。

驚いたことに部屋はそれほどボロというわけではなかった。もちろん、それなりに眉をしかめる部分はある。だが、部屋はそれなり

に広く、ベッドも大きめ。シートからは太陽の匂いがするし、床やクローゼットのほこりは綺麗に拭き取られている。

その点はティアナ、イリスの日々の経営努力なのだろう。

「ふーん、悪くないわね」

珍しく意見が合ったな。別に嬉しくもなんともないが。

「にしても暗いわね……ねえ、イリス、電気はないの？」

「電気は……ない。魔法ランプなら、ある」

ぶっきらぼうな言葉を残し、玄関口にぶら下がっていた携帯用ランプを持つてくる。イリスがそのランプに手を触れると、内側のフイラメントが青白く発光し始めた。

「へえ……確かに【恩寵者】みたいね」

口笛を吹くキズナ。

ふむ……ここで一つ説明を入れて方がいいか。

まずはこの世界に住まう者ならば誰でも知っていること。誰もが出来る不思議でもなんでもないことについてから説明しよう。

……今回は魔法であり、その根源。魔力というものについて。

魔力が人々にとって初めから持ち得たものであるのに対して、魔



法は最初から持ち得ていたわけではない。

ティアナを助けたときに、未熟なキズナは詠唱魔法を使用した。  
その文言を思い出して欲しい。

古より胎動する風の精霊よ、我が盟約に従いその力を眼前に  
て示せ！

初歩中の初歩である魔法で申し訳ない。恨むのならばキズナの成長の遅さを恨んでくれ。

……とにかく。

魔力を魔法として変換するには、精霊の力を借りる必要がある。  
我々の祖先である古代人が、世界を司る精霊と契約を結んだことが魔法の始まりだった。もともと人間が持っていた魔力を、精霊の力を借りて魔法に変換し、やっとそれなりの力として行使できるようになる。

キズナが使用した詠唱魔法でも、スーツ男が使った単詠唱魔法でも、基礎は同じだ。

魔法の行使に際して、文字列が使用者の周りを覆っていたことを覚えていいるだろうか。

それは古代文字であり、今では遠い歴史に埋もれた言葉なのだ。  
先程、精霊の力を借りると言ったが、その借りたものこそが古代文字なのである。

大昔、精霊と人が交わした言葉、その言葉が文字化されたものと言われている。残念ながら、聡明な私ですら解読することはできない。

けれど、推論の域を出ないなりに、分りやすく解釈するとしたらこうだ。

魔力を言葉に乗せて文字に宿し、文字から魔法へ変換する。それぞれに順を追って魔力を伝導させていくことで、はじめて魔法は発現させることが出来る。その始まりが詠唱魔法。そして、それを発展させたものが単詠唱魔法というわけだ。

人間は生まれながらにして魔力を持って生まれるが、一方で、身体に宿す魔力の量は人それぞれ。

【恩寵者】はその中でも特別で、膨大な魔力を持った者を指す。判別するのは、至極簡単だ。魔法具に魔力を伝導させればいい。このランプであれば、白い光が灯れば一般人の魔力。青い光が灯れば【恩寵者】ということになる。ご存じの者も多いとは思うが、あえて蛇足として付け加えさせてもらえば、さらにもう一段階上の人間が存在する。

一般人、【恩寵者】、さらに……【寵愛者】ちゅうあいしゃ。

【寵愛者】は文字通り精霊に愛され、契約する以上に精霊が手を貸すと言われている。

世界に大きな戦争が起きる度に、魔法使いは力を大いに振るうことになる。その戦渦の中、絶対的な力を持って戦いを終結に導いたのが【寵愛者】であり、精霊であると言われている。

……まあ、あくまで蛇足程度に考えていてくれた方が助かる。

伝聞調で立証される証拠などと言うものは往々にして人々は信用しないものだからな。

……と、まあ、多少饒舌に語ってしまったわけだが、付いてきて  
いただけたであろうか。色々と言語足りないところがあるが、また  
機会を見て語っていくことにしよう。

「ご静聴、嬉しく思う。」

「……ムス太……一緒に風呂」

おうっ！ ま、まだ居たのか、イリス。お前もしつこい奴だな。

しゃがみ込んだイリスが、俺を捕まえようと手を伸ばしてくる。  
俺はその手をぎりぎりのところで回避して、窓際へ。イリスがそん  
な俺を追い詰めようと、じりじりと寄ってくる。

「お風呂で……あそぼ？」

純粹な瞳で迫るイリスによって、じりじりと窓際へ追い詰められ  
る俺。逃げ場が徐々に無くなっていく。

くそ………ん？ ……窮鼠ってこういうことを言うのでは？

ふと、不穏なことわざが頭をよぎった。

「ムス太……私と……ちやぷちやぷ……嫌？」

ちやぷちやぷ嫌！

「ふあ……あああ……私は一足先に寝るわね」

追い詰められる師匠に弟子はなんの興味も示さない。  
ヒップバッグを外してベッドの脇に放り投げる。

キズナは俺が居ることも構わないで、スカートのホックを外すと足下にすくと落とす。お気に入り黒の下着が、制服の裾に絶妙の角度で隠れる。履いていたブーツを脱ごうと屈む中でちらちらと見え隠れする黒の下着は、歓楽街のストリップダンスを思わせた。

イリスもいるので口に出したりはしないが、キズナの肢体はそこいらの女では太刀打ちが出来ないぐらいに、無駄がない。

均整の取れた体つきは戦闘向きだし、それでいてしなやかだ。美と武を両立させることはなかなか難しい。武だけを追い求めるならば筋骨隆々で構わないわけだし、スレンダーである必要性がない。胸などはあればあるだけ論外の論外となる。とても残念なことではあるのだが。

故人はかくも語ったものだ。

二兎を追う者は一兎をも得ず、あるいは、天は二物を与えず、と。要するに両手に花を持つことが出来ないのが世の常。けれど、現実として、ここにそれを両立できそうな女が居ること自体が、ちょっとした奇跡ではある。それは俺の師匠としての力量がものを言うわけだが……。

キズナはあつと言う間に下着一枚の格好になってしまう。

着ていた服やブーツを周りに転がしたまま、ブラに手をかける。胸がないキズナのブラは黒のフロントホック。俺とイリスの存在などは羞恥心を微塵も刺激されないのか、ついには胸を張ったまま堂々とブラを脱ぎ去ってしまう。パンツ一枚。

「ムス太……見ちゃダメ」

……。残念だなどとは思っていないぞ。本当だぞ。

しばらくして俺の顔を覆っていた手のひらが外されると、キズナがベッドにうつぶせになっていびきをかいているのが見えた。

一点の染みもない美麗な背中の中の流線が、魔法ランプの青白い光りを浴びて非現実的に輝いている。我が弟子ながらなかなかのものを持っている。

これで胸があれば俺も……ん？別にキズナに胸があつたからとしてなんだというのだ。キズナはキズナでしかない。俺の足を引っ張ってばかりの馬鹿弟子ではないか。

俺は外の闇に目をはせる。

太陽は完全に落ち、道を挟んで街灯の輝きがうかがい知れる。それほど発展した町ではないが、電気という発明は日を追うことに広がっているのが分かる。

昔は、人が自らの魔力を使って全ての火を灯し、それを明かりとして利用していたものだが……。

進歩とはまるで駆け足だな。

耳をすませば、進歩の足音というものが聞こえてきそうな程に……。――

「お風呂……お風呂……ムス太と……お風呂なの……」

鼻歌を歌うように歩くイリスに気がつけば、いつのまにか俺は――

階の奥にある脱衣場にいた。記憶が抜け落ちてしまったかのよう  
だ。

必要がないから抜け落ちたからなのか、あえて抜かしたのかは定  
かではないが、目の前ではメイド服を一所懸命に脱ごうとするイリ  
ス。

オイオイオイ……！

「ん……しょ……ん………しょっ、と」

男らしい大胆な脱ぎっぷりのキズナとは対照的。

少しずつ露わになっていく小さな肩口や、肩胛骨、胸元に隠され  
たわずかなふくらみ……さらには地面にまで届きそうな長くきめ細  
やかな髪が、真っ白な肌にさらさらと寄り添う。

俺の顔が熱くなってくる。

なんだというのだ。俺にそんな気はないというのに。

偶然なのかわざとなのか、着崩すように脱いでいく。着崩したイ  
リスは、なにか汚されてしまった乙女画のようであり、墜ちていく  
天使のようでもある。あるいはその最中であるような……。

とにかく、加害者でもないのに加害者の心境にさせられてしまっ  
てなければ、イリス以外が全て悪であるかのような……ああ、も  
う、訳が分らん。

俺は何で、こんな子供にドキドキしているんだ。

にらみ付けるように半裸のイリスを睨めつける。

「ハム太……と……洗いっこ、する……」

おい、セリフもそうだが、カボチャパンツを微妙に下ろすところで止めるな。なぜ最後まで脱がないで、次に移る。お前は、おもちゃに目移りする子供か。

もう、見てられん！

俺は熱くほてった顔をもてあましながら、イリスに背中を向けた。

「あ……っ」

禁忌を侵犯したような罪悪感が俺の心の大半を占める中、イリスが驚いたような声を上げる。

着崩した脱ぎ方が災いしてか、下ろしたカボチャパンツに足を取られ仰向けに転んでしまったようだ。

ほら、見たことか　ギャうおおッ！

刹那、俺は天地がひっくり返るかのような痛みに飛び上がる。転んだイリスのお尻が、俺の美しいしっぽを押しつぶしたのだ。

「！」

ここで叫び声を上げなかった俺は、本当に偉大であると思う。自分で自分を褒めてあげたくなる。

さすが俺、よくやった。立派だ。ついでに、格好いい、惚れる。

「あっ……ムス太……お風呂……！」

痛みに脱衣所を躍り出た俺には、寂しそうなイリスの声など記憶

の片隅にも残らないのであった。



## 第七話・「窮鼠猫を囓む」

痛みあまり風呂場から飛び出した俺は、爆発した痛覚をもてあましてフロントの前を通り、今いる場所が傭兵になるという契約を交わした食卓であることも分らずに、脇目もふらず激痛と共に迷走する。

「あれ〜？ 今、ムス太ちゃん〜……？ きゃうつ！？」

ティアナのおっとりとした声を通り抜けた。どうやら、スカートの下を通り抜けてしまったらしい。気のせいか水色と白のストライプ柄が視界をかすめたような気がする。

……というか、お前まで俺をムス太と呼ぶのか……。

ま、それはそれとして。ティアナよ、身体（特に胸、言い換えればバスト）は大人のくせに、身につけているものは意外と子供チックなのだな……ふむ、そういうギャップは嫌いではないぞ。誰とは言わないが、体も心も子供のキズナに比べれば何倍にも増して……おっと、誰とは言わないぞ、余計な詮索は無用　ってそんな場合ではないいいいいいいっ！？

一秒にも満たない間だけ、欲望が痛みに勝ったわけだが、結果としてまたすぐに痛みに取って代わられた。

燃える。なにつて、しつぽが燃える。ちぎれたようにさえ感じる。それぐらいに痛い。

痛い痛いアツイ痛いイタイ痛い熱い痛い熱い痛いいたいいたい  
っ！

「どうしたのでしょうか？ あんなに慌てて……。まるでうつかりしつぽを踏みつけられた痛みに我を失ってしまったようです」

悪いがその通りだ！

燃え上がるようなしつぽの痛みを冷やそうと、飛び込んだのは証明の落とされた調理場だった。

蛇口は残念ながら開くことは出来ない。ハムスターの力ではさすがに無力なのだ。

なので、調理台の冷えた鉄板を利用して、しつぽを冷やすことにする。我ながら名案だ。

が、その『名案』が数秒後『明暗』を分けることになるのを、このときの俺は知るよしもなかった。

真っ暗闇の中、最大跳躍。

「ふっつ、ふっつ」

ひんやりとした鉄板にしつぽを密着させ、その上から息を吹きかける。

冷たくすることで感覚を麻痺させる。熱いものを触ったときに、とつさに耳たぶを触ってしまうという習性をしみじみと考えながら俺は引いていく痛みに大きく息を吐いた。あまりの過酷な運動に身体をぐったりとさせる。まさにまないたの鯉が如く、調理台の上でうつぶせになっていた。それぐらいに疲れた。

「イリスめ……いつまでも俺が優しい顔をしていると思うなよ」

お腹を大きく上下させて、身体に最大限の酸素を送り込む。痛み  
の引いたしつぽを顔の前まで持つてくると、俺は真っ赤に腫れ上が  
ってしまっているしつぽを優しくさすった。

ぴりぴりとした痛みが残っていて、腫れはすぐには引いていきそ  
うにはなかった。

目をつぶり、ひんやりとした鉄板の感触に身を任せていると、調  
理場にぶら下げられているフライパンとお玉のぶつかる金属音が、  
真っ暗闇の調理場に響いた。

「……」

目を開けて、周囲を見る。

ティアナかと思ったが、そうではないらしい。案の定、ティアナ  
は調理場にはおらず、すれ違ったときと同じ食卓にいた。

テーブルを拭き終わったのか、ティアナの足音が、ボロの床がき  
しむ音と重なって遠ざかっていく。

……気のせいかな……？

今度は反対側から、ビンの転がる音がした。目をこらすと、調味  
料が転がっている。俺は仰向けの体勢から急いで身を起こす。

何者かが動く気配がしたからだ。  
だが、気配はすぐに消え去った。

何者かが調理場において、気配を絶った。  
気配を絶つこと……それは偶然や、気まぐれでそうするのではない。  
い。

気配を消す理由があつて消したのだ。

明らかに何者かは俺の存在に気がついている。そして、現在進行形で俺を捕捉している。

確実に狙われている。

全身の神経を研ぎ澄ます。耳を逆立て、ありとあらゆる音を拾う。水道の口からしたたる雫の音。わずかに動く大気の揺れ。込められる殺気にすら音に変換する。

もはや、しつぽの痛みは完全に消え去った。

集中力は痛みを消す。

闇に紛れた暗殺者が何者かは分らない。敵は今、この膠着状態を利用して、俺という獲物に対し、タイミングをうかがっている。

舌なめずりをし、爪を研ぐ。

迎えるのは緊張の絶頂。

言い換えるならば、狩りの刻。

またたく赤光。

張り詰めた糸が切れる。

殺気が爆発し、空気が揺れた。

俺は身をひるがえす。

今し方俺のいた場所は、鋭い三又の武器によって切り裂かれていた。俺の脳裏によぎるのは、俺の身体から吹き出る血潮。戦慄が、俺の身体から汗を噴き出させる。

……やはり、コイツか！

「ニャ、ニャ〜ン（避けるとはなかなかやるニャン）」

……【猫】。

俺の最大最強の天敵。

黒き悪魔は、舌なめずりをし、その鋭利な獲物を誇らしげに見せつける。右手の爪をぺろりとなめると、今度は左手にも爪を出現させる。世の中はだまされている。

猫かわいいー、猫かわいいー、などと言って頬をゆるませ、鼻を伸ばす。

ぬこだの、萌えだのと言って愛称を付け、愛玩化する。

愚かな人間はこいつらを手放しでもてはやすが、それはだまされている。

その証拠に、こいつらは慈悲もなく狡猾。それでいて惚れ惚れするくらいに俊敏で……残忍だ。

俺の視界から猫が消える。俺は視認する余裕を無くし、調理場から躍り出た。

そうですねー、昨日なんて調理中、お魚を持って行かれちゃいましたー

今更ながらに、ティアナの言葉を思い出すが、すでに動き出してしまったときの中では無意味だ。

人の気配の無くなった食卓を駆け抜ける。テーブルの下を疾走。背後を振り返れば猫はいない。そうそう簡単にあきらめてくれる奴とは思えないが……。

テーブル下を抜けようというとき、猫が真上から襲いかかった。

「テ、テーブルの上からだっ!?」

俺が調理場から逃げ出すのをあらかじめ予期していたとは思えないタイミング。俺の視界から消え、さらには上を取った。テーブルに上がる瞬間を見逃していた俺にとっては、致命的な隙であった。俺は何とかその場を転がることで、最初の爪をやり過ごす。

床には三条の傷が走った。

猫は眼球の動きだけで起き上がった俺を捕らえ、間髪入れずに左の爪での一撃に移行する。

俺の腹に赤みが走った。床と同じ三つの線。

時間に遅れて、にじんでくる血。

意思さえも引き裂くような猫の酷薄な眼孔に、俺は生きた心地がしない。

「ニヤア〜（あっけないニヤ〜）」

コイツ、笑ってやがる……！

俺は黒き暗殺者と相対しながら、頬袋を汗が伝っていくのが理解できた。猫はゆっくりと、俺との間合いを計ってくる。確実に獲物をしとめられる位置へと移動しつつある。しなやかな身体の中には、必殺の瞬間のために蓄積されていく力が見えた。

「ニヤ（ニヤリ）」

余裕からだろうか、目を細め、俺の出方をうかがっているようだ。自らの優位性と圧倒的な力の差を知っているからこそ出来る圧倒

的な勝利への構想。俺はその構想を打ち壊す算段すら出来ずに、口内にたまった唾液を飲込むしかない。

……いや、駄目だ。あきらめるには早すぎる。

何か他に出来ることは。

攻撃力、耐久力、スピード、どれも目の前の天敵には及ばない。

「……これは最後の手段として取っておきたかったんだがな……！」

不敵に笑ってみせる。猫はそんな俺の笑いに疑問を感じたのか、わずかに顔をかしげる。

「窮鼠猫を噛む　その言葉の本当の意味を……教えてやる！」

ハムスターの俺がなぜキズナの師匠としていられるのか。なぜキズナを助けるなどと大口を聞くことが出来るのか。その理由を今明かそう……！

「……ハム太……！」

飛び出す青い影。

イリスがバスタオル一枚のまま俺の前に立ちふさがった。長い髪の毛の先から、雫がしたたっている。

ほのかに香る石けんの香り。ピンク色に染まった肌と、立ち上る水蒸気。どうやら、お風呂上がりに慌てて駆けつけたようだ。使命感を帯びた紺碧の瞳が、黒き暗殺者をにらみ付ける。

「ウニャーン（余計な邪魔が入ったニャ）」

「ハム太……私が守るの」

自らの柔肌が傷つくことも厭わず、全身で俺の盾になろうとする。

……なんというか、ジンときた。キズナにも見習わせたい。

「ニヤン、ニヤウ（この勝負、預けるニヤ）」

猫は鋭い爪をしまい、調理場へ音もなく駆け出していった。  
まるで闇に紛れるように、その姿は一瞬でかき消える。

俺は噴き出した汗の冷たさを今更ながらに思い出し、その場にぐつたりと突つ伏す。床にだらしなくあごをつけた状態で、自らの心臓がまだ動いていることを確認する。

嗚呼、生きているって素晴らしい。

「ハム太……大丈夫？」

巻いただけのバスタオルが、どういう原理かギリギリのところできりギリのものが見えないように引っかかっている。イリスはそれを直そうともせずに俺を抱きかかえると、優しく抱きしめてくる。

香ってくるイリスの甘い匂いは、瑞々しい果実のよう。白き柔肌は見せつけるように水分をはじき返し、その滑らかさを強調している。抱きしめられている胸元は、意外や意外、まな板などではなく、ふつくらとした感触を感じられた。押したら跳ね返す。そんな当たり目でありながらも若さが誇る弾力性とやらが、最大の魅力を持つて俺の身体を襲ってきた。



むむむむ……お前は着やせするタイプだったのか、イリス。

「ハム太……大丈夫？」

同じ言葉を繰り返すと、抱きしめる胸元から俺を話す。

……少々、名残惜しい。

「……」

じつと見つめてくる。何かを詮索するような瞳の色だ。  
何か嫌な予感がする。

「………窮鼠猫を囓む」

どきり。

ラピスラズリのような瞳の深遠さに、俺は飲込まれそうになった。

「……その言葉の………本当の意味………」

どきどきっ。

まさか、まさか……聞かれていたっ………！？

ぬっつ……俺としたことが……俺としたことがっ………！？

どうする！？ どうする、どうする、リニオ！？

俺のパニックをあざ笑うかのように、イリスは嬉しそうな表情で、  
小首をかしげた。

「………教えて？」

「あら、イリスちゃん？ そんなところでどうしたの？」

戸締まりをしていたティアナが、タオル一枚のイリスを見て目を丸くしていた。

「姉さん……っ、くしゅん！」

「もう、イリスちゃんったらっ、風邪を引いちゃうほどムス太ちゃんと遊びたいのっ？」

「うん……私、ムス太……好き」

「うふふ、イリスちゃんったら大胆っ」

「うん……大胆」

姉であるティアナに対して、無表情でVサイン。ティアナはそんな無表情の妹に慣れているせいか、笑顔のままで口に手を当てて笑っていた。

これは……ごまかしきれたのか……？

結果オーライとしか言えないが、とにかく急場はしのげたということにしておこう。  
と、言うことで

ハムスターの俺がなぜキズナの師匠としていられるのか。  
なぜキズナを助けるなどと大口を聞くことが出来るのか。  
その理由は、機会がきたら、明かすことにしよう。

……そして、機会は、キズナのせいで思ったよりも早く訪れる。

## 第八話・「夜ばいにしては」

屋根の上に座って星空を眺める……なんていうのは一体どれほどぶりであろうか。

「……」

物言わぬ人形にしては、あまりにも造形美が過ぎるイリス。夜空を彩る星々に願いをかけるにしては、この美少女はいささか無表情で無関心すぎた。

仇敵である猫から救われた俺は、そのまま拉致されるようにイリスの部屋へと連れ込まれた。イリスの部屋は二階の客室の一つ……キズナの向かい側を間借りしたものだ。調度品などはなく、完全に機能美だけを追求された……いや、追求されすぎた部屋には、テーブルの一つもない。

ベッドとクローゼットが一つずつあるだけ。

殺風景にも程がある。

ただ一つ気になるものと言えば、ベッドの上、枕の横に置いてあったネズミのぬいぐるみだった。年季の入った代物であるらしく、色落ちしていて、所々にイリスのメイド服同様つぎはぎがしてあった。いわゆるボロだった。

俺は、イリスの纏う漆黒のベビードールの胸元から顔を出し、イリスの動向をうかがった。

イリスは特に俺に遊びを仕掛けてくるでもなく、ただじっと空を眺めている。

俺はイリスに気がつかれないようにあくびをし、胸元の生地にはぶら下がったまま夢の中に落ちようとする。薄目でイリスを見れば、

どうにもこうにも狙ったとしか思えないナイトウェア、ベビードールが目の前に大写しになる。まるでスポンジケーキに生クリームを大量にくっつけたように、フリルはふりふりでふっくら、かつ、ゆったりとした出で立ち。

右肩、鎖骨、左肩というラインを大胆に見せるから、肌の白と生地黒の黒が目鮮やかだ。

小さな肩の上で、これまた小さなりボンがかろうじて服を支えている。その両肩を支える二つのリボンをちょいとつまんで引っ張ってみれば、すんとベビードールは足下に落ちてしまうだろう。そして、そこに現れるのは、下着一枚纏っていないイリスなのだ。

……小悪魔め。なまじ純真だから手に負えない。  
純真な小悪魔なんて、考えただけで卒倒ものだぞ。

しかし、なぜメイド服はボロのくせにベビードールだけはおろしたてのように美しいんだ？

まずそれが気になる。

ティアナの趣味なのか？

……はっ、そう言えば、今はティアナが入浴中であつたな。

こうしてはいられない。こうしてはいられない……ぬぐっ！？

「……いかせない」

こつそりと天窓から中へ戻ろうとする俺の首根っこがひつつかれる。

ええい、離せ！ 俺にはやらなきゃいけないことがあるんだ！

譲れない思いがあるんだ！

宙ぶらりんのままじたばたと暴れる。

「姉さん……大きいから？」

……。

な、なんのことだろうな？

誰もそんなことは言っていないはずだが。

「ムス太……姉さんの胸ばかり見てるの」

月夜にふくれっ面とは、これまた変わった取り合わせだな。小さな頬をかるうじて分るぐらいにふくらませる。湯上がりにしては時間がたちすぎているのに、イリスの頬はかすかに朱を帯びていた。

「私も……きつと……大きくなるの」

黒のベビードールの上から、小さな手で胸のふくらみを包み込む。小考すると、何を思ったかそのままゆつくりと指を動かし始める。何で得た知識かは知らないし、知りたくもないが、それはやるだけ無駄というものだぞ。

対外的な刺激よりも、体質改善の方が何倍も効力があることを教えてやりたい。

ひいき目ではないが、イリス、お前はキズナとは違って将来性がありそうだ。

出来ることならば、しばらくの間、成長を見守ってやりたいくらいだ。

「……ムス太……」

いつの間にか俺を見つめて、顔を真っ赤にしているイリス。手の動きはそのまま、熱っぽく俺の姿を瞳に映している。瑠璃色の瞳が透明な膜を帯び、目尻にはうつすらと涙を溜めている……  
ってオイっ！ 貴様、何をやっている！

うつ……くつ……そんな艶のある吐息を俺に吹きかけるな……っ。  
鼻がおかしくなってしまうのではないか……心なしか脳の活動も遅延  
を余儀なくされている感じだぞ。

古来から英雄色を好むと言われ、幾人もの偉大なる王が色香に惑  
わされ、国を自滅に追いやってきたが……俺は今まさにそんな心境  
だ。イリス、お前は傾国の美女なのかもしれんな……。

「あ……っ……ふ……ハム……」

眉根をしかめ、必至に何かに堪えようとするイリス。

俺は、そこに何かの違和感を覚える。

何かを必至に紛らわそうとしているように見えた。夜空を見上げ、  
イリスが何を思い馳せていたのかは分らない。言葉少ないイリスか  
らは何も聞くことは出来ないだろう。けれど、夢中になって何かに  
没頭しようとする姿勢……その中でもとりわけ深遠な瑠璃の瞳だけ  
が、行為そのものを嘘だと言ってしまったような真実の光りを  
称えていた。

一時的接触を求め、俺をしつこく追い求めてくる姿。

何もない部屋で唯一、枕元においてあったネズミのぬいぐるみ。

必要以上に感情を表さない姿……。

イリスよ、お前は何を慰めている？

何をそんなに怖がっているのだ。

俺も少し雰囲気にあてられていたのかもしれない。イリスの目尻。  
徐々にたくわえられていき、ついに目元から伝ったその雫をなめて  
しまったのだから。

これは……！

その雫を体内に入れた瞬間、俺の身体が熱波にさらされた気がした。

凝縮された魔力の雫だった。高純度でありながら高濃縮。普通の人間であれば、一生かかってもたくわえられない量の魔力。

イリスの感情の高ぶりがそうさせているのだろうか。意図せず体内に入れてしまったそれは、俺の身体を駆けめぐるように浸透していったかと思えば、すぐに俺の体内から発散されていく。

魔力は精霊との契約……つまり文字化無くしてできないものだと思っていたが……。

これほどの魔力、【恩寵者】としても異質なものだ。

喜べイリス、俺はお前にわずかだが興味が出てきたらしい。

あごに手をやりニヒルに熟慮する。月下のハムスター。

ふむ……絵になるな。

そんな俺の耳に、夜風は奇妙なものを運んできた。密やかな駆け足の音。それも複数。イリスも数秒遅れてそれに気がついたようで、耳をすませて様子を探っている。

「姉さん……！」

足音は迷い無く、この宿の玄関前で止まった。イリスは先程の様子とは打って変わって無表情に戻り、天窓から飛び降りた。まるで傘のようにベビードールの裾が広がる。俺はイリスのベビードールに捕まるのがやっとで、風を切るイリスに振り回される。

ドアを開けると、玄関口から轟音が聞こえ、続いて悲鳴が上がる。



ティアナの声だ。

イリスの部屋から廊下を挟んで正面の部屋にはキズナが寝ているはずだが、どうやらこの騒ぎにも気がついていないらしい。満腹の上に、一度寝たらしばらくは起きてこない間抜けな性格だ。ずばらでルーズで、さらには神経も図太いときている。

……以上の要因から、馬鹿弟子は待つだけ無駄だろう。

ええい、傭兵の契約はどうなったのだ、愚か者。

俺の内心を知ったわけではないだろうが、イリスはキズナの部屋のドアには目もくれなかった。

「……姉さん！」

階段を一気に駆け下りたイリスは、四人の黒ずくめの男達に拘束されているティアナを見つける。四人は四人とも昼間にティアナを襲ったものと同じスーツ姿だ。

と言うことは、四人とも魔法使いである可能性が高い。……やっかいな相手だ。

一人は背後からティアナの首を腕で絞めている。

男の背丈に及ばないせいか、つま先立ちになっているティアナの表情は苦しげに歪んでいる。

メイド服姿であることから、まだ入浴には至っていなかったらしい。……残念……いや、それは今は置いておこう。

「……お前がイリスだな」

イリスは無表情のまま答えない。その反応に男は嫌らしく唇をつり上げると、ティアナの首を絞める力を強める。ぎりぎり、とティアナの首の絞まる音がした。ティアナの頸動脈が締まっているのか、ティアナの顔は次第に朱から青白く変色しつつある。

「そう。私が……イリス」

イリスの解答に満足したのか、男はティアナの首を絞める力を弱める。

どうやら、ティアナを殺すつもりはなく、交渉の道具として使うつもりだろう。

「黙って我々と一緒に来い、イリス。ペラン様が首を長くして待っているぞ」

「首が長いなら……寝首をかきやすくていい」

イリス、もつと言ってやれ。女を人質に取るような馬鹿には、おあつらえ向きのセリフだ。

「黙れ、この女をくびり殺すぞ」

再びティアナの首を絞めにかかる。ティアナののどから、声にならない苦悶がもれる。眉間にしわを寄せて必至になってもがくが、頑強な男に対してはあまりにも無力だった。

……どうする、イリス。

「……分かった。……行くから……姉さんを離して」

観念したように両手をだらりと下げるイリス。いつもの無表情は、絶対零度の無表情へと変わっていた。酷薄な瞳の色は、この場の温度を少なからず降下させる。

「余計なことはするな……【恩寵者】。いいか？ 魔法文字一つでも見せたら、この女は殺す。分ったな？ ……分ったら手を挙げたままこちらへ来い」

やはり魔法に少々的心得があるらしい。言葉一つで魔法を放てる単詠唱魔法ならばこの状況も打開は可能だったが、それすらも封じられた。

単詠唱魔法であろうと、詠唱魔法であろうと魔力を文字列化することには代わりはないからだ。

一人は人質を。あとの三人は、イリスの一挙手一投足を監視している。

状況は芳しくない。

「……ん？ なんだネズミか……」

イリスの肩口に乗っていた俺を目ざとく発見したらしい。

「おい、その趣味の悪いドブネズミをどけてから来い。気色悪い」

……貴様、その言葉もう一度吐いてみる。殺すぞ。

「ムス太は……ドブネズミなんかじゃない」

イリスの語気がわずかに強まった。

「……ムス太は、私の……恋人」

いや、そういう根拠のない否定の仕方は止めてくれ。

頭を抱える俺に対して、四人の男達は一様に大笑いをする。

……おい、誰が笑っていいって言った？

確かに変わり者だが、イリスは美少女だ。将来性も十分。あの馬鹿弟子は例外としても、俺は俺を好きだという女を馬鹿にする奴を許してやるほど、心が出来てはいない。

なおも笑い続ける四人のスーツ男に、イリスは表情を崩さない。  
ティアナはそんなイリスの態度に不安を隠せないようだった。

自らの不幸を呪ったのか、それともこれから訪れるであろう不幸に先んじてか。

俺は改めてイリスの肩で深いため息をついた。

………遅いぞ。

「夜ばいにしては」

馬鹿弟子め。

「乱暴すぎるわねっ！」

窓が壁ごと爆砕する。

外の窓を突き破って乱入してきたのはキズナだった。

第九話・「…………綺麗…………」

とりあえず、心の中で一言だけ言ってやる。

馬鹿が！ 加減を知れっ！

もうもつと立ちこめる煙に、周囲の視界が一時的にゼロとなる。爆音が耳をつんざき、壁の破片がぱらぱらと床に降り注ぐ。さすがに廃屋同然の宿屋だけあって、爆発の及ぶ規模も広い。建物自体が揺さぶられるような振動で、イリスが転びそうになる。

歓談スペースは爆風に飲まれて、イスもテーブルもめちゃめちゃだ。

爆発した壁とは反対側に飾ってあった人物画の目玉には、残酷なまでに窓ガラスが突き刺さっていた。

……ふむ、どうせ安物だろうが。

イリスは吹き込んでくる爆風に長い髪を揺らしながら、瑠璃色の瞳をまぶたの裏に隠している。細かい破片やら砂埃やらが、美しいイリスの姿を丸呑みにした。

俺は前述した不幸の予感が感じられた時点で、イリスのベビードールにその身を滑り込ませている。

褒めておかなくてはいけないのは、イリスは俺が胸元に潜り込んだことを咎めるでもなく、逆に俺を服ごと抱きしめるようにして爆発から守ってくれたことだ。

いい具合に未発達の双丘が緩衝材となる。ちょうど顔の半分が埋まってしまう感じ。

これがティアナならば極上なのだろうな……顔どころか、全身が柔らかい優しさに埋もれてしまうのではないだろうか……ハア……ハア　　と思ってしまうのは贅沢だろうか。……そうだな、贅沢だな。

とにかくだイリス、俺は殊勝な女は好きだぞ。キズナなどという、そういった展開はついで望めないからな（胸もないし）。それどころか、面倒な目にばかり遭う。

俺はお前という存在を貴重に思うぞ、イリス。

……という感想を二秒ほどでまとめ上げると、イリスは片目を苦しそうに開けながら、煙の中心をにらみ付ける。

「一体……何なの……？」

立ちこめる煙の中では、フロントの上にあったベルが吹き飛ばされていた。落ちた拍子に鳴り響き、ちりんちりと宿の主を呼んでいる。

灰色に染まった視界。玄関口からは争う音だけが聞こえてくる。鈍い音の連続。後に続くのは苦悶と怒声。推測するまでもなく、キズナの仕業だろう。

「さっきの……キズナなの……？」

……ああ、その通りだ。あの馬鹿の考えそうなことだ。色々つつこみどころはある。

なぜ俺たちと同じ経路をたどってこないで、わざわざ外から突っ

込んできたのか、とか。

百歩譲って、外から突っ込んでくるにしても、なぜ壁ごと壊す必要があったのか、とか。窓を突き破ってくれば良かったのでは……とか。

千歩譲って、壁を破壊するにしても、威力の加減というものがあつたのではないか、とか。

……という感想を三秒ほどでまとめ上げると、煙を纏うようにキズナが飛び出してくる。

「みんなまとめて、危うく死ぬところだったわね」

これだけは言うておく。命だけは譲れないぞ。

恨めしそうににらみ付けてやると、キズナはやれやれといった顔。

反省の色なし……いい度胸だ、馬鹿弟子。

キズナは肩をかしていたティアナの身体をフロントによりかからせると、微々たる胸を張って煙の薄れていく様を見つめる。助け出されたティアナは気を失っていて、ボロのメイド服も二割増しでさらにボロになっていた。つまり、ボロボロと言うことだな。

「姉さん……こんなにされて……」

ティアナを憂慮したあと、イリスはなぜかキズナをにらみ付けていた。

気持ちは分からないでもないが、相手が違うぞ、イリス。

「それに……こんな……不潔な人に……助けられたなんて……」

無表情の中にも特大の苦渋と哀切。それは、イリスだけではなく、俺も同じだった。

「慌ててたら、こうもなるわよ」

手を振って、仕方がないと言わんばかり。

よし、ここは俺が順を追って指摘してやろうではないか。

上着を着、ブーツを履いたまではいい。髪型もいつものツインテールではなくなっているのも分かる。緊急事態だったからな。唯一、ヒップバックの中から【せきれい鵲鴝】を持ってきたことは褒めよう（ひまわりの種も取って来い）。だが、キズナよ。

……せめて、スカートぐらいは履いて欲しかった。

「何か言いたそうね、リニオ」

言っているのか？

「やっぱりいい」

一瞬で師弟のアイコンタクトが成立した。

お前は本当に間抜けな奴だな。ブーツを履く時間があって、上着



を着る時間もあつたのに、なぜ下はパンツだけなのだ。黒の下着をそんなに見せつきたいか？ 見せるのはいいが、俺はイリスのベビードールを見つめている方が何倍も目の保養になるのだぞ。

俺はお前の羞恥心の優先順位を切に知りたい……って、言っている側からパンツの食い込みを直すな、露出魔め。

形の良い、小振りな尻に不満をぶつける。

「睡眠不足はお肌に悪いのよね。さっさと終わらせてもう一眠りしたいのよ、私は」

「……キズナは寝過ぎ」

お前は寝過ぎだ。

「……ったく、助けてあげたっていうのに可愛くない女。それに……リニオ受けしそうな服着ちゃって、何様のつもりよ、アンタ」

「……恋人だから……当然なの」

キズナを上目遣いでにらむ。静かな自己主張。

「あのね！ コイツの名前はリニオ！ 私の」

イリスの胸元から慌ててジェスチャーを送る。

「……ああもう！ なんでもないわよ！」

ふう……世話の焼ける奴め。それに先程の言動……お前はやきもちでも焼いたのか？ 焼きすぎて火傷しなければいいが。

不機嫌なオーラを発散させながら、パンツのひもに挟んでいた【鵺鵂】を乱暴に抜き取るキズナ。パンツのゴムがお尻を叩くペチンという音が、気持ちいいくらいによく響いた。

【鵺鵂】は、一見、刀から刀身を取ったものと同じ形をしている。鍰と柄だけ。もちろん、そのままでは武器としてはなんの役にも立たない。

キズナの魔力を通すことで起動し、初めて真価を発揮する。【鵺鵂】は魔法具の一つで、正式には魔法刀と呼称される。

にしても、どこに入れている、お前は……。胸にチップを入れる女性ストリップパーのよう……。いや、男性ストリップパーのぴちぴちのパンツに挟むチップだな、まるで。お前程度、これぐらいのたえで十分だ。

俺は悪態をつきながらも、キズナの肩口へ上り、耳打ちする。

（相手は四人。いずれも魔法使いの可能性がある。おそらく四人とも昼間の魔法使いと同等レベルだろう。決して侮るなよ、キズナ。相手は単詠唱魔法、地の利を行かせ）

（言われなくとも。私を誰だと思ってるの？）

（パンツ一丁で格好をつけられてもな）

（うつ……。ふふ……。いいわ、アンタの減らず口を塞いでやる）

（それは敵に言うセリフだろう）

（アンタも敵よ、私にとってはね）

（ふん、俺は獅子身中の虫か？）

（なによ、それ？）

（……）

（だ、黙ってないで、解説しなさいよ）

（……いいから、ほら、来たぞ。死にたかったら食らえ）

（死にたくなかったら避けるじゃないの！？）

舞い上がっていた煙の中から、二人の男が怒りにまかせて飛び込んでくる。敵は単詠唱魔法を発動済。魔力を伝導した証拠に、腕には魔法文字が躍っている。拳の表面は文字から変換された炎が渦を巻いていた。

俺はキズナの胸ポケットに素早く潜り込む。俺がきっちり所定の位置に入ったことを確認すると、キズナは準備万端とばかりに満足そうに笑った。

「そこで見てなさい、私の活躍をね」

「ふむ……拝見させてもらおう」

ぺろりと唇をなめ、キズナは体勢を低くする。手に持った【鵲鳩】に魔力を込める。キズナの指先から肩まで、大小様々な魔法文字が青白い炎となり、キズナの腕を燃やすように

取り巻き始めた。

魔法具は発動に詠唱を用いない。

製作の段階で、物に応じた魔法文字を魔法具内に埋め込むことで、詠唱の必要性をなくすのだ。それがキズナの纏う燃え上がる文字列であり、本来は詠唱されるべき文字列である。

我が弟子の不肖さを隠さず言えば……単詠唱魔法すら出来ない奴のための救済法、というところか。

ちなみに、イリスが部屋で使用したランプもその一つといえる。言うまでもないが、技術力はこの【鵲鳩】の方が何十倍も高度である。もともと流体である魔力を、高密度を保ったまま結晶化する。その技術は、倭国にだけ伝わる秘奥中の秘奥だ。

「八つ裂きにしてやるわ」

「四つ裂きでは駄目か？」

死体の山を築かれても困るだけなのだがな。

刹那　魔力が固形化する。

刀身が一瞬で生成された。

「……………綺麗……………」

陶然としたイリスのため息。  
輝く刀身。

美しく、それでいて猛々しいほどに蒼く燃える文字列を右腕に纏わせ、キズナは蒼き刀身を閃かせる。

男達の目に驚愕が走った。

今更驚いても、遅い。

【恩寵者】の魔力は青色。白く光る男達の文字列とは格が違う。 তারাを踏む男達が、突進から一転、散開して左右から挟み打ちにすべく疾走する。

……いい判断だ。そのまま前進してきたら、両腕が空を舞っていいところだ。

## 第十話・「魔法の使えない【恩寵者】」

人間の有視界は百八十度に及ばない。左右から挟撃してくるスーツ男は、それを見越して互いにキズナの死角に回り込もうとする。

「イリス！　そこにいたら邪魔！」

キズナはそうはさせじと、二人を視界にはつきりと捕らえられる位置へ動き回る。常に動きを止めぬこと、それが命を長らえさせる。蚊がなぜ殺されてしまうのか。それは目の前の好物に注意をひかれるあまり、動きを止めてしまうからだ。

せつかくのスピードも、止まればただの持ち腐れに過ぎない。

「さつさとティアナを連れてフロントの裏！」

「……わかった」

素直にうなずくと、ティアナの肩を担いでフロントの裏へ身を隠す。

「……キズナ、死なないで」

（……だそうだぞ。何か答えてやったらどうだ？）

「ふん、私の心配はいいから。終わったあとのデザート、覚悟しておきなさいよ」

肩越しに不敵な笑みを見せるが、それも瞬きの間のみ。すぐさま敵の姿を視界に納め、地面を蹴って、距離を保つ。

「……うん。ティアナ……きつと喜ぶ」

「楽しみにしてるわよ」

ロビーと呼べるほど広くない場所で、敵とキズナの立ち位置はめまぐるしく変わる。敵は明らかにキズナの様子をうかがっている。スピードを上げて、攻撃の態勢を取ったかと思いきや、すぐさまそのスピードを緩めて、様子見にはいる。まるで揺さぶりをかけているかのようだ。

「寝る前の食事は肥満の元なのだな」

「脂肪が胸に行くとしても？」

右手に握りしめた【鵲鴿】の青白い刀身が、通り道に蒼い残像を描く。

「ほう……それは楽しみだな。期待しないで待ってしよう」

【鵲鴿】からは常に魔力の発散が見られる。魔力を文字列から魔法に変換する詠唱魔法や単詠唱魔法ならば、魔法を放った瞬間に魔力の消費は止まる。

「そ、だから言うじゃない？ 果報は寝て待つものってね」

しかし、魔法刀【鵲鴿】は違う。常に刀身を保っておくために、常時魔力を消費し続けなければいけないのだ。キズナの魔力が桁違いだからこそ、魔力の消費が多い【鵲鴿】を起動し続けられる。おそらくは、敵もそれを観察しているのだろう。【恩寵者】であるキ

ズナががどれほどの魔力を持ち、どれほどの余力があり、どれほどの戦闘力があるのか……。

「それで食後に牛のように寝るのだと？ 幼稚な詭弁だな」

「詭弁でも筋は通っていると思うけど？」

「……ふん、迷路を抜けるのに壁を壊すことのどこが筋か。筋違いも良いところだ」

「単純で手っ取り早いから、私は好きね。むしろ大賛成」

やはりというか、キズナが嬉々として敵に仕掛けていった。壁に足をかけたと思ったら、壁に着地するように両足を曲げ、はじけたバネのように加速する。【鵲鴒】を平突きに構え、斜め後方から追ってきていたスーツ男に仕掛けていく。

分かつてはいたさ。

こうして彼我の戦力をうかがい続けるのが、キズナの戦い方ではないことぐらいな。

俺との会話でもイライラして、いつまでたっても襲ってこない敵にもイライラ。

今までのキズナを見れば、赤ん坊でも分かる簡単な理屈だ。

食べたかったら食べる。寝たかったら寝る。欲しかったら手に入る。

それがキズナたる、馬鹿弟子たる所以。

キズナの強硬な手段に、男は虚を突かれたのだろっ。ま、それも分かる。

数的不利な状況で、あえて仕掛ける必要性もない。おそらく敵は



四人とも魔法使いとして訓練されている。その自負もあるだろう。いくら【恩寵者】とてそう簡単に戦況を覆せないだろう……などという自負が。

しかし、残念だ。

キズナはお前達の自負を上回るくらい馬鹿なのだぞ。

「だから、壁も吹き飛ばしてきたという訳か」

「そんなこと考えてないわ。ただ私は、何事も派手な方が楽しいのよ」

平付きが、疾風となったキズナによって繰り出される。男はありったけ身体をひねって、キズナの突きをかわそうとする。

男のスーツの胸元は簡単に切り裂かれた。

舌打ちを鳴らしながら、男は一言つぶやく。

単詠唱魔法。

展開させた魔法文字が、防御の光となって男の前面を覆い始める。そんなことはお構いなしとばかりに、蒼い文字列を纏ったキズナの右腕が、伸びきったままに横薙ぎに移行する。並の魔法使いならば首を切り落とされているだろうキズナの一振りは、魔法の壁を破壊するにとどまった。

「馬鹿め、そんなことばかり考えるから……いや、むしろ考えなしだから、スカートすらはき忘れるのだ。あきれてものが言えん」

「さっきから、べらべらべらべらもの言ってるくせに……よく言うわ」

「それはもののたとえというものだ」

「それこそ詭弁って言うんじゃない？　言っていて苦しいわね」

「お前が言うな！　馬鹿弟子が！」

俺の怒声を上書きしたのは、仲間の苦戦に駆けつける、二人目のスーツ男。

両腕に電撃を蓄えて、それをキズナに向けて放つ。  
キズナは背後の気配だけで攻撃の接近を悟っているはずだ。それでもなお防御の壁を破壊されたスーツの男に高速接近、とどめを差しに行く。

苦し紛れに後退しようとする男の胸元めがけて、キズナは斬撃ではなく強烈な蹴りを放った。

かかとに鉄板を仕込んであるキズナのブーツだ。男の胸からは幾つもの骨が折れる鈍い音が響き、その音がキズナの歓喜を呼び覚ます。

黒スーツの胸にブーツの足形をつけられた男は、壁に激突して昏倒する。キズナはその男の生死には興味ないようで、男の胸を蹴ったのを踏み台に、反対側へ跳躍。

向かってくる電撃に保身もなく飛び込んでいく。

おい、距離を置くという考えはないのか。とことん危険を顧みない奴め。

空中で胸を反らし、電撃の叫びを耳元で聞く。

触れただけで身体が麻痺するか、神経が焼き切れそうなほどの威力。

高電圧の刃はキズナの身体に手を伸ばすが、キズナの勇気はそれ

すらもはねのける。針の穴に糸を通すようなぎりぎりの感覚で電撃の魔の手をすり抜け、驚愕に刮目する男に袈裟斬り浴びせる。

それはまさに断罪そのものだ。

男の身体に青い直線が刻まれる。男の身体は骨ごと切り裂かれ、時間差でスーツの間から大量の血が飛び出す。

口から大量の血液が吐き出されると、体内の五臓六腑がこぼれ出すのはほぼ同時だった。

「全く、馬鹿とは見ていて飽きの来ないものだな」

「うるさいわね……馬鹿って言った方が馬鹿なのよ」

俺たちは横たわる二人のスーツ男には見向きもしない。

武器を手にするということは、誰かを傷つけるということ。

生き死になどは日常茶飯事。

魔法を使うということは、誰かを傷つけること。

生き死になどは日常茶飯事。

武器を使い、魔法を使い、誰も傷つけずに済むなどという生やさしい考えは、持っただけ無駄だ。もしも、両方とも持っていて、そんな戯れ言を口にするのなら、それはよほどの偽善者であることだろう。

俺たちにそんな戯れ言は通用しないし、戯れ言を実行しようとも思わない。

【恩寵者】に生まれ、魔法使いに生きれば、どんな道を選ぼうと茨の道を歩くことになる。イリスとて例外ではない。【恩寵者】であることが分かった瞬間、その身を狙われることになった。

人より優れたものを持つことは、人よりも多くのリスクを背負うことと同義なのだ。

【恩寵者】はそれだけの魔力量と、素質を持っている。

「馬鹿と言った方が馬鹿だと？ ……俺は馬鹿とは言っていないぞ。俺が言ったのは馬鹿弟子だ。馬鹿と弟子はセット。いわば馬鹿弟子という固有名詞なのだ。お前はバカラというトランプ遊びに対しても、『はい、今、馬鹿って言ったっ！』……などと指摘するのか？ それこそ馬鹿だ。だから、私は馬鹿とは言っていないのだ」

「何言ってるかわかんないわ」

「ああ、そうだ……やはりお前の言うとおりだ。馬鹿と言った方が馬鹿だったよ。お前に論理的な思考をさせようとした俺が馬鹿だったのだ。だが、そんな弟子に頭を痛める俺も何かと絵になる。苦労人としても言うべきが。世界の同情を誘う」

男の胸元を切り裂いた【鵲鴒】に血が付いていた。起動し続ける【鵲鴒】の魔力熱によって、じゅうと蒸発していく。血が蒸発する悪臭が鼻を突き、俺は思わずむせてしまう。

「……痛い男」

「偉大な男だっ！」

悪臭にめげずに、俺はがなり立てる。

「ナルシストカー？」

「余計なものをプラスするんじゃないっ！」

キズナと俺たちの奇妙なやりとりに、眉をしかめる残り二人のスーツ男。

俺はポケットの中だから、奴等からは見えない。とするとキズナが独り言を言っているように見える訳か。確かにそれは気味が悪いだろうな。

キズナは俺との会話の中で表情を憤怒に染めたり、喜色に染めたりする感情豊かな奴だ。戦いに駆られた狂戦士ならともかく、これはやりにくいだろう。

一方で、俺とキズナにはスタンダードで、これがないと逆に物足りなささえ感じる。

ああ……そういう意味では、キズナも狂戦士にカテゴライズされるのかもな。哀れ、キズナ。

「……なるほどな。よく分かった」

俺がキズナに合掌していると、スーツ男の一人が悟り顔でうなずく。

「確かに、報告通りってわけだな」

残り二人のスーツの男が何かを確認し合っていた。

殺された仲間のことなど俺たち同様気になどしていない。

敵は仲間などではなく、傭兵の類なのだろう。とすれば、ペランとか言う奴の傭兵なのだろうか。

……いや、今はそんなことは二の次か。

さて、どうするキズナ。奴等はお前の弱点に気がついたようだぞ。見当違いであってくれば、今後の展開が楽なのだが……すぎるだけ無駄な希望か。

「魔法の使えない【恩寵者】」

男はその言葉を口にする、確信したような笑みを浮かべた。

やはり、気がつかないわけがないか……。

お前がわざわざ危険な橋を渡るからだ。

魔法使いとは臆病な生き物。もともと魔法は、命のやりとりから離れた後方支援を主体として進化してきた。そんな魔法という技術が、単詠唱魔法の確立と共に、急に戦闘の最前線に顔を出すようになって、まだ十年にも満たない。

つまり、近接戦闘に不慣れなものが多いことを意味する。一朝一夕では得られない戦闘技術を一流の戦士の域まで高めつつ、魔法も同等の腕にある……そんな二匹のウサギを追える天才的な才能の持主はまだ数少ない。

よって大概の魔法使いは、近接戦闘中、紙一重の回避になるぐらいならば、極力魔法での防御に頼る。最初に蹴り倒した魔法使いがまさにそれだった。

それをキズナは、大胆にも魔法でカバーせず突っ込んで行った……推論を導くには容易いな。

そして、奴等の言った報告……どうやら昼間の奴等は生きていて、アジトに逃げ帰り、そのまま情報を共有してしまったらしい。

まったく……身から出たさびだ、馬鹿者が。

お前が訓練所の兵士なら反省房行き確定、国営に関する情報漏洩は懲戒免職、それぐらお前は短慮だと言うことだ、キズナ。

「勘違いするんじゃないわよ！ 魔法は使えるわよ！ ……………  
…詠唱魔法だけど」

この上自ら恥を重ねるとは。もはや、苦笑いを通り越して失笑ものだ。

「だからどうしたって言うの？」

【鵲鳩】の切っ先をスーツ男に向けて、口角から泡を飛ばす。キズナの怒りに従うように、右腕を覆いながら燃える文字列が激しさを増す。

「所詮は単詠唱魔法を使えるだけが能の三流魔法使い……私がまとめて地獄に送ってあげるわ！」

「……だとしたら、単詠唱魔法を使えないお前は四流になるわけだが」

墓穴を掘るな、墓穴を。

## 第十一話・「燃えるっ!？」

「キズナ、力を貸してやろうか？」

目をつぶっていた状態から、片目を開けてキズナを見すえる。

「アンタはそこで見てなさい。こんな状況ぐらい、一人で何とかしてみせるわ」

「先程は敵にも油断があった。だが、今回はない。さらには、お前の弱点も把握している。敵はお前のように馬鹿ではないからな、一筋縄では行かんぞ」

「黙って」

「言っておくが、お前はまだ未熟だ。師匠である俺が言うのだから間違いない」

「なら、私が未熟じゃないってことを見せつけてやるわよ。アンタにも……敵にもね!」

鼻息荒く、豪語する。

敵を知らず、己も知らず……先人の教えをことごとく馬耳東風とは。本当にしょうがない奴だな……未熟なのは胸だけにしてほしい。

【鵲鴒】を居合い抜き位置に構えると、正面からスピード任せに斬りかかるキズナ。並んでいた二人のスーツ男は、ニヤリと歪ませていた唇を引き締めると、示し合わせたように二手に分かれた。

歓談モードから、戦闘モードへ。



引き締められた口元から魔法のワンフレーズがこぼれる。奇しくも、互いに同じ内容を意味する単詠唱魔法だった。

「風のように」

「……スピード」

単詠唱魔法がキズナの到達よりも早く男達の移動速度をフォローする。二手に分かれた男達を見て、キズナは舌打ちする。【鵲鴿】を振り下ろす先を失ったキズナは、方向転換を余儀なくされ、あわてて地面を蹴る。

一人の男が壁沿いに駆けていく。逆に追いかける側に回ったキズナが、持ち前のスピードで男に迫る。

「待ちなさいよ！」

「断言する。そういつて待つ奴はいない」

【鵲鴿】を左手で逆手に持ち替え、素早く右手で抜刀しやすいようにする。右腕で燃えさかっていた文字列が、左手に移動。キズナのスピードに追いつけなくなった青い文字列は、まるで火の粉のようになり力を失って消失した。それでも次から次へと燃焼するキズナの魔力は、炎の文字列を生み、キズナの腕を覆い尽くす。

魔力量で言ったら、スーツ男二人合わせてもキズナの足元にも及ぶまい。【恩寵者】とはそういう存在だ。そして、そういう存在だと知られているからこそ、男達は対恩寵者戦に慎重を期しているはずだ。

魔法使いの戦いとは、単純な魔力量の戦いではない。

キズナ、俺はお前にそれを教えていないわけではないのだが……。

男の背が迫る。

魔法によって加速を得ている男に追いつくとは、我が弟子ながら驚異的な運動神経だ。キズナがいよいよ抜刀の時を迎える。逆手に持っていた左手の【鵲鴿】に右手がかかる。

青い流線が男の背中に迫ろうかという時。

「炎のように」

キズナに追いかけていない男が、さらなる単詠唱魔法を唱えた。横殴りの炎に皮膚が悲鳴を上げる。壁に掛かっていた絵画や、転がっていたイスが一瞬で灰になる。

「あつツ！ 燃えるっ！？」

胸ポケット中は阿鼻叫喚。

キズナを見れば、ツインテールに纏められていない髪の毛の一部がちりちりになっている。追跡を止めて身をひねっていなかったら、俺もキズナもこの世から消失していただろう。

「……キズナの胸がもう少し大きかったら、炎にやられていた……！？」

くっ……なんて空しい勝利だ。

「うるさいわよ！ 外野っ！」

位置的には内野だ。

「髪は女の命！ 代償はアンタの命！」

身をひねって着地するその足で、炎を放った男に突進する。

「風のように」

キズナに背中を向けると、単詠唱魔法をつぶやく男。

キズナの横薙ぎの一撃は、男の無防備な背中を捕らえるには至らなかった。キズナの歯がみする音が聞こえてきた。

今度は、別の男と追いかけてこを始める。

二人目の男も壁際を走って、キズナから遠ざかろうとする。背中を向けてまで逃げる割りには、スピードも特段高速というわけではない。キズナの身体能力を持ってすればものの数秒で魔法刀の間合いいにはいるだろう。

「背中傷は、戦士の恥ってね」

言葉を言い放つと同時に、キズナの刀が鞘走りの音もなく抜き放たれる。

確かに【鵲鳩】は完璧な軌道を描いた。

「……グレイブウォール」

……単詠唱魔法によって阻まれていなければ。

抜き放たれた【鵲鳩】は、追いかけていた男の背後の地面から生えてきた石柱によって切れ味を鈍らされる。石柱をものの見事に切断してみせる切れ味も、さすがにその向こうの男の背中を切るまでには至らなかった。切断された石柱が、豪快な音を立てて床に横倒しになる。ばきばきと床を突き抜け、衝撃が建物を揺るがす。

「ふざけるんじゃない……！」

言葉尻を噛み殺す。

逃げに徹する敵に熱を帯びるキズナ。切り落とした石柱に足をかけて跳躍。石柱によって難を逃れた男に追いつがろうとする。ジャンプ一番、逆手に持っていた【鵲鳩】を振りかぶり、一刀両断の構え。

「……グレイブストーン」

横から聞こえたのは、さらなる敵の単詠唱魔法。しかも、着地際を狙ったタイミングだった。背中を見せて逃げていた男に追いつこうかという寸前に、キズナはまたも石に阻まれる。

床板を突き破って飛び出してくるのは、鍾乳洞も真っ青の鋭い岩の数々。

落ちてくるのではなく、空に向かって飛び出してくる光景に、キズナの心臓が収縮するのが分かった。

「古より胎動する風の精霊よ、我が盟約に　　っ！」

……間に合うはずがなからう。

単詠唱魔法なら間に合っただろうが、詠唱魔法では時間が足りないすぎる。

慌てて【鵲鳩】で鍾乳石を切り払おうとするが、五本が限界だった。刀を振り切ってしまった隙を狙って、キズナの脇腹を鍾乳石の刃が襲った。身をよじって交わすのが精一杯。キズナは甘んじて脇

腹を切り裂かれることとなり、身体が空中で回転してしまう。

あとは、自由落下に身を任せるだけだ。

さらなる鍾乳石が発射され、キズナを蹂躪しようとする。キズナは空中で血液を飛び散らせながら、【鵲鴿】を向かってくる鍾乳石に突き立てた。鍾乳石の頑丈さを利用して、体勢を安定させる。

「溶岩のように」

逃げに徹していたはずの男も、これを好機と見たのか畳みかけてくる。絵画とイスを灰にしたものよりも格段に高熱の熱源が迫る。

大気さえも焦がす赤。触れれば体の芯まで溶かす。

被れば灰すら残らないだろう。

飛沫ですら触れることを許されない凶悪な液体が、鍾乳石ごとキズナを溶かそうとする。【鵲鴿】は鍾乳石に刺さったまま。

手放して逃げるには【鵲鴿】は惜しい代物。

しかし、命には変えられない。

耐えがたいジレンマ。

キズナの頬を大粒の汗がしたたり落ちる。

「力を」

「……お断りよ！」

俺の誘いと、【鵲鴿】への魔法供給の両方を絶つキズナ。すると刺さっていた刀身部分は消失し、鏢と柄だけが残る。

ふむ……考えたな。

鍾乳石が溶岩に飲まれたところで、魔法の効力が切れ、魔力が無に帰す。命からがら地面に着地したキズナが、大きく息を吐く。

脇腹をかすめた鍾乳石はキズナに予想以上のダメージを与えていた。

脇腹からしたたる血が、下着の黒に染み込み、太ももの内側をなぞって落ちていく。

おい、これではまるで、月……いや、自重するでしょう。

「なかなかやるじゃない……」

脇腹を押さえて、笑うキズナ。

「あきらめて降伏しろ【恩寵者】。お前は金になる」

「悪いけど、そんな安い女じゃないの」

「降伏しないのならば、仕方がないな」

「アンタ達に降伏するくらいなら、死んだ方が幸福よ……なんちゃって」

## 第十二話・「心配なんてらしくないじゃない」

血が溢れる脇腹を左手で押さえながら、右手の【鵲鳩】に青い火を灯す。

魔力はまだまだキズナの中で煮えたぎっている。魔力が体内から文字列へと変換され、刀身を復元していく。刀身が発する青いきらめきは、キズナの瞳の中に灯る意思を体現するようだった。

ゆらりと一步を踏み出すキズナ。

脇腹の傷を構いもせずに、不敵な笑みを浮かべたまま戦いに赴く。

「策があつてのことだろうな？」

「ないわ、そんなもの」

「……」

俺は押し黙るしかなかった。

「言つたでしょ？ 私は迷路の壁を突き破つてもゴールするの。道筋をいちいち覚えてなんかいられない。袋小路で引き返してなんていられない。スタートとゴールがある……私にはそれで十分。あとはひたすらまっすぐに行くだけよ」

第一步は床板にひびを入れた。

二歩目で最大速を得たキズナが、疾風の如くスーツの男に斬りかかる。

前回同様、男達は二手に分かれて、一人はキズナから距離を置くことに専念。そうして一人がキズナを引きつけている間に、もう一

人が魔法で攻撃する。魔法使いとしての接近戦を挑むよりも、何倍も効率が良く、かつ、魔法使いにあった戦い方だ。理になっっている。

「炎のように」

忌々しげにのどを鳴らすキズナ。

「……グレイブストーン」

キズナが最大速を保ちながら二手に分かれたうちの一人に追いつこうとすと、やはり魔法が飛んできた。

単詠唱魔法。自分自身で決定する、個性のあるショートカットの文言が聞こえれば、キズナはその度に追跡の中断を余儀なくされ、迫り来る炎やら石つぶてやらから身を守ることになる。

【鵲鴿】で切り払い、身をよじり、地面を蹴って魔法をかくぐる。

一つの魔法を乗り越える度に、キズナの身体には傷が増えていく。頬を切られた血は拭うことも忘れられ、空中に飛散する。

腕はうつ血で紫色に染まり、【鵲鴿】を振るう度にキズナは齒を食いしばった。

太ももに出来た水ぶくれが、キズナのスピードを殺し、危うくマグマに飲まれそうになってしまう。

「……大丈夫か？」

「それって、私に言ってるの？」

上着に燃え移った火をはたいて消す。



「ああ、お前に言っている」

「何よ、心配なんてらしくないじゃない」

「……」

「ああ……そういうこと。リニオが心配してくるほど、私は大丈夫じゃないように見えるわけね」

馬鹿にするんじゃないわよ、そんな意味を込めて鼻を鳴らす。

「それにリニオは私の身体が目当て……そりゃ心配もするわよね」

壁を蹴って男を追撃しながらも、降りかかる溶岩に身を投げ出す。テールをひっくり返してとっさの盾代わりとする。それで得たわずかな時間で溶岩から抜け出すと、キズナは速度を上げた。

「どう解釈しようとお前の自由だが、俺がお前の胸ポケットにいると言うことを忘れるなよ」

「ふん、頼もしい師匠ね」

「そういう意味ではない。あのマグマに飲込まれたら、お前も俺も命はないということを言いたかったんだ。いわば一蓮托生……そうならぬよう、身を粉にして頑張ってくれ。だが、事と次第によっては……手を貸さないこともない」

「手出し無用よ」

「ふむ……ならば口だ」

「口出しも無用」

む……キズナにしては読みが早いな。

「それに頭に上っていた血が少し落ちてきた気がするの、なんか気分が良いわ」

俺の記憶が正しければ、それは貧血という奴では……不安よぎる俺の頭が、むち打ちになるぐらいに激しく揺れる。

キズナの身体はまるで羽でも生えたよう。出血のおかげで身体が軽くなったか？ ……などという冗談を言おうとする俺の口が、風圧のせいで空けられない。何とかして胸ポケットから首を回らせば、キズナの身体のおちこちから魔力が漏れ出している。

穴という穴、それこそ皮膚に至るまで微量の魔力の放出が見られる。それはキズナの無意識の産物なのだろう。

青い文字列がキズナの身体の周りで踊っている。

「……スピード」

「溶岩のように」

役割分担のなされた単詠唱魔法が交互に詠唱される。逃げる男の足と、攻撃する男の腕を白い文字列がぐると回転する。

魔力が文字列へ変換、魔法が行使されている証拠だ。

溶岩が、男の背中を追うキズナに降りかかる。赤い猛りがキズナの頭上を覆い尽くす。触れたものを灰燼に帰す熱量に、今回ばかりはさしもの俺も息をのんでしまう。

キズナはあろう事かマグマより早く通り抜けようと試みたのだ。

今までは急ブレーキの末に、回避を選択していたキズナ。溶岩がキズナの髪の毛を、服を発火点へと近付ける。

熱い。燃えるように熱い。

肌が、頭が、いや全身が燃えるように痛い。

まるでなくなってしまうたかのようにさえ感じる。

視界は真っ赤に染まっていた。

燃える津波の真下を通り抜けるキズナが瞬間、風になったような錯覚を見る。飲込まれていく壁をいち早く抜け、キズナは白刃を振るう。

敵は防御の単詠唱魔法を唱えようとしたのだろうか。

口を開こうとする努力も空しく、男の背中が青白い軌跡と共に床に沈んだ。

「これで、あと一人！」

ぱつさりと切られた男の背中を、キズナはブーツで踏みつけた。

鉄板の仕込まれたブーツで背骨を折ると、男は短い断末魔を上げる。なんと言ったのかは分からない。

耳を澄ますには時間はあまりにもなさ過ぎた。残った一人が、男ごとキズナを燃やそうと魔法を放っていた。キズナはさらなる加速力を経て疾駆する。

まだ早くなると言うのか。

もはや襲い来る魔法に慌てる必要などなくなっていた。文字列を置き去りにして、キズナは残像となる。遅れて到達した魔法が、男の死体を飲込んで燃え上がらせる。あとには骨一つ残らなかった。

「チェックメイトよ、覚悟は良いわね？」

逃げようとした男の正面に回り込むと、男の喉元に【鵲鳩】を突

きつける。

ふう……これで勝敗は決したか。本当に、一時はどうなることかと……。

「チェックメイトにしては、いささか相手が小物過ぎると思わぬか？」

キズナが俺をにらみ付けてくる。

いや、俺が言ったのではないぞ。第一、聞こえた方向で分かるだろうが。

「それもそうね」

声は扉が蹴破られた玄関口からだった。

「なかなかやるではないか、【恩寵者】！」

丸太のような腕を組んだ中年の男がいた。

玄関口が狭いと思わせるほどの体躯。形の良い髭をいじりながら豪快に笑っている。腰には倭国刀を下げ、着込んだスーツは内側の筋肉に張り裂けそうだ。

「もう……この後始末をつけるのは大変ですよ？ 宿の破壊に、斬殺死体……どうしてくれるのですか……ヘイデンさん」

大きな体の脇に立っているのは、ひよろつとした優男だった。

ヘイデンと同じようにスーツ姿だが、胸元やカフスには高級そうな宝石が輝いている。一見すれば、良いところのお坊ちゃん然とした感じ。体つきは戦闘とは無縁のようであり、武装もしていない。

ヘイデンと呼ばれた男と並び立つせいで、余計にそれが際だって見えた。

「済まぬ、ペラン殿……私の部下が出過ぎたことをしたようだ。部下の不始末は、このヘイデン・ブッフバルトの不始末。罰を受けるのなら、部下と私ともども相応のものにしていたらこう」

大きな頭を下げる。

「ま、それは後で考えることにしましょう」

「ですな……」

頭を下げていたヘイデンが規律正しい動きで頭を上げる。軍人のような機敏で機械的な動きだった。

### 第十三話・「もらったっ！」

「ふゝん……あれが親玉ね……案外ちよろそう」

青く燃烧する魔力の文字列を周囲にはべらせながら、キズナはほくそ笑む。

魔法刀【鵲鴿】……その切っ先を地面と水平にし、体勢を低く落とす。刀の柄を握りしめていた右手は、柄の頭を包み込むように握りなおされ、力を溜めるように後に大きく引いていく。左手は刀身をなめながらゆっくりと前方へ伸ばされた。まるで敵に照準するように、左手の指先は刀の切っ先へ添えられる。

「……難しく考える必要なんてないじゃない……」

左足つま先を前に出し、右足を最大限に曲げる。それによりキズナの体勢がさらに沈んだ。倭国刀を使用した構えとしては、かなり特異な部類にはいるものである。数多ある剣術の技、それもある一点にのみ磨き上げられた技。

「おい、キズナ。俺にはお前の考えていることが手に取るように分かるぞ。いいか、あのヘイデンという男はかなりの使い手だ。俺と同じ強者同士だからな、匂いで分かる」

「ふふ……簡単よ、簡単。やっぱり物事はこうでなくちゃ……」

キズナの肌から立ち上る魔力が大きく揺れる。それを受けて、無重力状態になってしまったかのように、長い髪の毛が中空をゆらゆらと動き始めた。青い燐光を纏うから、あたかも髪の毛が青く燃え

上がっているようにさえ見える。

俺としたことが、わずかでもその様を美しいと思ってしまう。  
イリスが呆けるようにつぶやいた、綺麗……、という表現も、あながち見当違いではないようだった。

むう……なんか悔しいぞ……っと、いかんいかん、気を取り直さねば。

「ごほん！ キズナ……これは勘ではない、経験則というものだ。  
言い換えるなら戦士としての嗅覚だな。故人曰く、将を射んとせば  
まず馬を射よ、と言ってだな」

「ちよつと！ そののっ！」

俺の忠告など耳に入っていなかった。いらつく奴だ。  
キズナが声を大にする。

「そのの……ええつと……ぺらんぺらん！」

ペラン。レオポルド・ペランだ、馬鹿者。敵の親玉の名前くらい  
しっかり覚える。

「ええと……私に言っているのでしょうか？」

ペランは端整な顔立ちに困惑を浮かべながら、頬を指でかいてい  
る。まるで強引な彼女に連れ回されて困っている彼氏のような、そ  
んな日常の困り方だった。少なくとも人の生死が左右される非日常  
での表情ではない。

……この男、場慣れしている。

「そうよ、確認するけど、アンタがペランなのね？」

「ええ、そうですよ」

しめた。キズナの笑みがそう物語っている。

「失礼ですがあなたは？ 【恩寵者】さん？」

礼儀正しくとって返すペラン。

「私の名前？ そうね、私の名前は」

必殺の姿勢のまま、キズナは言い放つ。

「これから死ぬ人に名乗っても仕方ないことよ！」

キズナが神速と化した。

馬鹿めが。目先の欲に走ったな。後悔は先には来ないのだぞ。

……ああ、そうか。お前には後にも先にも後悔など来ないのだったな。

キズナの加速は、まさに疾風迅雷だった。

あまりの速さに、一般人には一陣の風が吹いたとしか感じられないだろう。そして、一般人が一陣の風を肌に感じる頃には事は終わっている。

地面を這うようにさらなる急加速。

キズナは瞬き一つ、文字通り瞬間をもってペランへと突撃した。最接近し、右手に握られていた刀を最高速で押し出す。

左手で狙い定め、寸分の狂いなく心の臓器を貫く。



魂は速やかに身体からはなれ、ペランは痛みもなくあの世へと送られるだろう。

「もらったっ！」

スピードを信条とするキズナが最も得意とし、キズナらしさが如実に表れた技。

まあ……俺から言わせれば、それはどこまでも愚直で、安直で、直線的で、直情的で……素直な技だ。

ただの刺突。そう、ただ速いだけの刺突だ。

本当は技でもなんでもない。でも、究極の域にまで突き詰めたそれがキズナにとって、絶対的な自負を持った技となる。他者が畏怖する技となる。

駆けるキズナの背中には翼があった。

身体から放出される魔力は文字列となり、キズナの背中を後押しする羽となる。青く発光する翼は、あたかも力強くはばいたように見え、キズナの【鵲鴒】をくちばしとするならば、獲物を捕食する姿に酷似させる。

青白い剣閃は、なんの抵抗もなくペランの胸部を貫き、心臓は貫かれたことも気がつかずにどくんどくと脈動する。ペランは傷折れることも出来ずに、その場に立ちつくすしかない。

苦痛もなく、意識だけを失う。

数秒後、重力に身体を奪われ、仰向けにゆっくり倒れていた。

……と、我が愚かな弟子が思い描いていた未来は、ざっとこんな

ところだろうな。

「助かりましたよ。ヘイデンさん」

ペランは健在だった。

「フリーの【恩寵者】風情が！ 思い上がるでないわ！」

キズナ必殺の刺突は、ペランの胸元に届く寸前で打ち落とされていた。

キズナが驚愕に目を見開く。

キズナの【鵲鴒】を防いだのは、ヘイデンの帯刀していた倭国刀だ。納刀したまま、鞘でキズナの刀身を打ち落とした。キズナは素早く地面に刺さった刀を引き抜くと、さらにペランを狙うべく横手に回り込もうとする。

「二度言わせる気か？ 思い上がるでないと！」

「何よっ……！」

ペランの肩口を狙った斬撃は、またもヘイデンの刀の鞘によって受け止められている。

キズナの【鵲鴒】によって、ヘイデンの鞘に徐々に刀傷が入っていく。魔力の高熱により、刀身に触れている部分が溶け出しているのだろう。

ぐずぐずと溶ける音に混じって、焼ける匂いが鼻腔を突いてくる。

「なんなのよ……！」

キズナの焦りが手を取るように分かる。キズナの必殺の刺突がこ  
うも簡単に打ち払われたことで、キズナの自負が揺らぎ始めたのだ。  
自ら宣戦布告をするキズナもキズナなのだが……。

「少し灸を据える必要があるようだな、【恩寵者】の少女よ」

「あいにく私は健康体なの。灸なら間に合っているわ」

「ふん、その威勢やよし！」

やりとりを火ぶたに、ヘイデンは傷ついた鞘から素早く抜刀する。

#### 第十四話・「スワップ」

見ただけでそうと分かる業物の刀が、銀の一閃を描いてキズナの頭上から襲いかかる。キズナは【鵲鴿】を盾にしてその一撃を受け止める。

ヘイデンの体格からいっても、その一撃の重さは計り知れないものがあつた。受け止めるキズナの胆力もたいしたものだが、この場合、褒めるのはヘイデンの剛力だろう。ヘイデンの攻撃に込められた力がどれほどのものか、床板にめり込むキズナの足で分かうというものだ。

キズナはしびれる身体に鞭を入れ、身体をぐるりと回転させる。鉄板を仕込んだブーツでの回し蹴り。受ければ肋骨の破壊は免れない。ヘイデンは鼻息を荒くし、キズナのかかとを大きな手のひらでしっかりと受け止める。

キズナは捕まえられたかかとを引き戻そうとするが、ヘイデンの握力がそれを許さない。

「ブーツのかかたと鉄板とは……なかなか侮れぬ娘よ」

「残念、つま先もなの」

右足を捕まれた格好から、キズナは身体を投げ出した。

残された左足で跳躍すると、その左足でヘイデンの側頭部に蹴りを放つ。無茶な体勢だ。俺は胸ポケットから投げ出されそうになって、慌てて服をつかみにかかる。視界を巡らせて攻防の行方を探れば、キズナの左足がヘイデンの刀で受け止められるところだった。腕をクロスする状態でヘイデンはキズナの連続攻撃を受け止めている。

右手で、右足のかかとを。左手に持った刀でキズナの左足を。

空中に身体を投げているキズナは、それを見て空気を吐き出した。

「避けて見せなさいよ」

【鵲鴿】はフリーだ。受け止めていた刀は左足の蹴りの防御に回されている。青い流線が、ヘイデンの胴体を貫こうと迫る。しなやかな身体だからこそ可能な、キズナのとっさの機転。

三連撃。

「未熟だぞ娘！ 避けるまでもないわっ！」

キズナの身体が面白いように振り回される。右手でつかんだキズナのかかとを中心に、ヘイデンはキズナの身体をもてあそび、回転力を得たところでキズナを豪快に放り投げた。イリスの隠れていたフロントを破壊して、ようやく止まる。

「……キズナ……」

「なにを不安そうな顔してるのよ、みっともない」

敵の強さにおびえるイリスがキズナに声をかける。無表情のなかにも不安の影がよぎっていた。

「ほう……まだ立てるか。タフだな【恩寵者】」

「タフ？ 違うわね。アンタの攻撃が物足りないだけよ」

「はっはっはっ！ いや、楽しいな！ よもやこれほどの娘であるとは――」

太ももを叩いて喜びを露わにする。馬鹿にするというよりは、心底楽しんでるようにさえ見えるヘイデンの大笑だった。

キズナの身体はどう見ても満身創痍に近い。

えぐられた脇腹、ぶつけた背中。魔力の大量消費。それでもキズナが相変わらずのスピードで戦闘を継続できるのは、ひとえに【恩寵者】たる破格の魔力量と云うしかない。無意識のうちに発動するキズナの魔法が、キズナの知らぬ間に身体を治癒していつている。しかし、その回復スピードは遅々としたものだ。ダメージが上回っているのは言うまでもない。

「笑っていられるのも今の内よ、うどの大木」

「ふん！ 私とて、大声でにうどといわれて黙っていられるほど出来てはおらぬ。私がうどかどうかは、その身に刻むでしょう！」

「上等……！ 二度と私の目の前に現れないように、私はアンタの脳裏に刻んであげるわよ」

得意の刺突の体勢に身をかめる。

「愚直、あまりにも愚直」

ヘイデンは巨大な胸板の前で腕を組み、キズナを見おろす。

（おい、キズナ……ヘイデンの言うとおり焼け石に水だと思っがな）

（焼け石に水でも、繰り返しれば冷めるんじゃない？）

（強情っ張りめ……おとなしく私の力を頼ればいいものを）

（親切の押し売りは遠慮するわ）

青い魔法文字を吹き上がらせて、すさまじいスピードで突っ込んでいく。

「無駄だぞ！ 【恩寵者】！」

組んでいた腕を解き、抜刀した刀を構える。正眼に構えるヘイデンの圧力は、迫り来る津波を思わせた。

圧倒的な体格が、立ち上る闘気が、鷹のような鋭い眼光が、キズナを飲込もうとしている。対するキズナは、大津波に舐先を向ける小舟のようなものだ。

最高速でキズナが押し出した切っ先は、ヘイデンの揺れる切っ先によって打ち払われる。スピードをそらされて前のめりになりそうな身体が、刹那、舞い上がる。

急加速に、急な方向転換。

作用反作用の法則という道理をねじ伏せ、無茶を通そうとする。

胸ポケットの中からでも聞こえた。

キズナの身体が悲鳴を上げている。

歯を食いしばったキズナが、あり得ない軌道で空中から刺突を放つ。身体がきしむ音の後に、何かが折れる音が響いた。やはり身体が堪えられないか。

だが、その死角から放たれた刺突は、ヘイデンの息の根を止めるに余りある。

「応っ！」

気合いがキズナの刺突をかるうじて受け止めさせる。刀を素早く引き戻し、キズナの刺突を受け止めてみせた。経験がそうさせるのだろうか、キズナの刺突をいなした後でも油断したりはしなかった。次なる一手を待ち、全ての体勢に備えていたからこそ、キズナの奇襲に対応することを可能にした。ヘイデンの腕の筋肉が膨れあがる。

力と力がぶつかり合う。

魔力をともなったキズナの一撃に、ヘイデンの身体が押されている。キズナと同じくヘイデンにとっても、代償は大きかったようだ。業物である刀が【鵲鴒】の刺突を受け止めた衝撃で破砕する。

はじかれるように距離を取った両者だが、キズナはそこに勝機を見出そうとする。

刀を失ったヘイデンの手には刀の柄だけが残る。

持っている武器は他には見あたらない。

単詠唱魔法でも、今のキズナのスピードには及ばないだろう。それを直感的に悟っているキズナ。戦闘に対する嗅覚は、胸とは違い一人前だ。俺が保証している。

キズナはアキレス腱に最大の負荷をかけ、床板を蹴った。

疾風。

キズナから逃げるように、舞い上がるほこりがキズナに花道を作る。勝負は、ものの一秒で決するはず。

しかし、俺の脳裏には警鐘が鳴り響く。

倭国刀の構造上、刀身の根本には茎なかこという部分が存在する。その茎の周りを柄が覆うような構造だ。つまり、茎の部分を柄の中に残したまま綺麗に破砕することなどあり得るのだろうか。ありえるの



かもしれない。

だが、もしそうでないとしたら。『あえて』そうなるようになっていたのだとしたら。

頭痛がする。なにか俺は見逃している。

もし俺の推測が正しく、最悪の事態を想定しなければいけないとしたら。

なぜ、柄だけが残ったのか。

ヘイデンはなにを隠している。

なぜ『あえて』刀で受け止めた。

刀を壊してなんの利がある……？

「私の勝ちよっ！」

ヘイデンの胸元に吸い込まれていく【鵲鴿】の切っ先。勝利を悟ったのだろう、キズナの顔がほころびかける。

それを目にした俺は、ぞっとする思いが自分の背中を駆け上がっていくのを感じた。

戦慄。

闇が視界を覆っていく気分だった。

「……勝利の瞬間にこそ、慢心が生じる。それはいかな達人とて逃れられぬ」

俺の耳にヘイデンのつぶやきが聞こえた。

「刻みなさいっ！」

「それはお主の方だ、【恩寵者】」

ヘイデンの嘲笑。

警鐘が俺に声を上げさせていた。なりふり構っていられなかった。

「キズナ！ 奴の持っているのはっ！」

ヘイデンの腕が白い光を放ち、一瞬で魔法文字に変化する。

魔力から、魔法文字へ。

魔法を放つわけではない魔力の変換方式。それは魔法具を使用するときに現れるもの。

白刃がキズナの切っ先と切り結んだ。

キズナの「鵲鴿」が弾かれる。刀を上へはじかれ、キズナの上体が起き上がってしまう。懷をさらけ出すキズナ。

俺は胸ポケットから、その様を目撃する。

「舞い上がれ」

元あった刀身はフェイク。

魔法刀と金属という圧倒的に不利な剣戟戦でも、あえて刃を交えた理由が、今、顕現する。

失われた刀身が、まばゆい光りと共に復元。

「我が魔法刀 【朱雀<sup>すく</sup>】よ！」

素早い動きでヘイデンは刃をキズナの胸に定める。

避ける術はない。

そうさせたのは、キズナの油断に他ならない。戦闘中に勝利を確信するという愚行を犯した。

息の根を止めるまで勝利の美酒に手を出してはいけないのだ。酔

ってしまつたが最後、再び立て直すことは出来ない。

「……馬鹿弟子が」

俺はつぶやいた。

このままではキズナは死ぬだろう。心臓を一突きにされ、人生が終わる。血反吐を吐き、床に崩れ落ちる。確かにそれも人生かも知れない。

ふむ……思えば未熟で短い人生だったな、キズナ。

……だが、キズナよ、俺はそれでは困るのだ。

良い機会だ。

ハムスターの俺がなぜキズナの師匠としていられるのか。なぜキズナを助けるなどと大口を聞くことが出来るのか。その理由を教えるときが来たようだ。

俺は目をつぶる。

集中力を一瞬のうちに高め、複雑な魔法式を頭の中で呼び起こす。おそらく現存する魔法中これほどの複雑な魔法術しきは存在しないのではなからうか。

「【スワップ】」

俺はそれを単詠唱魔法として解放する。幸いキズナとの距離は近

い。

無理矢理で済まないが、許せ、キズナ。

つむっていた目。まぶたの裏の暗闇に、俺の視界がぼうつと映し出される。ヘイデンの魔法刀【朱雀】がキズナの胸元に迫っていた。その視界がぐにやりと間延びする。ズームするように視界が狭まったかと思うと、視界は俺の元を動き出した。まるで魂が飛んでいったかのような身軽な感覚が俺を包み込み始める。

わずかな時の中で、俺の視界はキズナの元へたどり着き、キズナの見ている景色を共有する。

キズナもヘイデンの切っ先を凝視していた。

今、俺が感じているのは、母体からこの世に生まれ出ずる感覚に似ていた。

自分という意識が引き延ばされ、新しいものに浸透していく。頭のとっぺんから、指先まで。全ての電気信号が歓喜した。キズナの五感全てが俺を受け入れ、俺はキズナの心身に介入する。

キズナが感じている全て。

ヘイデンの【朱雀】を必死の形相でにらみ付けるのは視覚。

折れた肋骨と痛めた背骨が触覚に痛みを叫び続ける。

汗と血の匂いを敏感にかぎ分けるのは嗅覚。

【朱雀】の風切り音を聴覚が聞き取る。

口内に広がる味覚は、苦渋。

視覚、触覚、嗅覚。

聴覚、味覚。

五感。

閉じていた目を開ける。

俺はみなぎる魔力を全身に感じながら、言葉も発さずに魔法を詠唱する。

詠唱魔法でもない。

単詠唱魔法でもない。

近代魔法の最先端、無詠唱魔法。

脳内だけで全てを構成、念じるだけで発動という、完全なる思考制御法。

視線の動きで魔法の発動する位置を定めて、俺は寸分の狂いなく魔力を変換した。衝撃波が【朱雀】とキズナの胸の間で炸裂する。ヘイデンは異常を肌で感じ取っていたようだ。刀をはじかれたことにさほどの驚きを見せずに、素早く距離を取ると正眼に構える。

俺はそんなヘイデンを感じたように見つめてやった。

「…………お主、何をした？」

疑惑に満ちた目を向けてくるヘイデン。それはそうだろう。無詠唱魔法など、世界で唱えられる人間はそうはいない。たとえば言葉は知っていようと、実際に目にしたことがある人間などはそうはない。質問したくなるのも分かるというものだ。

「……答えるつもりはないな」

肩をすくめてみせる。

「どうやら……私は藪をつついて蛇を出してしまったようだ」

俺の動向をうかがうヘイデン。それが分かるだけでもヘイデンの実力の程が知れようというもの。

残念ながら、キズナがヘイデンと対するには時期尚早。出直してこいというやつだな。

「どうしたのです？ ヘイデンさん」

突然、膠着状態に入ってしまった俺とヘイデンを見比べ、ペランが首をかしげる。

「ペラン殿、少々事情が変わってしまったようです」

「どういことですか？ はやく勝負をつけて【恩寵者】イリスを手中にしたいのですが」

カウンターには、ティアナをかばうようにしているイリスの姿がある。

「そつも言ってられぬのです」

ヘイデンの頬の強ばりにペランは何も言えなくなってしまったようだ。ため息をついてイリスと俺を交互に見やると、疲れたような声を出した。ペランの眉間には深いしわが寄っている。

「……どうやら、時間切れみたいですね」

遠く店の外から聞こえてきたのは、大勢の足音と、武装した警官達の怒鳴り声だった。

どうやら、周囲の住人が町の保安部隊に連絡したらしい。町を牛耳っていると言っても、あくまで裏からの話だ。表沙汰になることは避けなければならないのだろう。

ペランはヘイデンに軽く声をかけると、ヘイデンは残念そうに脱力し【朱雀】の刀身を霧散させる。

「残念です。……ヘイデンさん、私は先に行きますよ」

ペランは宿屋の惨状に目もくれず、軽い足取りで玄関を出て行った。後を任せられたヘイデンは、柄だけになった【朱雀】を腰に帯刀すると、ほこりの付いたスーツを力任せにばんばんとはたく。

「【恩寵者】……いや、キズナといったな」

野獣のような眼光をぎらつかせる。

「次回こそは、互いに本気で対峙しようぞ。その暁には私の魔法も披露するでしょう。いやはや、久しぶりに心躍るわっ！」

豪快に笑うと、破片を踏みつぶしてのしのと去っていく。鍛え上げられた巨躯が闇に紛れていく。生き残っていた部下の一

人も慌ててそれに従うように消えていった。  
窮屈なスーツ姿が視界から消す。

しばらくして、俺の胸元で何かが暴れているのに気がつく。

「リニオっ！ アンタ何してくれてんのよっ！」

ハムスターが俺の胸でワンツーパーチを繰り返していた。

「助けてやったのに、その言い草はどうかと思っがな」

それ以前に、師匠に向かってその言い草もどうかと思う。

「助けてやったですって！？ 助けてくれなんて言っただ覚えはないわよ！」

「あの世に行ってから助けを乞われても遅いぞ」

「ぐ……ぬぬぬ……」

唇を噛みしめている。キズナも自分が窮地に立たされていたことを自覚しているのだろう。言い返そうにも、それが出来ないでいる。少しは反省するがいい。たまには良い薬だ。

「それにしても、キズナよ」

「何よっ！」

胸ポケットから不機嫌そうな声が飛ぶ。顔ももちろん不機嫌で、憤怒に耳をぴんと立て、髭としっぽを逆立てている。



「相変わらず……悲しいくらいに胸の成長はないのだな」

俺は自分の胸に手を当てると、確かめるように揉みしだく。  
もみもみもみ。

昔と現在の感触を交互に思い出す。それはまさにワインを味わう  
ソムリエのよう。

……もみもみ、むにゅむにゅ……うゝむ……やはり、このポリユ  
ームでは物足りない。俺としては、少なくとも手からこぼれるぐら  
いには欲しいところなのだが。

「わ、わわ……私の体に何してくれてんのよっ！ この馬鹿！ 変  
態っ！」

全身の毛を見事に逆立て、アクロバットにドロップキックをして  
くる。

怒髪天を突くというが、ハムスターの場合はなんと言えばよいの  
だろうな、キズナ。

「早く私の身体を返しなさいよ！ じゃないと、このままこの身体  
を猫に捧げるわよ！」

俺の肩まで上ってきたハムスター姿のキズナが、頬を引っ張って  
くる。

捧げるのはいいが、それだと痛いのはお前だぞ、キズナ。

だが、俺としてもハムスターの身体は気に入っている。ま、俺に  
とって痛手であることには変わりないか。

ふむ……久しぶりの身体をもう少し味わっていたかったのだが……  
…残念だ。

「分かった、身体はすみやかに返却しよう。だが、キズナ、一つだけ約束して欲しい」

俺は神妙な顔でハムスター姿のキズナと鼻をあわせる。

「身体を取り替えた瞬間、ハムスターの俺に危害を加えないと」

「……………。考えておくわ」

「やっぱりやめだ」

「ま、前向きに努力するわよ！」

「政治家的な発言は止めてもらおうか」

「こ、この……リニオのくせにつ…………！」

拳を握りしめるキズナ。

「約束する！ 危害は加えない！ ……これでいい？」

「よし。では…………」

ゆっくりと目をつぶり、もう一度【スワップ】を敢行する。ハムスターの身体から、キズナの身体へ【スワップ】した時とは逆の順路をたどる。

指先から感覚がなくなっていく、やがてそれはキズナの身体を離れて空中を漂うような浮遊感へ。次に目を開けた時には、ハムスターの身体へと戻っていた。

世界が格段に大きくなったように感じる。

人間の目から見た世界と、ハムスターの目から見た世界は、  
も違うものか。

分かってはいても、改めてしみじみと思う。

腕を組んで感慨深く感じ入っていると、乱暴に首根っこを捕まれ  
て、俺は宙ぶらりんの体勢にされる。目の前には身体を取り戻した  
キズナ。

む……これはどういうことだ？

「ふふ……ふふふつ……リニオ師匠？」

ど、どうしたキズナ。

目が据わっているぞ。

それに俺を師匠つて……なんだか気味が悪いな。

「よくも勝手に私の身体を……。……してくれたわね」

「おい、キズナ。約束を忘れたのではあるまいな。不可侵条約だ。  
今の俺に危害を加えることは禁止だぞ。いくら記憶力に乏しいお前  
でも……」

首根っこをつかまれたまま、身振り手振りを交える。

「約束？ なんのことかしらねえ……」

……。

……やばい。この状態は非常にやばいことこの上ないぞ。

「いの」

……この？

「ど変態があああああっ！」

師弟関係もなんのその。

俺はボロ雑巾のように叩き付けられていた。

## 第十五話・「もみしだく！」

とんかん、とんかん、とんかん、とんかん……。

快晴の空の元、俺は屋根の上でひなたぼっこをしていた。

階下からは金槌を振るう音が聞こえてくる。半壊してしまった一階。特にひどい玄関、フロント、食堂。その三カ所から流れてくる打楽器によるアンサンブルは、唐突ながら声によって調和を乱された。

「もう嫌！ 朝からずっとこの調子じゃない！ 朝早くからとんかんとんかん……いい加減に金槌の打ちすぎで私がとんちんかんになるわっ！」

「……とんちんかんは……黙って手を動かして」

「と、とんちんか……！？ 助けてやった恩人に向かってその言い草！？」

「……助けてもらってない。どちらかと言えば……敵に見逃してもらった」

「イリスちゃん、駄目ですよ、本当のこと言ったら」

「……むぐぐ。……あ、手が滑った」

何かが壊れる盛大な音がした。

「あゝ！ キズナさん！ か、壁を壊しちゃ駄目ですよ」

「姉さん……キズナの昼食は抜き。……その分、ムス太が大盛り」

「何でアイツが大盛りなのよっ！ あの馬鹿ネズミこそ、何もしてないじゃない！」

「馬鹿なんて言っちゃ駄目ですよ、ムス太ちゃんは可愛いのですから」

「うん。ムス太……可愛い」

階下から聞こえてくる喧噪も、なぜだか別世界のように感じられる。

キズナと旅を始めてからどれほどの月日が流れたのだろう。

五年……いや、六年か。

俺とキズナが出会ったのは、ちょうど島国である倭国が大陸と戦争を始めた頃。

先進的な技術と魔法論で軍事の先端を走っていた倭国は、大陸の国々から見ても驚異的な存在だった。倭国は魔法使いの育成に長けており、高等な育成学校を卒業した人間は軍事の中枢を担うほどであった。

今では稀少とされる【恩寵者】も多く輩出し、倭国の魔法使いの象徴となっていた。そこにいたのがキズナだった。キズナは当時から色々と問題の多い生徒だったらしく、魔法の授業をさぼっては武術にばかり明け暮れていたらしい。だが、そんな倭国を驚異に感じ大陸の国々は、一時的な協定を作り、大陸同盟と名前を変えて倭国に侵略を開始した。

戦争を仕掛けて一番驚いたのは大陸同盟だろう。

極東の小さな島国相手を制するのに、二年の月日を費やしてしまったのだから。

大陸同盟の圧倒的な物量に対して、小さな島国である倭国がここまで戦えたのは、ひとえに倭国の技術力といっていいだろう。魔法、魔法具、【恩寵者】……そして、圧倒的な力を持つ精霊、それを操る【寵愛者】の存在。

両国共に犠牲は多かった。

互いに甲乙つけられぬまま泥沼化の戦争に発展してしまったことで、互いに国力は疲弊してしまっていた。やがて、互いに痛み分けで終わるこの戦争は、倭国の鎖国という、大陸同盟にとって望まぬ形で幕を閉じる。倭国は技術力を内側に止めたまま、他国との交流を絶ったのだ。

俺は大陸側の人間だったが、当時は倭国の研究室に在籍していた。詠唱魔法、単詠唱魔法、そして無詠唱魔法……と、次世代の魔法の研究に明け暮れていた。その研究のひとつが【スワップ】であった。

しかし、その成果を待たず戦渦に巻き込まれた俺は、命を落とすほどの大けがを負ってしまった。

一か八かで【スワップ】を行使した。死ぬよりは何倍もいい。そんな苦し紛れの思いだった。

だが……まさか、目の前にハムスターがいるとはな。

「アンタ達絶対だまされてるわよ!？」  
アイツの本性は変態なのよ

！？ いい、ティアナ。アンタのその無駄にでっかい胸の脂肪は、アイツにとつては格好の獲物なのっ！ リニオの脳内ではこれでもかっていうぐらいに揉みしだかれているに違いないのよ！？」

「まあ、キズナさんったら、はしたないです」

「キズナは……露出魔だから」

「まあまあ、キズナさんったら、はしたないです」

「もみしだく！」

「きゃっ！ キ、キズナさん……そんなところ……ひゃっ！ 駄目ですよ」

俺の身体は失われた。

正確には、ハムスターの魂と交換になってしまった。だから、本当の俺の身体は、今頃このハムスターの身体に宿っていた魂が占有しているはずだ。もちろん、俺の身体など、すでにこの世から消え去っている可能性もある。

「あんっ！ ……ふあっ……キズナさん、駄目ですよ」

瀕死の間際で完成させた【スワップ】。精神と精神を【スワップ】（交換）する高等な魔法。

ハムスターの姿のままでは【スワップ】以外、何一つ魔法を使うことが出来ないという制限付き。

「……はわっ！ ……だんだん……変な感じに……なっちゃいます」



ならば適当な人間の体を借りてしまえばいい……とは、どうして  
も思えなかった。それは、大陸同盟が倭国に攻め入ったことと同じ  
だ。精神による精神の侵略に他ならない。

「ひゃっ……そこは特に駄目ですう……あう……」

俺がハムスターでいることに悩んでいたところに、偶然、戦争孤  
児になっていたキズナがいた。

土砂降りの廃墟。あちこちからは戦渦の火がくすぶっていた。  
漂ってくる煙が、少女の姿を簡単に隠す。

何を思ったのか、俺は少女に話しかけていた。

生きることに真っ直ぐな瞳と、決して揺るがない意思。小さい身  
体に降りしきる雨を浴びた少女は、まるで雨に宣戦布告するように  
口をへの字に曲げて空を見上げていた。

奇妙な光景だった。

お前は、どうしてそんな目ができるのだ？

足下に寄ってきたハムスターが急にしゃべり出したのだ。驚かな  
いはずはなかった。

少女は雨雲をにらみ付けるのを止めて、俺を見おろす。すすけた  
頬を、高等魔法学校の制服の袖でぐいっと拭くと、右手の魔法刀を  
ぎゅっと握りしめ、まるで挑発するようにこう言った。

私は負けない。何者にも負けないんだもん。

何者にも負けない。

俺はその、何者、という言葉に大いに心を揺り動かされた。

この小さな少女は、自分を取り巻く全ての森羅万象に対して、強くあろうとしている。全てのものを打ち負かし、乗り越えようとしている。

それは侵略してきた大陸同盟かも知れない。あるいは自分の置かれた環境かも知れない。

雨にも、風にも、あるいはもっと大きな世界でさえも。

だから、俺は半ば無意識のうちに口を開いていた。思えば、それが今日まで続く不幸の始まりといっても良い。

俺らしくないのだが、言葉の端々は俺らしい言葉。

俺に、お前の手助けをさせてはくれないか。俺はお前を何者にも負けない女にしてやれる。

こくり。

少女は無言で小さくうなずいた。そして、不敵に微笑んだ。

雨が上がった雲間から降り注ぐ光は、二人の出会いを歓迎するかの如く、神々しく大地を切り裂いていた。

ならば今より、俺はお前の師匠だ。従って、お前は俺の弟子だ。俺の名前はリニオ・カーティス。リニオ師匠と呼べ。

ヤダ。

……。……お前の名前は？

私……私の名前は……。

手に持っていた魔法刀が青白く輝く。

絆。

綺麗な瞳の色をしていた。ブラウンの瞳に俺が映り込んでいた。

キズナ？ 人と人の心のつながりを表すキズナか？

そう、その絆……私は……小鳥遊、絆。

二つに結った栗色の髪。付着した水滴。のぞいた晴れ間が、少女の髪をきらきらと照らす。

綺麗な名前だと思った。

今まで聞いたことがないくらい美しい名前だと思った。

タカナシ・キズナか……よし、キズナ、今日からお前は俺の弟子だ。いいな？

うん。

嬉しそうにうなずいたキズナは、このときが初めてだったかも知れない。

それでこれからどうするの？ リニオ？

リニオ師匠だ。……そうだな、まずはこの国を出よう。そして色々な国を旅するんだ。世界は広い。お前はこの国のように自分に錠をかけて閉じこもるのではなく、世界の広さを見て、触れて、感じて、知るべきだ。俺はそこでお前に色々教えていくつもりだ。……これはついでなのだが、俺の身体の代わりとなるものを探してくれると嬉しい。

……ヤダ。

ふむ……まずはお前のその口答えを何とかしなくてはならな  
いらしいな。

濡れた廃墟を一人の少女とハムスターが歩いていく。それは誰が見てもおかしいな取り合わせだったろう。

だが、なんの不安もなかった。目の前にある景色がどれほど不安や絶望にさえぎられていても、この少女と一緒にならば何とかなるような気がしたのだ。

まあ……色々と後に後悔するわけだが。

俺は蒼穹から目を離して、階下の騒ぎにため息をつく。女三人寄ればかましいとは言いが、まさにその通りのようだな。

「この脂肪が！ この脂肪が！ この脂肪があつ！ こんなものがあるから世の男どもはっ！ 出てきなさいリニオ！ アンタの変態ぶりを見せてみなさいっ！」

「……嫉妬、責任転嫁……格好悪い」

「何がよっ！……って、イリスだって貧乳でしょうが！」

「私は……発展途上。伸びしろ、たくさん……。キズナは……」

チラ……とんかん、とんかん。

「あえて何も言わないっ！？　そうやっていつそう感傷を盛り上げるわけっ！？」

「大丈夫ですよ、キズナさん。胸が大きくても小さくても、実際に使う機会に恵まれなければ意味なんてないんですから」

「ッ……！　もみしだく！　徹底的に！」

「ひゃんっ！　キ、キズナさん……や、やめてください……これ以上は……駄目ですよ」

「……やっぱり、キズナ……変態」

「このこのこのおっ！」

本当に……馬鹿な弟子と出会ったものだ。

俺は蒼穹に別れを告げて、作業現場に降りていくのだった。

第十六話・「おいで……可愛がつてあげるから」

……。

……いきなりではあるが、怒鳴ってもいいだろうか。

ひい、ふう、みい……多大なるご賛同ありがとうございます。

……と、どれだけ賛同をいただいたかは、俺の心の中にしまっておくとして、俺は満を持して怒鳴ろうと思う。

机の上で両腕を枕にしてよだれを垂らしながら大いびきをかいてもう食べられないわなどと前時代的な寝言ランキングにトップテンにランクインしているようなことを繰り返しながらもぐもぐと口を動かして熟睡している馬鹿弟子に対してすべからく怒鳴ろうと思う……ハア……ハア……と、思わず一息で言い切ってしまうこの俺の怒りのボルテージ、お分かりいただいたであろうか。

分からない奴は、水の入ったバケツを持って廊下に出ている。おっと、俺としたことがこれも前時代的だったか。

というわけで。

「起きろっ！ 馬鹿者がっ！」

俺の背後には黒板。

重いのを我慢して持っていた指示棒をキズナの脳天に振り下ろす。

「……むにゃむにゃ……ティアナ、特急よ、特急……超特急で料理しちゃんないなさいよ……むにゃ」

俺の脳天唐竹割りではキズナをたぶらかす睡魔すら退治できないらしく、キズナはぐうぐうと寝たままだ。

身じろぎ一つしないどころか、悪びれもない。

起きたところで馬鹿弟子が悪びれるとは思えないが。

時刻は午後、俺とキズナは師弟関係らしく魔法の勉強をしている。毎日二時間の魔法講義がこの師弟間での約束でもある。これといった事件や急務、あるいはやむを得ない事情がない限り確実に開催されている、いわば日課のようなものだ。

偉大なる俺のそれはありがたい講義……言い換えるならば無償の愛と言ってもいい。

しかし、ボロい宿屋の割りに、こうも色々と便利な道具が揃っているのは不思議で仕方がない。

黒板に、チョーク、勉強机にイス、講師用の指示棒……と、見た目はボロだが至れり尽くせりの品揃えだった。

「ええい、起きんか！ キズナ！」

「……ハムスターのくせに生意気なのよ……むにゃふにゃ……」

よだれが机の上で水たまりになっている。

「むむう……コイツ……俺の授業が聞けないのかっ！ 馬鹿弟子め！」

「……すぴー……むにゃ」

いいだろう、挑戦と受け取ったぞ、俺は。  
黒板消しとチョークの置いてある黒板消しの縁からジャンプして、  
キズナの耳元へやってくる。

うぬ……よだれが足に付いたではないか。

おまけにべたべたしている。

非常に汚い気がするが、この際我慢だ。

俺は我慢のできるハムスターなのだ。

「むにゃ……………何で干支の最初がネズミなのよ……………一番目が牛つて笑えるわ……………むにゃ」

俺が知るか。一体どういう寝言なのだ。牛に謝れ。

キズナの耳に被さっていたツインテール（髪）の片方を背中の方に投げ上げる。

耳たぶを引っ張って耳孔を露わにして、声を通りやすいようにしてやる。

ふむ……………どうやら耳の穴をかつぽじって……………という皮肉が必要がないくらいには綺麗な耳をしているようだ。

それにこの耳たぶは……………柔らかくて、滑らかで、ふわふわして……………と、いかんいかん。なぜ俺がキズナの耳たぶに胸を熱くしなければならぬのだ。

「さて、覚悟するがいい、キズナ」

俺は傷案の耳元で優しくささやいてやる。

「キズナは巨乳」



無反応。

「最高の弟子だ、抱きしめてやる」

反応なし。

「胸が大きいお前を愛している」

なおも流れるよだれ。

「良い子だ、おいで……可愛がつてあげるから」

変わらずのいびき。

「……」

俺はため息をついた。

「………貧にゆ」

「ぶち殺してやるっ!？ ……はう？ 私、寝て……た？」

コンプレックスもここまでくれば立派というものだ。涙が出てくる。

「何泣いてるのよ、気色悪いわね」

「いいのだ、キズナ。お前のつらさを俺は分かっている。もう何も言っまい」

目尻に浮かんでしまった涙を拭いながら、俺は黒板の縁に戻ると指示棒を手にする。

髭をきらりとなびかせると、しっぽをぶんと振って、颯爽と振り返った。

「講義を再開するぞ、今度は寝るなよ？」

「すぴー……」

「言ってる側からなのか!？」

足下に落ちていたチョークは、思いの外軽かった。

## 第十七話・「夢は寝てみるのだな！」

放り投げたチヨークがキズナの頭に命中して跳ねると、キズナはようやく睡魔と決別してくれたようで、寝ぼけ眼をこすって頭をぽりぽりとかく。

「寝るな、この俺のありがたい講義の最中だぞ」

「仕方がないわね……」

机の上で頬杖をついて唇を尖らせる。

この馬鹿弟子には少し分からせる必要があるな。この講義における俺とキズナの関係を。

教えられているのではなく、教えてくれているということ。

本来ならば、多大なる感謝をしてもらわなければ割に合わないところなのだぞ。分かっているのか、おい。

「いくら馬鹿といっても、お前もいくつかの修羅場をくぐってきた女だ。決して分からないわけではあるまい。先日のヘイデンという男とお前の実力の差をな」

「む……分かって……るわよ」

そっぽを向いて歯がみする。

「ヘイデンは単詠唱魔法をあえて使っていないかった。あそこまでの男だ、よもやどこかの馬鹿弟子と違い、単詠唱魔法を使えないなど

万に一つもあるまい」

「悪かったわね」

「ふん……馬鹿弟子とはいったが、誰もお前のこと言っただけではないのだから。……だが、自覚があるのならば、反省しろ。ああ、大いに反省するがいい」

キズナが指先で机をとんと叩いている。いらついている証拠だ。

「断言しよう。このままではお前はヘイデンには勝てない。返り討ちに遭うのが関の山だ」

「やってみなければ分からないわよ！」

「分かる。事実、お前はすでに先日 of 戦いの中で一度死んでいるのだから」

キズナにヘイデンの【朱雀】が起動したときのことを思い出させる。

「あれはリニオが勝手に介入してきたんじゃない！」

イスを倒さんばかりに腰を浮かす。興奮したキズナに呼応するようにツインテールが逆立った。

「そうか？ ヘイデンの【朱雀】をお前は予期していたというのか？ それにしては隙だらけだったな。……私は見ていたぞ。お前の【鵲鳩】がヘイデンの身体を貫いていないというのに、勝利を確信

したかのようなお前の笑みをな。相手の意図にも気がつかず、手加減されているのにもかかわらず、お前は勝利の美酒に酔おうとしたのだ」

閉口したまま、キズナは浮かした腰をイスにすんと落ち着ける。

「愚か者め。いつも言っているだろう。勝利とは誰が決めるものではないのだ。これは試合ではない。相手の首筋に刃を突きつけたところで、勝敗が決することなどない。誰かがお前の勝利を宣言してくれるわけでもない。勝利にこだわるならば、相手の息の根を止めてこそ、初めて勝利といえるだろう」

指示棒をキズナに向かって突きつける。

「いいかキズナ、お前がヘイデンに勝っているのものが一つだけある。それがなんだか分かるか？」

「美貌」

「鏡を見て出直してこい」

咳払いをして再び問う。二度目。

「いいかキズナ、お前がヘイデンに勝っているのものが一つだけある。それがなんだか分かるか？」

「知性」

「死ぬがいい」

咳払いをして再び問う。三度目の正直。

「いいかキズナ、お前がヘイデンに勝っているのものが一つだけある。それがなんだか……分かるか？」

「才能」

「お前にはがっかりだっ！」

「さつきから人がきちんと答えてあげてるのに何よ！」

「寝ぼけるのも大概にしろ！」

「起きてるわよ！」

「夢は寝てみるのだな！」

「くっ……このクソネズミっ……！」

顔をつきあわせて視線をぶつけ合う俺とキズナ。互いに譲らずの状況だったが、俺が先に折れてやる。

いつまでもキズナのレベルで争っているわけにもいかないからな。そこは俺の寛大さがなせる技だ。

「魔力量だ」

「なによ、そんなことなら最初から知ってるわ」

嘘をつけ。

「アイツの【朱雀】は白い刀身をしてた。私の【鵲鴿】は青。そういうことでしょ？」

「ふむ……確かにその通りだ。一般人の魔力は魔法具を通すと白く発光するが、【恩寵者】は青白く発光する……見ていないように、見ているようだ。褒めてやろう」

「アリガト」

返事に心がこもっていないぞ。

「お前は曲がりなりにも【恩寵者】だ。そんじょそこらの魔法使いなど束になっても敵わない量の魔力を、その内に秘めている。ヘイデンとて例外ではない。そのためにも、お前は早急に単詠唱魔法を習得する必要がある。詠唱魔法などさっさと卒業することだ」

苦虫を噛み潰したような顔をするキズナ。

「それに加えて、魔法具、特に魔法刀についての理解度も上げておくことだな。お前は魔力量ゆえに魔力の消費に頓着がない。逆に言うならば」

「私の破格の魔力量で相手を圧倒しろってワケね？」

腕を組んでふんぞり返る。

「逆に言うのなら、魔法具による魔力の消費力を知れば、起動時間、威力など様々な観点から、対ヘイデン戦の対策も立てられるというものだ。故人曰く、敵を知り己を知れば百戦危うからず、お前にとっては最も骨身に染みる言葉だな」

「.....なによ.....無視しなくなっ  
ていいじゃない.....」

小声でなにやらつぶやくキズナ。

「.....ん？ どうしたキズナ？ 疑問でもあつたか？」

「べ、別になんでもないわよ！」

俺はあえて知らない振りを決め込む。

お前のボケにいちいち突っ込んでなどいられないのだ。



第十八話・「……萌えるの……」

「というわけで、お前がヘイデンと対するのに確実に学び、実践していかなければいけないことは二点だ。単詠唱魔法の習得、魔法具の理解。はつきり言っただけ魔法使いには最低限なのだが。今のお前にはこれで精一杯だろう。まずは魔法具について話そう。……ふん、不満があるようだな」

「……ないわ。いいから、さっさと話さないよ、聞いてあげるから」

ときどき、俺はお前を本気で殴りたくなるぞ。

「キズナ、【鵲鴿】を出せ」

俺が指示棒でキズナのヒップバックを指し示すと、キズナは言われたとおり、机上に【鵲鴿】を出す。刀身のない倭国刀は、窓から入り込んでくる日差しを反射して、その柄と鰐を強調していた。

俺は黒板からその鰐元を叩いて説明する。

「復習の意味も込めて丁寧に話すから、しっかり付いてくるのだぞ、キズナ」

「……分かったわよ」

イスに座り直して、わずかだが背筋を伸ばすキズナ。むすっとしながらも俺の指し示す先に目を落とす。

素直ではない表情の奥では、少なからずヘイデン戦での自責の念と、悔しさがくすぶっているのだろう。

先程の厳しい叱責もあながち無駄ではないようだった。

強情で馬鹿なキズナではあるけれども、勝負事に対する執念深さは人一倍だ。それは師匠である俺が一番よく知っている。俺に凶星を突かれて素直に負けを認めたりはしないのは感心しないが、キズナ自身、心の中で分かっているから、こうして負けず嫌いを表情に出しながらも俺の話を聞こうとする。

そういう素直じゃないところは嫌いではないが、いつもそういう態度ならば俺の手間が大分省けるのだが。

「世の全ての人にとって、魔力というものは身体に流れる血液のようによ重要かつ、あること自体当たり前のことだ。しかし、その量には個人差が存在し」

「ちょ、ちよつと！ 復習だからって、そこから話すわけ！？」

俺の講義に愕然とした様子で割って入るキズナ。

もちろん魔法の起こりから現在までの流れを切々と語るつもりはない。俺の本懐はそれとは別のところにある……が、少しは話させる。それぐらいいいだろう。

「……リニオの話は長くて理屈っぽいから大嫌い」

「まあ、我慢して聞け、キズナよ。……前提として、魔力は生まれつき誰も持っている。そして、魔力量は成長期と共に発達し、成長期が終わる頃には限界量が定まってしまう。魔力が生活の根幹をなすこの世界において、魔力が多い者は、少ない者に比べて格段に将来性が豊かになっているのだ」

魔力を持つ者だからこそ就職できる職業というものもある。ないよりはあった方が断然良い。世の中にはそういった職業がごまんとあ

る。

ヘイデンや、その部下もその職業の一つに属しているはずだ。第一、傭兵のほとんどは魔法使いによって編成されているからな。キズナのようなフリーランスもいるにはいるが、それは極々稀だ。

「しかし、知能的なことになれば魔力は関係ないから、そこまでの差別にはなっていない。魔力を使用する魔法が一般社会の中に浸透してから幾星霜……現在では全ての人間が魔法を使用できる」

キズナが頬杖をつき始めた。

早くも集中力の欠落か？　しっかりしろ。

「全ての人間が魔法を使えると言っても、ある程度強力な魔力を秘めているのはその中のほんの一握りにしか過ぎない。ほとんどの人間は攻撃魔法などというものすら使うことが出来ず、火を灯したり、そよ風を吹かせたりとの程度に止まる」

やはり俺は、戦うよりも、こういった人に教える方が性に合っているとしみじみ思う。

今でこそキズナの師匠などというアルバイト（いや、報酬などないのだからボランティアか）に落ち着いてはいるが、元は立派な学位を持った研究者。

人に説いたり教えることは大好きなのだ。

「その中でごくまれに強大で膨大な魔力量を体内に秘めたままで生まれ落ちる者がいる。キズナ、分かるな？」

このまま話して聞かせるだけの講義ではキズナが寝てしまいそうなので、質問して眠気を追い払ってやる。

教育者として当然の配慮だ。

「【恩寵者】……つまり、私、でしょ」

「そうだ。類い希なる魔力量を秘めた者を【恩寵者】と呼び、各国はその人材を確保することに躍起になっている。【恩寵者】の数でその国の国力がはかれると言っても過言ではない。そのために、その可能性のある人間に対して強引な手段を用いられることも多い……【恩寵者】の確保を徴兵令などとして合法化している国がほとんどだ。それとは別に国よりも金のいい裏組織に身をやつす者もいる。【恩寵者】に生まれると言うことは、様々な軋轢や、確執から逃れられない運命なのだ」

「……そうね、私の故郷もそうだったもの」

現在のキズナ・タカナシが、まだ小鳥遊絆だったころ。

倭国は【恩寵者】を数多く擁し、世界の先端を行く島国だった。それが大陸同盟の危機感をあおり、理不尽な開戦を余儀なくされる。戦争で疲弊した倭国は現在も鎖国中……渡航も一筋縄ではない。倭国人であるキズナにすれば帰郷など夢のまた夢で、郷愁にむせぶことしかできないのだ。

「ああ、【恩寵者】には権力の象徴的な側面もあるからな。実際に、世の権力者は【恩寵者】を囲っているのが常だ。推測するにペランがイリスを狙う理由もそれだろう」

「本当……【恩寵者】なんてやつかいな星の下もあったものよね」

背中をそると肺に溜めた空気を天井に吐き出す。

髪を左右二つに結った栗色のツインテールがイスの後ろへさらりと落ちていった。

「今更、悔やんでいるのか？」

「まさか」

キズナが挑戦的に笑う。獲物を狙う荒々しい目だ。

「こんな楽しい人生なんて、そうそうないわ」

「だろうな」

……私は負けない。何者にも負けないんだもん……そんなことを言った幼いキズナが脳裏をよぎる。

俺はそれを口頭には上さず講義を続ける。

「人々は魔力を持ち、魔力を消費することによって、暮らしを成り立たせている。魔法具に魔力を送り込むことによって、様々な現象を起こすことが出来る。たとえば、そこにあるランプの魔法具であるならば、魔力をランプの中に送り込めば火がとる」

イリスが持つてきたランプを指示棒で指す。この宿にある照明設備は全て魔力を消費することで機能し、夜の闇を照らしている。

「人々は多かれ少なかれ、みんな魔力を消費して生きている。……しかし、近年になって、電気なるものが発明された。魔法に取って変わられる技術として注目されていたのは、もう過去のこと。現在ではかような田舎町でさえ電気がかよっている。使用者の魔力量、

使用量にムラのある魔法よりも安定的で効率的だ」

「リニオ、電気の話は関係ないんじゃないの？　今は魔法具の話でしょ？　電気なんてどうでも良いわよ」

……むう……　キズナにしては正しいことを言う。

確かに、話が脱線してしまったようだ。電気の話もしたかったのだが……　記憶の引き出しにしようとしてしよう。

「ふむ……話を戻そう」

俺は今度こそ、机上に置かれた魔法刀【鵲鴿】へと話題を向ける。  
ここからが俺の本懐だ。

「魔法刀が魔法具の一部であることはお前も知っての通りだ。キズナ、説明できるか？」

キズナが指先で【鵲鴿】を転がす。キズナが俺の方に転がすようにつついてくる。俺はそれを押し返すように指示棒で押し返した。

コイツ、質問を拒否するつもりだな。

「あー……んー……　なんとなくは。魔力の……　伝導率？　……　を極限にまで高められた倭国独特の刀の形をした魔法武器で……　それを作るには相当の技術力？　……　と職人技？　が求められる……　ってことぐらいね」

おそらく丸暗記に近いのだろう。その説明は棒読み、かつ疑問符満載だった。

「キズナにしてはめずらしく正解だ。リニオ的及第点としておこつ」

「嬉しくも……ふあゝっ、何ともないわ」

頭をぽりぽりとかいてあくびする。

そろそろ限界か？ あともう少し頑張るのだ。

「ごほんっ！ ……倭国が編み出した類い希なる切れ味を持つ武器

倭国刀と、魔法との極限の調和と称される倭国刀は、その数はきわめて少なく、模造品も多いことで有名だ。また、他の魔法具に比べて段違いに魔力の伝導率が良く、切れ味の鋭い刃を編み上げることが出来る。現在倭国は鎖国中だからな、お前のような倭国人も珍しい。自ずと魔法刀も輸入されることはなくなり、ただでさえ貴重なものがさらに貴重品と化している現状だ」

「アイツの持ってた【朱雀】……あれ、魔法刀よね」

キズナは自分の命を奪われそうになった光景を思い出しているのだろう。

頬を強ばらせて【鵲鴿】を机上で握りしめている。

「発動した魔法は一所に溜めておいたり、一定時間固化しておくことが困難なものだ。魔法刀匠は、流動物である魔力をいかに固化するかという一点にのみ力を注いだ。使用者を選ばず、より鋭利で切れ味の良い魔法刀を作るためにはそこが重要だったのだ。刀身を発生させても、刀身が不安定に変化してしまったり、点いたり消えたりでは武器として意味がないからな。……つまりだ。それを可能にしたのが、魔力を一定量に止め、なおかつ一定の形状に止めておく維持装置、魔法刀の核であるAMRなのだ」

オートマチック・マジック・レギュレーター

「ふ〜ん、これにもそんなものが付いてるの？」

「もちろんだ。でなければお前は魔法刀を操ることさえ出来ないはずだ。まあ、俺のような天才的な人間ならば、自分の力で刀身を安定させることも可能だがな。A M Rをあえて解除することで、リミッターを解除するなんて荒技もできるぞ」

「ふ〜ん……っと」

キズナが指先に【鵲鴒】の柄の先を乗せ、バランスを取って遊び始める。

俺の講義を拝聴しろ。

全く……器用な奴だな、いつそ大道芸人にでも鞍替えするか？

……ここで、サーカスと言わなかったのは、俺がハムスターだからだ。いくら可愛いからと言っても、見せ物になるのは遠慮したいのだ。

「改めて言うのもなんだが、魔法刀の起動はとても簡単だ。魔力を込めればいいだけだ。詠唱の必要がない。詠唱は武器の方でやってくれるからな。それは、他の魔法具も同様だ」

以上より、その起動と行使の簡単さから、単詠唱魔法を使用することが出来ないキズナにすれば、魔法よりも重宝する武器となっているわけだ。

不出来な弟子に救済手段があつて良かったと切に思う。

でなければ、魔法も使えない上に空気の読めない女でしかないかな、お前は。



……注意しておくが、俺の中で詠唱魔法は魔法を使えると定義の中に含めていないのであしからず。それぐらい詠唱魔法は基礎中の基礎なのだ。

「お前の【鵲鴿】は、十秒間刀身を維持させるだけでもスーツ男の魔法一発分はある。これは相当な魔力量だ。ヘイデンが最後まで【朱雀】を使用しなかったのは、切り札という側面もあるだろうが、一番は魔力消費量がネックになっているからだろうな。言い換えれば、使いどころを心得ていると言うことだ。ヘイデンは強いぞ。お前よりもずつとな。だからこそ、そこを」

「でも、次は私が勝つ」

「……その自信がどこから来るのか分からんぞ」

「底力の違いを見せてやるわ。三流魔法使いが【恩寵者】に及ばないってことを見せつける。敵の魔力を空にしてから、身体に脳に、徹底的に刻むの……ふふふっ」

ぞくりとするほどの笑みをたたえて、唇をなめる。

「……傲慢不遜な奴め」

だが、言いたいことが伝わっていたようで、少し嬉しく思う。そうだ、キズナ。お前はヘイデンに【朱雀】を使わせるのだ。

持久戦になるだろうが、お前の体力とスピードならばそれも可能だろう。

そこに一筋でもいい、光明を見出すのだ。

「弱きをくじき強きもくじく、それが圧倒的強者の構図よ」

「ヒエラルキーの頂点に自分を置くとは、まさにお前らしい考えた」  
恐ろしく低い笑い声を響かせるキズナをよそに、俺は耳をそばだてる。

密やかな足音の後に響くノック。

「……私……イリス」

「イリス？ 何の用？」

「……ムス太は……恋人なの。……逢いに来るのは、当然……」

「へ、へえ……いつの間に恋人になったのかしらね……詳しく聞きたいところだわ……！」

キズナが苦々しい表情をして、机上にいる俺をギロリと睨めつけてくる。

ふ……色男という存在は、自然に好かれてしまうのが世の常だ、あきらめる。

（入れてやれ、キズナ。イリスに罪はないだろう。罪があるのなら俺の方だ。色男というのはそれだけで犯罪だからな。まさに、罪な男リニオ）

ささやく俺に、キズナは吐き気を催す振りをする。

……キズナよ、それはどういふつもりだ。

「分かったわよ、入れば？」

「ん……入る」

イリスが静かに入室する。

小柄な身体に似合わぬに大きなトレイを持っている。どうやら、差し入れを持ってきたらしい。俺は指示棒を黒板の縁に置いて、机の上に飛び乗る。

「スナック菓子……ムス太に……差し入れ」

キズナの【鵺鴿】をどかして、机の上にスナック菓子を置く。市販されているもののようで、パッケージの袋には商品名がプリントされている。

その脇にはおしぼりが二つ。

「ムス太……食べて。これ……美味しいの。……私も好き」

俺の方に向けてから、袋の口を切る。俺は冷たく冷やされたおしぼりでごしごしと手を拭く。ついでにキズナの講義で疲れた顔をおしぼりにつける。

ほうつ……冷たいのが、ものすごく気持ちいいぞ……。気分爽快だ。

「親父ね」

何か言ったか、キズナ。

「ふーん、美味しそうじゃない。いただくわ」

おしぼりを使わずに手をつ込む。

……行儀がなっていない。汚い。師匠、俺、悲しい。  
なぜか片言の感想が出た。

「ひへるひゃはい（いけるじゃない）……ぼりぼりぼり……」ぐくん

ぼりぼりと口を動かすキズナに負けじと、俺も袋の中からスナック菓子を取りだして口の中へ。次々に頬袋に詰め込んでいく。

「……ムス太は……美味しい？」

ふむ……イリスのオススメとあって、このスナック菓子は美味しいな。

褒めてつかわずぞ。

イリスの微笑に手を振ってやる優しい俺。

「よかった……恋人に尽くす……幸せなの」

俺は袋の中に潜って、手当たり次第に口に運んでいく。

キズナに独占されてなるものか。

「これは……！ ……ふふ……」

キズナの不穏な笑い声が袋の中にしのできたと思えば、キズナは乱暴に袋の口を閉め、俺を中に閉じこめる。

な、な、何をする無礼者！

袋の中の俺は、スナックまみれの油まみれ。体中べたべた。

「イリス、見なさいっ！」

「……？」

誇らしげに俺の入った袋を掲げるキズナと、純真な瞳で見つめるイリス。

「これがホントの袋の鼠よっ！」

「……っ！……萌えるの……」

萌えるわけがないだろう！？

……そんな、午後の一時だった。

## 第十九話・「猫に襲われても知らないわよ」

ティアナが経営する「旅人の止まり木」の裏口から出ると、そこには広い空き地が広がっていて、物干し竿が二列にわたって並べられていた。

天気は快晴。連日の雲一つない青空が、俺を出迎えていた。

「自主トレか？」

俺の声に顔を振り向かせたのはキズナだった。

「そ、イメージを確認していたの、この前の戦いを」

身に纏うのはいつもの対魔法用の制服ではなく、ショートパンツに半袖シャツ一枚という何ともラフな格好。変わらないのは髪型と右手に握りしめられた「鵲鴿」だけ。近くにはヒップバックが転がっていた。

キズナはヒップバックからハンドタオルを取り出すと、身体の汗を拭っていく。顔の汗を拭い、首もと、脇の下、と移動し、最後は恥ずかしげもなくシャツの中の汗を拭う。ちらちらと見える下着の色は予想に反し水色だった。

ほう……今日は珍しく黒ではないのだな。

「それより何？ まだ講義の時間には早いはずでしょ？」

ヒップバックに「鵲鴿」をしまうキズナ。トレーニングは終わりのようだ。

「講義ではなければ、来てはいけないのか？」

「猫に襲われても知らないわよ」

「ふん、猫ごとき……俺が返り討ちにしてやるはずだ」

「リニオ、文法がおかしいわよ」

な、何だ、考えただけで身体の震えが止まらないぞ。これが生き物の持つ第六感……危険予知という奴なのか。

聞いたことがあるぞ。

ネズミが家から一斉に出ていけば、その家に火事が起こるとか、地震で家が壊れてしまうことを予測しているとか。

うゝむ……動物とは不思議なものだな。ぶるぶるぶる。

「怖いなら怖いって言えばいいのに。助けてあげないこともないわよ？」

「結構だ」

「ふゝん……」

「ふん！ 馬鹿め、俺を誰だと思っているのだ？ 遠からん者は音にも聞けっ！ 近くは寄って目にも見よっ！ 我こそは偉大なるリニ

「あ、猫」

「助けてくれっ！」

ジャンプ一番、キズナの足下にすがりつく。  
そんな俺を胡散臭そうに見下すキズナの目があった。

「そ、その目は何だ！」

「嘘よ、いないわよ、猫」

「……し、知っていたさ。なんだ？ 疑っているのか？ いいか、勘違いをして欲しくないのだがな。今は俺が緊迫の演技を見せてやっただけなのだぞ。お前がどんなリアクションを返すかと思っただけ。ちよつとからかってやっただけだ。決しておれが猫に対して恐れを抱いているわけではないぞ、本当だぞ」

「ここに始めて来たとき、猫の特長とか、生息状況とかをティアナに聞くように言われたのは、全部、私の夢だったのかしら」

「あ、アレはだな…… 備えあれば憂いなしと言ってだな…… ま、言ってしまう俺程の猛者ならば、聞かなくとも撃退可能なのだ。それでも、まあ、情報が多いにこしたことはなかるう？ たとえ数匹で襲ってこようと、猫など俺が数秒でギッタギタのケチヨンケチヨンに」

「あ、猫」

「助けてっ！」

キズナのふくらはぎに飛びついてた。

しつぽを縮めて恐る恐る周囲を見回しているが、猫の姿はどこにもない。血に濡れた鋭い爪も、狂気に揺らめく炯眼も、狩りに適した柔軟な身体も、どこにも見あたらなかった。あるのは、空き地を



薙いでいくそよ風と、満面の笑顔で燃え上がる太陽ぐらい。

ああ、今日もいい一日になりそうだ。

「……リニオ」

「……はい」

「怖いんでしょう？」

「怖いんです」

何か今、俺の中で大事なものを奪われた気がした。  
威厳か、主導権か。

……いや、両方が。

キズナのふくらはぎをずるずると滑り落ちながら、俺はそんなことを考えていた。

「あ、キズナさん、お肌焼けちゃいますよ〜？」

つぎはぎだらけのメイド服を着たティアナが裏口から現れた。

相変わらず……良いものを持っている。

胸元を押し上げる二つの巨大な活火山は、今にも大噴火を起こしてしまいそうだ（俺も噴火しそうだ）。

俺は目を細めて空を見上げる。本日は晴天なり、本日は晴天なり。  
絶好の登山日和である。

今日この日、インタビュアーに、あなたはなぜ山に登るのですかと聞かれたら、俺は間違いなくこう答えるだろう。

そこに山があるからだ、と。

「リニオ、待ちなさい」

キズナがふくらはぎからジャンプした俺を驚づかみにする。ぐわし、という擬音語がうってつけの乱暴な行為。

（何をする！ そこに山があるのだ！ 登らないわけにはいくまい！）

俺はキズナの握力から逃れようとじたばたともがく。

（ひまわりの種、処分するわよ）

（冷静になろう、お互いに）

キズナがヒップバックに目配せする。  
人質を取るとは、卑怯だぞ。

（分かったら、アンタはおとなしくしてなさい）

（……分かった。あきらめよう）

ティアナに聞こえないようにつぶやくと、キズナはヒップバックの脇に俺を下ろした。どうやら、ひまわりの種を食べていいということらしい。仕方がないな。

（ふん……大きいものどがいのよ）

キズナが何かをつぶやいていたが、取り出したひまわりの種の数々さから比べれば微々たるものだった。

俺は頬ずりしながらその妖艶なラインに酔いしれる。

「ティアナ、お店はいいの？」

「はい、イリスちゃんに任せてありますから」

洗濯かごを抱えながらにつこりと笑う。

「イリス……ね」

キズナは近くにあったベンチに腰掛ける。

「イリスって義理の妹なのよね？」

「はい」

ティアナは答えながら洗濯かごを置くと、濡れた洗濯物を取り出す。

「孤児だっって言ってたけど」

「はい」

ティアナは感慨にふけるように眉を下げた。  
濡れたシーツを伸ばすと、物干し竿にはらりとかけた。

「イリスちゃんの場合は、私もよく分らないんです。私が【旅人の止まり木】働き始めて五年目にイリスちゃんがやってきた……ただそれだけなんです」

語尾を伸ばすことがなくなり、愁いを帯びた口調になる。

「イリスちゃんがここに来たときに持っていたのは、ぬいぐるみただ一つでした。他には何もありませんでした。ただ無表情に、私を見上げるだけで……」

「確かに、愛想ないわよね……アイツ以外には」

キズナが俺を見る。

何だ？ これ以上、まだ俺に何かする気か？

「はい。でも不思議です、ムス太ちゃんにはあんな表情を見せるのですから」

「ホント……困るわよ」

唇を尖らせて俺にタオルを放ってくる。ひまわりの種に気を取られていた俺は、そのタオルに投網漁が如く捕獲されてしまい、身動きが取れなくなる。

むせかえるようなキズナの汗の香りに頭が侵食されていく。胸の奥を刺激する甘酸っぱい香りだった。

もがもがもが……ぷはっ！ いきなり何をするのだ、キズナ！

「イリスちゃんは……ムス太ちゃんに会えて良かったのかも知れませんがね」

真っ白なシーツがそよ風にはためく。

宿泊客がいらないとはいえ定期的にシーツを取り替えているのだから、洗濯の量は少ない。

前後に並んだ物干し竿に、ティアナが干した大量の純白がはためいている。見ていて清涼な気分になる光景だった。

「イリスちゃんは……きっと寂しかったんだと思います」

「ティアナ？」

「私は五年間イリスちゃんと暮らしてきました。でも……あんな風に笑うイリスちゃんを見たことはありませんでした。見るのはキズナさん達が来てからです。ムス太ちゃんと遊んでいるときのイリスちゃんは、まるで生まれ変わったかのように……」

キズナは物言わず、また俺の方を見た。

俺はまたキズナが何かしてくるのではないかと身構える。だが、キズナは俺を視界の隅に留めただけで、すぐにティアナに向き直る。聞こえてきたのは、ティアナの寂寞とも言える声音だった。

「だからきつと……イリスちゃんは寂しかったと思うんです。私と居た五年間もずっと……。ふふふ、たまには襲われてみるものですね。おかげでキズナさんと、ムス太ちゃんに出会うことが出来ました」

「なによそれ」

キズナが少し不機嫌そうに立ち上がった。

「私に何かあったら、その時はイリスちゃんをよろしくお願いします」

そんなキズナにティアナは深々と頭を下げる。はためくシャツがティアナとキズナの姿を隠そうとする。

「馬鹿じゃないの？」

「馬鹿かもしれませんが、私には最後までイリスちゃんを笑わせてあげることが出来ませんでしたから……きっとそれぐらいの存在なんです。だから、イリスちゃんをよろしくお願いします」

小首をかしげて、夢げに笑うティアナ。

空き地を吹くそよ風が、ティアナのポニーテールを揺らし、メイド服のスカートを撫でていく。

風が一通り去ったところで、キズナがティアナの微笑みから顔をそらした。

「それぐらいの存在って……そんなの……なんか違う気がするわ」

キズナは自分が感じている違和感を言葉に出来ないのだろう。駄々をこねるような物言いだった。

「言葉に出来ないけど、なんか違う気がするのよ」

腕を組んで俺の元に歩いてくる。俺の隣にあったヒップバックとタオルを拾い上げると裏口にむかう。

ティアナとすれ違いざま、キズナは立ち止まり、ぼそりと告げる。

「イリスがそう言ったの？ 寂しいとか、存在がどうか」

「……」

ティアナは首を縦にも横にも振らず、宿の中に消えていくキズナを見守った。

俺は手に持っていたひまわりの種を頬袋に押し込み、しばし考える。

イリスの部屋にあつたぬいぐるみと、屋根の上で見たイリスの瞳、自分を慰めようとする姿。確かにそれは寂しさから来たのかも知れない。

しかし、だからといってティアナの存在がそんな軽いものではないはずだ。

ふむ……確かに、キズナの感じた通りかも知れないな。

「あ、猫です」

俺が熟考しながらひまわりの種を咀嚼していると、ティアナが手を叩いて声を上げた。

おいおい、ティアナまでそんなことを言うのか……やれやれだ。そんな見え透いた手に何度も引っかけたまるか。

俺は偉大なるリニオだぞ。後の世にまで語り継がれる天才魔法使い

「ニャンニャア」(また会ったニャ)「

……。

狼少年という童話を知っているだろうか？

俺は知っているぞ。知らなければあとで図書館にでも行って読ん  
でくれ。

「ニヤ……（死ぬニヤ）」

きっとこの状況が笑えるだろうから。



第二十話・「俺はお前を好きなのか？」

キズナが大あくびをしているのを見て、俺はひらめいた。

単詠唱魔法の講義を室内でしていても、どうせキズナの睡眠を助けるだけだろうと思えたからだ。どうせなら、実技の出来る広い場所でした方が、眠気を排除できるのではないか。

……よし。そうと決まれば、場所の確保だ。

裏の空き地は誰かに見られる可能性があるから……小考しながら窓の外を見ると、遠く町の向こうに小高い丘があるのが見えた。

「今日の講義は、課外で行う。場所はあそこに見える丘だ」

「あ、それ賛成」

「やはり止める」

「待ちなさいクソネズミ」

「なぜだろうな。お前には拒否して欲しかった。逆に賛成されたので、拒否してみたまでだ。こう………なんと言えはよいのだろうな……嫌がるお前を無理にでも課外に連れ出すのが俺の望むところであり、お前らしい反応だと確信していたのだが……。いわゆる一つのお茶目な嗜虐心というやつだ、許せ」

おざなりに頭を下げてみせる。

「お茶目って……馬鹿言ってんじゃないわよ。何よ、その好きな子に思わず悪戯しちゃう思想」

「俺はお前を好きなのか？」

「わ……っ！　わ、私に聞くんじゃないわよっ！？　そんなことっ！」

意外にもうるたえるようにイスから立ち上がるキズナ。

今頃そんなアクションを見せても遅いというのに。一体俺の質問のどこにそこまでうるたえるような意味が込められていたというのだろうか。

「……なぜうるたえるのだ、キズナ。冗談に決まっているだろうが」

「……殺すわ」

拳の血管が膨れあがる。

「思春期とは難しいものだな。二律背反とでも言えいいのか、とにかく躁鬱のバランスが極端だ。それにしては……第二次性徴があるそかになっているように見受けられすまないごめんなさい冗談だ許せ許してくださいキズナ様」

疾風の如くヒップバックから【鵲鴿】を取り出すと、鰐元部分を俺に突きつける。

キズナが魔力を込めようものなら、俺はものの一秒で黒こげだ。

「嫌ね、私ったら対うっかり【鵲鴿】に魔力を込めるところだったわ」

「………うっかり魔力が込められるか、馬鹿弟子め………」

キズナがヒップバックに【鵲鴿】入れ、ファスナーを閉めるタイミングを狙って愚痴る。

「何か言った？」

「よし、外へ出るぞ」

地獄耳め。

俺がキズナに先だってドアを出ると、廊下の雑巾がけをしているイリスが俺の目の前を横切った。

床に雑巾を起き、両手を雑巾の上のにせて猛ダッシュ。古典的な掃除のスタイル。ここは倭国の寺社か。

往復してきたイリスの額には汗が光っていて、非常に健康的だ。通りすぎたイリスを後ろからのぞけば、どたばたと足を動かすせいで、スカートの内側が恥ずかしくも見えてしまっている。

純白。お前にぴったりの色だな。

「……あ、私ったらついうっかり」

俺の横にヒップバックに入れたはずの【鵲鴿】が落ちてくる。

……おい、さっきファスナーを閉めただろう。うっかりなどあり得るのか？

ごほん、あー……とにかくだ。

イリスよ、サービス精神溢れたお前の純真無垢さは俺としては大歓迎だ。だが、お前はただでさえ一顧傾城の美少女なのだから、そういうところに頓着がないと困る。独占欲に聞こえてしまうかも知

れないが、お前はいつ何時怖いお兄さんに誘拐されても不思議ではないのだぞ。少なくとも俺が怖いお兄さんの立場だったら連れて行ってしまうだろう。

だが、そこは安心するのだ。

俺は怖いお兄さんではなく、優しいお兄さんだからな。

「犯罪者ならみんなそう言うわよ、きっと」

どうやら、ファスナーを閉めなければいけないのは俺の口のようにだった。

「……あ、ムス太」

掃除を中断して、とことと俺の元へやってくる。

無言かつ無表情で黙々と働いていた顔貌には、わずかな微笑が浮かんでいる。屈んで俺を手のひらに載せると、嬉しそうに俺に頼りしてくる。

イリスのすべすべで柔らかい頬にこすりつけられる俺。  
毎日の熱烈スキンシップの始まりだ。

おい、甘えるのもいい加減にしないか、イリス。終いには温厚な俺も怒るぞ。

「ムス太……ひまわりの種……あげるの」

怒らない。俺、いい人。

「ちょっと出かけてくるわね」

キズナがイリスの肩をぽんと叩いて、歩き出す。

「うん……行つてらっしゃい」

ああ、行つてこい。イリスの頭のとっぺんから手を振る。

「懐柔されてるんじゃないっ！ アンタも行くのっ！」

イリスの頭の上から物のように引きはがされ、クッション性の少ない平板な胸ポケットに突っ込まれる。

イリス、お前の第二次性徴には大いに期待している。

決して俺を裏切るんじゃないぞ。どこかの誰かさんみたいに。

「リニオ……何か言いたそうね？」

ぶんぶんぶん。俺は首を激しく振った。

……最近、師匠としての尊厳が失われつつあるような気がする。

「あとで……私も行くの」

「アンタは仕事があるでしょ」

「もちろん……終わってから……」

「ティアナに断ってからにすることね」

「……うん、わかってる」

キズナにはフラットな声。俺には少しだけ気持ちのこもった声。

「ムス太……辛かったら、逃げていいの……。私がいるの……」

「どーゆー意味よ」

腕を組むキズナ。不機嫌メーターがあれば、軒並み増加傾向にあるだろう。

「どういう意味も……そのままの意味」

感情の灯らない瞳がキズナを捕らえる。バチバチと火花を散らすキズナとイリス。

「私の……夫をいじめたら……駄目」

俺はいつの間にイリスの中で恋人から夫に格上げされたんだ？

俺は特定の誰かに縛られることはしない男。偉大なる自由人リニ才様だ。覚えておくといい。

「決着は……持ち越しにする。……今は……掃除するの」

一方的に視線を外すと、雑巾がけを再開し始める。

イリス、お前のそういうところをキズナにも見習わせたいぞ。キズナだったら、面倒くさいことをさっさと放り出しているところだからな。

「つたく……」

頭をかくキズナが、地団駄を踏むようにして歩き出す。

「お出かけですか？」

「ちょっと、丘の方に行ってくるわ」

ヒップバックから部屋の鍵を取り出して、ティアナに手渡す。

「そうそう、後でイリスも来るって言ってたわよ」

背中を向けて、足取り軽く玄関に向かうキズナ。

「……そうですか、なら安心ですね」

「……？」

ティアナの返答に帯びていた憂い。それをいぶかしがったのか、キズナが振り返る。

「いえいえ、何でもありません」

「夕食、美味しいのお願いね」

もう夕食の算段か。気が早いなお前は。

「はい、腕によりをかけます」

ティアナの料理は美味しいからな。分からないでもない。何を隠そう、この俺も楽しみだったりする。

もちろん、体裁上、口頭に上したりはしないが。

少しぐらいは、師匠としての威厳を保っておかないとな。

「キズナさん」

呼び止める声。

「私のことは気にしないでくださいね」

別れを惜しむ親族がハンカチを振るように、ひらひらと手を振る  
ティアナ。

その顔に一握りの寂寥が込められているような気がした。

「ん、なるべく遅くならないようにするわよ」

肩越しに手を振るキズナ。

おそらく、ティアナの考えていることはキズナが思っているようなことではない。もっと深遠な、これから起こる物事を諦観するような響きを宿していた気がする。

キズナはそんな俺の漠然とした不安に気がつくはずもなく、修復された玄関から炎天下へ。

キズナにそれを伝えるべきか。

一瞬の逡巡の合間に、暴力的な太陽光線が俺の視界を真っ白に塗りつづした。

連日の晴天と突き抜ける空。猛威を振るう熱波。  
頭が鈍ってしまいそうになる。

……いや、鈍っていたのだろう。

ほんの数秒前のティアナのことなど、すでに頭から抜け落ちてい



たのだから。

## 第二十一話・「……好きでもなくせに」

町が一望できる小高い丘、その中腹ほどで俺は講義に精を出す。

辺りは一面、野花だらけで、風が吹けば花びらが舞い上がる。高い木が生えていないおかげで丘は終わりまで見渡せ、百花繚乱とばかりに色とりどりの花が咲き競っている。

見渡す町は、都会の喧噪とは一見無縁そう、その実、背の低い建物が丘から向こうにびっしりと裾野を築いていた。

一本の川をまたいだ町の一番奥には、城のような豪華な建物が見え、おそらくペランが住んでいるのならそこだな、と何となく思わせる。

もしもそんな推測が正しければ、馬鹿が高いところを好むのと同じ理屈だ。金持ちが大きい物に心を奪われるのはいつの世も同じことで、奴等は誰も頼んでいないのに権力の象徴をひけらかす。

故人曰く、能ある鷹は爪を隠す……そう、まさに俺のような偉人にふさわしい言葉だ。見習って良いぞ。

「さて、キズナ、理屈は単純だ」

今日は、キズナにとって一番の課題である単詠唱魔法について。これまでも何度も口酸っぱく講義を繰り返してきたが、キズナが理解してくれることはなかった。

出来の悪い教え子ほど可愛いと世の教師は感じるそうだが、俺はその台詞に一言もの申したい。それはきつと出来の悪い教え子が、教師の教えに悪戦苦闘しながらも次第に成長していくから、その様を見ることが出来るから、可愛く見えるようになるのだと思う。

ま、いわゆるツンデレの様な状態だな。

加えて、いつまでも出来の悪い教え子のままだったら、それはただの出来損ないである。

可愛さ余って憎さ百倍……ならば、可愛げが無ければ、残るのはただ憎たらしい感情だけ。

つまりは、そういうことなのだ。

話がそれってしまったが、駄目な弟子でもあり、可愛げの欠片もないキズナは、今でも戦闘中には満足に魔法を使わないし、使えない。

「まず、お前には詠唱魔法のなんたるかを教えておこう」

キズナが心底嫌そうに、顔を歪める。

「ほう……いい顔をするじゃないか。まるで……今更そんなの教わるまでもないわよりニオ師匠っ！ 別に出来ないから言っているわけじゃないんだからねっ！ ……といった感じだな」

「つつこまないわよ、私は」

「ノリの悪い奴め。つつこめ、ツンデレ」

「つつこまない……つつこまない……」

「つつこめツンデレつるぺた」

「……つつこ……ま……ない……つつ……こま……ない！」

歯ぎしりするキズナにさらなる追い打ち。

「つつこめツンデつるぺたまな板」

ぷつり。

細い何かが切れる音。

「ふっ……ふふ……いいわ、つつこんであげる。ねえ、リニオ……  
どこにつつこんで欲しい？ 口？ 鼻？ 耳？ それとも、お尻？  
ふふふ……好きなところを選んでいいのよ。好きなところを好き  
なだけつつこんであげるから……ふふ、ふふふっ……！」

つつこむのが言動ではなく、もはや俺の身体になっていることに  
戦慄を禁じ得ない。

「聞け！ 聞くのだ！」

キズナが【鵲鳩】に魔力を込めようとした機先を制する。

お、お前……そんな太いものを俺につつこもつとしていたのか……  
…？

「戯れはここまでだキズナ」

「そうね……」

助かった。

「つつこんでからね、リニオ？」

裂けちゃう！？ 俺、裂けちゃう！？

「嘘よ、ちょっとからかっただけよ。いくら私でも、こんなものをアンタにつっこんだりしないわよ」

じよ、冗談も大概にして欲しい。

「せめて指ぐらいにしてあげる」

優しくしてっ！？ もっと師匠に優しくして！？

「ぶぷっ！ アンタのそのあわてっぷり、久しぶりに見るわね」

「む……………度し難い奴だな、お前は」

気を取り直す。

師匠の存在というものをそろそろ真剣に考えたい。

「で、今回も復習を兼ねるから、よく聞くのだぞ。講義としては詠唱魔法から単詠唱魔法の関連性だ。ヘイデンにあつて、お前にはない技術。そして、戦闘の勝敗を決するほど重要な項目だ。少々長くなるが……………最後まで付き合え」

ひとしきり笑ったキズナが、笑いすぎて浮かんだ目尻の涙を拭う。

「現状、お前が唯一使えるのが、時代遅れの詠唱魔法だけ。魔法使いが剣のスピードと互角に渡り合えるようになった今という時代では、もはや鼻で笑われるのは必至だ」

腕を組んで俺を見るキズナ。

頬は俺の皮肉な物言いにわずかに強ばっていた。

「過去、長つたらしい呪文を、誇らしげに、さもこの魔法は強力ですよ、とそれっぽい文言を並べて唱える魔法使いがごまんといたが、今となつては愚の骨頂。詠唱など、短ければ短い方が良い。そこから編み出されたのが、現在の主流である単詠唱魔法」

スーツ男が使用していたのがそれだ。

発動している時間はそれほど長くはないが、威力の面では十分事足りる。戦闘能力で言ったらキズナの足元にも及ばない男達を、キズナと互角にまで引き上げる詠唱方法……単詠唱魔法。魔法使いが前線に出てきた理由である。

「今のお前には雲の上だが、無詠唱魔法というものもある。【スワップ】を使つてお前の身体を借りたときに使つた魔法だ。完全なる思考制御である無詠唱魔法は、現代の最先端、次世代魔法のプロトタイプ。それ故にまだハードルも多く、庶民レベルでの汎用化には至っていない。……ま、私がこの身体になっていなければ、あるいは時代は一步早く前進できていたかも知れないが……と、それは自画自賛が過ぎるか。世界でも使用できるものは限られるだろうが、後の世、必ず無詠唱魔法は世界を席卷するだろう」

「途中から、自慢になつてゐるわよ。聞いててウザインだけど」

「ウザイ言つな！」

両手を突き上げてキズナに抗議する。

「詠唱魔法には六大原則がある。体内の魔力を、魔法文字に変換し、やつと魔法として具現化するための条件……言えるな、キズナ？」

「えつと……Who……When……Where……あとは……WhatとWhyと……Howね」

「そうだ、それを明確に示さなければ魔法は発動しない。逆に言えば、それさえつかんでいれば、魔法は発動可能ということだ。では、お前が唯一使うことの出来る詠唱魔法を唱えてみる」

キズナは言うとおりに、魔法をつぶやき始める。

「古より胎動する風の精霊よ、我が盟約に従い、今その力を眼前にて示せ。風、変換、壁、顕現」

キズナの魔力が青白い魔法文字に変換され、キズナの周囲に風の壁が出来上がる。

時間にして三秒ほどだろうか、風圧はキズナの半径一メートルを守っていたが、すぐに丘を駆け抜けるそよ風に変わり果てる。

【恩寵者】特有の青白い魔法文字も消え、舞い上げられた花びらだけがひらひらと空から落ちてくる。

「いいだろう。今の魔法は確かに六大原則に従っていたという証拠だ。そこでだキズナ、ここでいう六大原則をお前の詠唱魔法に照らし合わせると、こうなる。古より胎動する風の精霊(Who)よ、我が盟約(Why)に従い、今(When)その力を眼前にて(Where)示せ。風(What)、変換、壁(How)、顕現……という具合だ」

いつ、どこで、誰が、なにを、なぜ、どのようにして。

そこまで丁寧指定して初めて魔法は世に現れる。魔法はオートマチックではない。魔法は、人と人がするように、相手の思考をおもんぱかったり、便宜を図ったりはできない。

上司の酒が無くなりそうになったら、部下が気を利かせてお酌する……そういうことが出来ないのが魔法だ。

だから、上司はお酒が無くなってから、酌をしろと言わなければならないし、注ぐ量までも指定しなければならない。

六大原則のどれか一つが欠けても魔法が発動しないのは、そのためだ。

「詠唱魔法を唱えれば、文言でどのような魔法か分かってしまうし、詠唱から魔法が顕現するまで時間がかかる。詠唱魔法とは、かように使いにくく煩雑な物なのだ。ヘイデン戦でそれがよく分かったろう?」

さらさらと風が俺とキズナの間を抜けていく。

花びらを誘いワルツを踊る。

「そこで、単詠唱魔法だ」

色とりどりの花びらの中、俺とキズナは師弟の関係となる。

「六大原則を唱える必要があり、時間の浪費と、魔法の種明かしという詠唱魔法の最大の弱点を補うべく編み出されたのが単詠唱魔法。魔法の六大原則を一言に集約することで魔法を素早く発動させ、なおかつどのような魔法であるのかをわかりにくくするという二つの側面を持った、現在世界の主流となっている詠唱方式だ。逆引きの辞書のような関係にあたるな」



俺は一つ咳払いを入れ、目をつぶった。  
頭の引き出しをまた一つ空ける。

「……北半球の温帯に約六十種。多年草。葉は線状または披針形で、平行脈。花は両性で大きくラッパ形、花被片は内外各三枚。雄しべに丁字形の葯<sup>やく</sup>がある。花が美しく芳香があり、園芸品種も多い。鱗茎は球形、白・黄・紫色などで時に食用……」

片目を開けてキズナを見上げる。

「これはなんだと思う？」

「とりあえず、何かの花ってことぐらいは分かったわ」

仏頂面で前髪をかきあげながら、俺の問いに答えた。  
付着していた花びらが、俺の目の前に落ちてくる。

「だろうな。今は……百合だ。百合の花。かように長々と呪文を述べることなく、たった一言で呪文を詠唱してしまおうというのが、単詠唱魔法なのだ。あらかじめ頭の中で六大原則を結びつけておく必要があるがな。なに、お前のような馬鹿でなければ、それほど難しいわけではないのだ。ただし、詠唱魔法よりも文言を集約させる分、より精度を必要とされ、魔力量も多く必要になるというのがデメリットではある。ま、それよりも、圧倒的にメリットの方が上回っている。心配はいらない」

「さりげなく私を馬鹿にするの好きよね、リニオ……」

ヒップバックに向かう手。

……お前はそうやってすぐに【鵲鴿】に手をかけようとするのが好きだな、キズナ。

「魔法を使うということは、数学の公式と理屈は全く同じ。いいか、数学の公式だ。数学は歴史の勉強とは違い、一言一句問題と解答を暗記していても意味がない。公式を覚え、その公式を問題によって適宜利用し、代入出来て、そこで初めて答えを導くことが出来る。公式とは六大原則。いつ、どこで、誰が、なにを、なぜ、どのようにして……それら一つ一つが代入先だ」

「……あ、頭痛い」

額に手を当てて苦虫を噛み潰したような顔をする。

……キズナ、限界か？

「いいか、数学の問題を解くイメージだ。そうすれば、魔法のバリエーションはいくらでも増えていく。お前みたいに間違えるのが怖くて、たった一つの魔法をがちり覚える必要など無くなるのだ。そこまで理解できていれば、単詠唱魔法はそう難しくない」

振るった熱弁に触発されて、身体はぽかぽかと火照っている。

「理解できそうか？」

草花の中に腰を落とすと、そのまま大の字になるキズナ。

熱でうなされる病人のように、うんうんうなりながら腕で目を覆っている。

……まったく、だらしない奴だ。

「……頭痛が取れたら、ゆっくり思い出してみるわよ……」

期待薄のようだった。

ため息と共に肩を落とす。

どうも私は好きで長々とくどくど話してしまうが、キズナにとっては悪循環らしいな。師匠として弟子に教えてやろうという意気が空回りしているのだろうか。

駄目な教え子が駄目なままなのは、教える側にも理由があるから……そんな風には思いたくないが。

「キズナよ」

火照った身体に、そよ風が気持ちよい。

「頭痛いんだから、話しかけないで……」

キズナが半眼で唸る。

「……俺はお前を信じているぞ」

名も知らぬ大きい花の茎に背を預けて、飽くことなく蒼穹を見上げる。

「お前は馬鹿な弟子だが、嫌いではない」

「ふ、ふんっ……！ ……好きでもないくせに」

「そつだな、確かに好きでもない」

直射日光に当てられたせいか、キズナの顔は赤い。

悪いが、日射病で倒れても自分でどうにかしてくれよ。ハムスタ  
ーの俺にお前を運べとは無理な話だ。

……いや、【スワップ】をすればいいだけの話か。

「……ホント、嫌な師匠の弟子になったわ。一言目には胸の話、二  
言目には皮肉しか言わないんだから。昔も今も……最悪で変態」

日差しと青空と横切る花弁。

「だが、お前は今も俺の弟子でいる。そして、これから俺の弟子  
でいるだろうな」

「何よ、そのふざけた発言」

偉大な師匠と馬鹿弟子、人と元人（現ハムスター）という関係。

「自信だ」

【恩寵者】と【スワップ】という身体と魔法の関係。

「……………バカよ、そんなの。馬鹿リニオ」

魔法とキズナと身体の関係。

「俺のことは師匠と呼べ」

「ヤダ」

俺は笑っていた。

## 第二十一話・「……好きでもなくせに」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

物語はこれから佳境ということで、後書きを書かせていただきました。

魔法の説明などが少々くどいところなども散見されますが、大目に見ていただけると助かります。続編などは書きませんので、全て詰め込むつもりで頑張りたいと思います。

……それでは、もうしばらくの間、作者と物語にお付き合い下されば光栄です。

評価、感想、作者の栄養になります。

## 第二十二話・「弟子にしてあげても良いわよ？」

イリスが来たのは、太陽が空の頂点を過ぎて日も暮れようかという微妙な時間帯だった。微妙とはいえ、日差しはまだ強く、気温も高い。

「姉さんと……話していたら……長引いたの」

左腕にバスケットを下げて、右手には黒い日傘を持っている。なぜか日傘の縁にはフリルが付いていて、ただの日傘にしては蛇足が多い。

思うのだが、一体誰の趣味なのだろうか。ベビードールといい、日傘といい、並の趣味ではない気がする。

「お店の人が……くれるの」

イリスの服装をしみじみと眺めていると、イリスが俺に向かって説明する。

キズナ、そう俺をにらむな。

俺は口に出してなどいないし、ましてや身振り手振りで訴えかけたわけでもない。今のは、イリスが勝手に判断して、勝手に告白してきただけのことだ。

恐ろしいほどの観察力……ということで済ませるにはあまりにも会話が成立していたような気がする。

「これ……」

「お、気が利いてるじゃない」

イリスが地面に置いたバスケットをのぞき込むと、キズナがよだれを垂らしていた。

お前は待てを命じられた犬か。

「ムス太……食べて」

バスケットの中にはたくさんのサンドイッチが詰められていた。レタス、卵、ベーコン、トマト……目にも美味しい色とりどりの配色が食欲をそそる。

キズナは、いただきますもしないでサンドイッチにかぶりついている。

さすがは待ても出来ない犬以下のキズナだけある。自分の欲望にはとにかく素直だ。

右手と左手にサンドイッチを持ち、交互に口に含みながら胃袋に納めていく。

漫画でよく見るような食べ方だな。喉に物をつつかえるお約束はあるのだろうか。

「はい……ムス太にはこれ」

イリスがバスケットの奥から取り出してきたサンドイッチには、なにやら特殊な趣がある。よくよく目をこらしてみれば、なんと、サンドされているのは大量のひまわりの種なのである。

イリスよ……いくら俺でも、ひまわりの種ならば何でもいいうわけには、いただきます。

「ふふ……良く噛んで」



ばくばくばく……………んぐっ！

がつつきすぎたせいか喉に異物が突き刺さったような感觸。顔を真っ赤にしながら、咳き込んでしまうのを我慢する。

吐き出してなるものか。

必死に胸をノックして、何とかつかえている物を嚥下しようと苦闘する。

「もう……ムス太……誰も取らないの」

「馬鹿ね、勢いよく食べ過ぎて喉に物をつつかえるなんて、漫画と一緒にじゃない」

お約束なのかつ！？ この俺が！？

「ムス太……？ ……泣いてるの？」

泣いてない。決して泣いてなんかないぞ。

「待てぐらい犬でも出来るわよ、なのに目の色変えてがつつくから、そういうことになるのよ」

お前はどこまで俺の心を陵辱すれば気が済むんだ。

「ムス太はハムスターだからいいの」

イリス、フォローありがたいが、俺は元人間だ。

「そつだ、イリス。アンタ【恩寵者】なんでしょ」

イリスは小さな口でサンドイッチの角をかじると、咀嚼しながらうなづく。そのスピードで食べていくと日が暮れてしまっただろう。キズナと比べたら、アリとゾウぐらいの食欲の差だ。

おい、イリス。

お前は第二次成長（性徴）期なのだから、もっと食べないと大きくなれないぞ。その……色々な意味で。

「魔法は使えるの？」

小さな喉でサンドイッチを飲み込む。

「……使ったことない」

「ふーん、そう……」

キズナが悪戯を思いついた子供のような邪悪な笑みを浮かべていた。

「イリス、私が直々に魔法を教えてあげるわ」

それはどんな拷問だ？

「……？」

きょとんとしているのはイリスだ。

それを見たキズナは鼻で笑い、手に付いたパンくずを舌でぺろりと拭くと、颯爽と立ち上がる。

「キズナが……私に？」

その疑問は大いに正しいぞ、イリス。

「そうよ、この私が教えてあげるっていうの！　少しは喜ばさいよ」

「……」

「なんでそこで、ムス太と私を交互に見るのよ」

自分を棚に上げすぎて棚が壊れなければいいのだから。

イリスはそれを分かっているから、こうして俺に、キズナは……大丈夫なの？　……という視線を向けているのだ。少しは分かれ。

「いい？　一回しか言わないからよく聞きなさいよ」

人差し指をピント立てて顔をイリスに近付ける。

「単詠唱魔法というのは、逆引きの辞書の関係なわけ」

ふと思ったのだが、自分が理解していないものを他人に教えるなど奇跡的にもほどがある。俺

の言ったことを丸暗記しているならば別だが、そんな記憶力をキズナに期待できるはずもなく。

キズナ、お前の海馬は最近頑張りが足りない気がする。

「魔法の六大要素ってのがあるのよ。不思議なことにね」

訂正しておくが、全然不思議ではない。

「いつとかどこでとかそういう奴よ。詠唱魔法っていうのはそれらの要素を口に出すことで発動するっていう」

六大要素はかろうじてセーフとしても、せめて初めて学ぶ人間のために、六大原則をきちんと説明して欲しかった。

「その六大酵素を一つの言葉に纏めるの」

酵素ではない。決してタンパク質方面の話ではない。

「それが逆引きの辞書の関係なの」

「……」

イリスがまばたきをしていた。

「……終わりだけど？」

終わりなのか！？

……悪かった、イリス。ただただ悪かった。お前の貴重な時間を奪ってしまったことを、キズナに代わってこの俺が謝ろう。すまない。恥ずかしい弟子でごめんなさい。

「さ、後は実践よっ！ やってみなさい！」

小高い丘に向かってびしりと指差す。

「……ん」

イリスは素直にうなずくと、静かに立ち上がる。

瞑想するように目をつぶり、深呼吸。

臆することもなく魔法を唱えようと試みる姿は、失敗することを恐れて何もしない最近の若者に見習わせたい。

「……」

無言のまま、風が走る丘を見つめ続ける。

ボロボロのメイド服が早い風に揺られてひらひらとはためく。集中力が、嫌が応にも高まっていく感覚。ぴんと張り詰めた空気が、電気を放ち、さながら肌をぴりぴりと焼くようだった。

風の音が消え去り、耳鳴りが脳を揺さぶっていく。嵐の前の静けさ。

無表情で時が止まったかのようにたたずむイリス。

時間は、ふいに動き出した。

「……どうすればいいの？」

分からなかっただけかつ！

まったく、勘違いさせるな。変に緊張感をあおってしまったじゃないか。

「もっと頭を働かせなさいよ。単詠唱魔法って言うぐらいなんだから、何か一言ぐらい言って魔法を発動させるのよ」

「……何を……言えばいいの？」

「何でもいいのよ、なんでも。最悪、馬鹿リニオでもいいわ」

最悪、馬鹿キズナでもいいぞ。

「……わかった」

キズナを見ていたイリスが再び丘に向き直る。

魔法を使う格好らしく両手を前に突き出す。

水を差すようだが、魔法を放つとき手を突き出したりする必要はない。

六大原則を思い出せば分かってもらえると思うが、魔法の発動する場所などを細かく指定しているからだ。

昔からの因習というか、単なる格好付けというか、魔法を使うときは目標に対して手を突き出したりしなければいけない……そんな気持ちになってしまるのが魔法使いの奇妙な習性でもあり、魔法使いなら一度はやってみたいおめでたい儀式のようなものである。

「……鳶色リコリス」

突然、イリスがつぶやいた。

少女の言葉を意識するならば。

赤い色の彼岸花。

イリスが何を思い描いたのかは分からない。

ただ言えることは、すさまじく熱量の高い炎の渦が、小高い丘の花々を焼き尽くしていたということ。

彼岸花とは言い得て妙で、その色合いや、燃え上がり方が彼岸花

の花びらに酷似していた。青白い魔法文字がイリスの半径十メートルを覆い尽くし、踊り狂う波紋のように広がっていく。辺り一面を焼け野原にしたイリスの単詠唱魔法は、そよ風を熱風と化し、俺とキズナの目を容赦なく痛めつける。

俺はあまりのことに驚くことも忘れて、炎達の狂喜乱舞に見入るしかない。

どうやら、キズナも同じようだ。

口をあぐりと開けてツインテールを熱風にもてあそばれていた。

「……できた」

できた……だと？ 冗談じゃない。そんな簡単にできてたまるか。

燃え尽きた花々の残滓が、深々と降り注ぐ。

たくさん灰の雪に降られながら、俺はイリスを改めて見やる。

「ふ……ふん、見なさい！ 私の教え方が良かったのよ！」

いや、それはない。

「イリス！ 私の弟子にしてあげても良いわよ？」

（いや、俺の弟子にしてやるぞ。安心しろ、今いる弟子はクビだ）

「リニオ……アンタねっ！」

（俺は、教え甲斐のある弟子を持ちたいと常日頃から思っていたのだっ！）

俺とキズナが無言でいがみ合うのをよそに、イリスはフラットな

声で言葉を綴っていた。

「……遠慮するの。……魔法は、人を傷つけるだけ……なの」

バスケットを持って、来た道に戻ろうとする。

俺とキズナはものの数秒で休戦協定を締結し、さっさと丘をくだっていくイリスの後を追う。

俺はキズナの胸ポケットに戻り、揺りかごに乘せられたように心地よい感覚を味わう。

ゆらゆら……うむ、眠くなりそうだ。

胸ポケットから前を見ると、イリスは小柄ながら足早で、何か家路を焦っているようにも見受けられた。

確かに西に移動した太陽も、その丸い相好を山際に隠そうとしている。夕焼けを経て、夜のとばりが世界を包むのも時間の問題。早く帰りたいというのも分かるうというものだ。

「ちょっとイリス、急に立ち止まらないでよ」

イリスの背中にぶつかるキズナが、不平をもらす。

「一体何なのよ……？」

キズナの声は聞こえていなかっただろう。イリスはただ一点を凝視していた。

遠く北には沈んでいく太陽とは別の、もう一つの夕焼けがある。空を真っ赤に染めて、燃えるように存在を主張している。



俺は痛烈な違和感に襲われた。

目の錯覚ならば良かった。

俺が違和感に打ちのめされていると、代弁するようにキズナが声を荒げる。

「行くわよ……！」

丘を蹴って、蒸し暑い空気を切るように疾走するキズナ。今にも転びそうになりながら、イリスも必死にそれに続く。

「ティアナ……！」

「……姉さん……！」

【旅人の止まり木】が炎上していた。

## 第二十三話・「決まりね」

【恩寵者】は、いついかなる時も権力の傍にあった。

権力者はこそって【恩寵者】を狩り、我が物にしようと躍起になった。

想像には難くないだろう。

その圧倒的な魔力量は、近代のいかなる兵器をも凌駕するというのだから。

ひとたび魔法を唱えれば、町一つを簡単に灰燼に帰し、城の外壁を瓦解させるというのだから。

幾千もの屈強な兵士達をなぎ払い、血の一滴も残さずに蒸発させるというのだから。

権力の象徴とされ続け、自らの自由を束縛され続ける。

友人を、家族を、恋人を、自由すらも奪われ、殺され、権力者の道具とされる。

強制的に殺戮者と造り替えられていく。

戦場に必ず姿を現し、獅子奮迅に戦うその勇姿は国民達には勇者として歓迎され、指導者達には格好のプロパガンダだった。

戦場に捨てられた幾千の屍を踏みしめ、【恩寵者】は秘めたる膨大な魔力を青白い文字に変える。変えられた文字列は精霊との契約通りに、魔法として敵に放たれた。

大陸同盟と倭国の戦争……【恩寵者】同士がぶつかり合ったあの戦争で、俺は聞いた。

キズナと出会ったあの戦争で、俺は聞いたんだ。

今際の際で兵士達がつぶやいた細い断末魔を。

……紺碧の……死神……。

燃えあがる【旅人の止まり木】は、たくさんの火の粉を太陽の沈んだ空へと飛ばしていく。残り少ない命を振り絞るように、まるで花火のように華々しく。

「……………」

イリスはただ呆然とそれを見上げていた。真っ白な顔を燃え上がる火の赤に染めて。衝撃を受けたような土気色などではない。

まるで対岸の火事を眺めるような平然とした無表情だった。

「……………くそつたね」

キズナが拳を振るわせた。

（落ち付け、キズナ）

「落ち着く？ ははっ、私は落ち着いているわよ……この上なく……ねっ！」

俺がいる胸ポケットには、歯が削れるのではと心配になるほどの歯ぎしりの音が聞こえている。頬の筋肉は強ばり、握力に際限はない。右手に握りしめた【鵲鴒】に感情に呼応するように青い光りが称えられている。

火事を取り囲む群衆の手前、刀身を現わすことは出来ない。

キズナにしては、よく我慢していると云えた。

「……」

無言のイリス。

窓ガラスが割れ、中から炎が飛び出す。降りかかる破片を避けることもせずに、イリスは火の袂で我が家を見つめている。崩れ落ちる様を必死に目に焼き付けようとしている。

その背中では、小さい身体に似合わず毅然としていて、【恩寵者】としての自分の運命を達観しているようにさえ感じられた。

「……」

幸いにもティアナは無事だった。

周囲の住民達のやりとりで耳をそばだてると、ティアナはどうやらペラン達に連れて行かれたらしい。スーツを着た男達が数人宿屋に入っていくのを見かけた者がいた。男達が宿に入ってから、一分もしないうちに嫌がるティアナを連れ出し、そのわずか数分後にはこの有様だ。いかな馬鹿とて、それが放火であることを否定することとはできないだろう。

そのうちの一人は天を突く屈強な大男。それほどの大男、ヘイデーンに間違いない。

奴等が意図していることは分かる。

ティアナを預かった、返して欲しくばイリスを連れてこい。

使い古された常套句。悪党のしそうなことだ。自らのホームに誘い込んで、徹底的にやろうというつもりか。

明確な悪意が燃え上がる宿に込められている気がした。

（これは……誘いだな）

「こんなものを見せられて興奮しないわけにはいかないわ。いいわ……誘い通り、最高のデートにしてあげるわよ」

（敵の狙いはイリスだぞ）

「だから？」

（飛んで火にいる夏の虫だと言っているんだ）

事件に自ら飛んでいくお前にふさわしい言葉だ。少しは自分をいさめろというのだ、馬鹿め。

「あつそ、私は飛んで火にいる夏の虫でも一向に構わないわ！ 火中の栗でも平気で拾うのが私っ！ 火の中ならなおさら、火事場の馬鹿力ってやつを見せつけてやるだけよ！」

（どうやら俺は……火に油を注いってしまったようだな）

キズナの言葉が頭痛を誘発する。やはり今回の旅も、最後はこうなったか。

……やれやれ。

いまだ轟々と燃え上がる宿屋に背を向けて、大股に踏み出す。弟子が目指すは遠くにそびえ立っていた豪邸。迷い無いな、キズナ。

（あそこがペランの家だという確証はあるのか？）

「違うなら違うでいいわ。聞けば教えてくれるわよ」

ニヤリと笑う。まるで危ない奴だ。確実に門前払いを食らうだろう。

一歩、二歩。ずんずんと歩き出す。

「……待つて」

小さくも澄んだイリスの声が、耳に届く。

まったく、お前もかイリス。いいか、頭に血が上った状態で行動すると、後々ろくなことになるのだぞ。キズナのように後は野となれ山となれ主義では、国破れて山河有りだ。ここは一つ、いかにして相手の裏を付くか、冷静に今後の対策を練って、迅速かつ丁寧に行動するのが真の知者としての正しい選択だ。

というわけで、イリスよ、キズナのように目先の感情に捕らわれている場合ではないのだぞ。……だが、お前やキズナの気持ちも分からんでもない。本来はこの冷静沈着、頭脳明晰、偉大なるリニオ様も、今回ばかりは、キズナの考えに賛同してやるとしようか。

そついうわけだ。思い立ったが吉日、善は急げ、急いては事をし損じる、急がば回れ……などと細々とした故事成語の矛盾はこの際すっぱり置いておいて、ペランからティアナを取り戻しに

「……行かなくていい」

そうそう、行かなくていいのだ。ここはどっしりと構えて、敵の

出方を待つのも一興

……なんだと？

「どつという意味よ、イリス」

「……そのままの……意味」

何本もの柱が焼け落ち、倒れていった。

二階の重量に堪えきれなくなった残りの柱は一斉に押しつぶされる。大量に吐き出された熱気は、火の粉をまき散らし、それはまるで家が吐血しているようにさえ見える。

「もう一回言ってみなさい」

つかつかとイリスの背中に歩み寄る。

「行かなくていい……そう、言ったの」

キズナの怒りが言葉を追い抜き、言葉はさらにキズナの手の動きに抜かれていく。言葉よりも、考えるよりも手が早いキズナが、イリスの肩をつかむ。

強い力で振り向かせると、胸ぐらをつかみ上げる。

「ティアナが……捕まってるのよ？ アンタ妹でしょ！？」

つま先立ちになつてしまふイリス。

「……姉さんが……言ったの……今日、ここを出るときに……私のことは……何があっても気にしないで……って」

そうか。

今日、この宿を出る前に気がついた不安はこれだったのか。別れ際に手を振るティアナと、寂しそうな表情。少なからず予期していた自分の未来と決意。

……なんと強い女か。

「イリス、アンタはそれに黙って従うわけ？」

「……姉さんが……言ったから」

「何ぬかしてんのよ！ ふざけるんじゃないわよっ！」

感情にまかせて罵った。

女であることを忘れ去ったその言葉づかいは、周囲の野次馬の眉をひそめさせる。

「このままでいいの！？ 黙ってみてるの！？ やられてやられっぱなしでいいの！？」

唇を噛むイリス。姉に言われたこと。自分のしたいこと。

「私は嫌よ。やられてやられっぱなしなんて嫌。泣き寝入りなんてゴメンだわ。私は立ち上がる。何度でも立ち上がって、死んでも枕元にだって立ってやる！」

優先すべきこと。

姉の意思、自分の意思が戦っている。



「もう一度聞くわよ……イリス、アンタはどうしたいの？」

「……私は……」

唇を振るわせるイリスが、切れ切れの声でつぶやいた。

「姉さんの……言つとおりに……する」

「なによ……人形じゃない、コイツ」

胸ぐらを離し、突き放す。よろけたイリスが、灰の落ちた地面に尻餅をついた。

「ティアナが死ねって言ったら、アンタは死ぬの!？」

「……………っ」

無表情に亀裂が入る。

「コイツがこんなだから、ティアナが勘違いするのよ! ……バカじゃないの?」

ティアナはイリスに必要と思われていないと言葉の端々にそれを匂わせていた。

イリスは姉をこれほどまでに慕っているのにもかかわらずだ。すれ違いにも程があるう。

まるで母親にはいいはいる赤子のように、一心不乱に、純真無垢に、その言葉のみを信じて、それでもイリスは頑になる。

「イリス、聞きなさい」

顔を真っ赤にするキズナ。おい、血管が切れそうだぞ。

「……」

「思っているだけでは伝えられないし、伝わらない。願っているだけでは叶えられないし、叶わない。待っていても手に入れられないし、手に入らない。望むもののためには……叫んで、手を伸ばして、つかみ取るしかないのよ！」

……世間のなんたるかも知らない馬鹿弟子のくせに……。

見直したぞ！

「その……リ、リニオが……そう言ってるわ」

言っていることの恥ずかしさに今更気がついたか。しかも俺のせいにするのは、なんて奴だ！

「チュウ！」

だが……キズナよ、俺も同感だ。

お前の馬鹿も、ここまで真っ直ぐに突きつけられては手も足もしつぽも出ない。

「さあ！ 叫びなさい、イリス！」

「……っ……う」

「手を伸ばしなさい！」

「…………私…………」

「そして、つかみ取るのよっ!」

真性の馬鹿とはかくも恐ろしいものか。いや……俺も人のことは言えないな。

尻餅をついてうつむいたイリス。

「私……………」

手を伸ばしてくる。

「……………寂し…………いの」

目尻に浮かんでいた雫がはじける。

「誰にも…………いなくなつて欲しくなんかないの!」

キズナのブーツをつかんで、追いつがる。

「…………だから、お願い…………助けてキズナ!」

イリスの凜とした声に、キズナはにっこりと笑つて応えた。

「合格。いい声を出すじゃない。アンタの思い、確かに聞いたわっ!」

ああ、俺も確かに聞いたぞ。  
キズナと目が合う。言いたいことは分かっているさ。

「じゃ、決まりね」

ふむ……仕方がないな。

うなずきあつ師弟にイリスが尋ねてくる。

「……何を……する、の？」

何をするかつて？

「ペランをぶっ飛ばすのよ！」

ペランをぶっ飛ばすのだ！

第二十四話・「……やはりというか、やはりなのか？」

太陽は完全に没していた。

ペランの屋敷らしき建物の外壁まで来た俺達は、建物の影からこっそりと門をうかがう。

門の前には二名のスーツ男がうろろしていた。

二名とも背が高く、一般人ならばおいそれとは近付けないような雰囲気を纏っている。

豪邸の周りは深い堀で覆われていて、正門のみが人の出入りを許すような構造。周日から壁を伝って侵入というような手段は使えそうになかった。

「私に任せなさい。イリスは事が済んだらくること、いいわね」

イリスの首肯を確認すると、建物の影から出て行く。自らの正体を明かすことを厭わない、自信を持った足取り。

俺は一抹の不安を覚えた。

「……やはりというか、やはりなのか？」

考えなしの正面突破。

「リニオはそこで見てなさい、上手くやるから」

街灯に照らされながら、キズナはゆっくりと門へ歩いていく。見とがめた男達は、サングラスに隠れた眉をぴくりと上げ、キズナの前に立ちはだかった。

キズナより頭一つは大きい。厚い胸板が壁のように立ちはだかる。

「立ち入り禁止だ」

「ペラン、いるわよね？」

「……。……。何者だ、貴様は？」

キズナの唐突で直接的な物言いに、男は一瞬の逡巡を交える。  
確認はそれだけで十分だった。

間違いない。この男のわずかな沈黙の中には、ペランの所在の有無と、対応がよぎったはずだ。

「私は【恩寵者】よ。悪いけど、押し通るわ」

キズナの身体が男の目の前から消え失せる。

頭一つ男が大きい分、身体を沈めたキズナを視界から失うのも早い。キズナは素早く身体を上下反転させて、男の頭を両足首でロックする。ブーツで締め上げる男の頭がみしみしと音を立てる。

反動と体重を交えて、キズナは逆立ちをする格好から、足首で頭を締めたまま、男の頭を地面に叩きつけた。

足癖の悪い女だ。

鈍い音が二つ重なる。男の頸椎が折れた音と、地面にめり込む音の二つだ。

男の意識は身体から離れ二度と戻ることはない。キズナは素早く身を起こすと、二人目の男が襲いかかってくるのを目の端に留める。繰り出される男の拳を首をかしげて避けると、続けざまにその腕を取り、勢いを制して一本背負い。受け身も取れずに背中を地面に打ち付ける男の口から、苦悶の声がもれる。男の意識がキズナに投げられたことを認識する間に、キズナは男の胴体に馬乗りになっている。

連続的で、隙のない動き。

首を右肘で絞めにかかるキズナ。圧迫される呼吸系。ぐ、ぐ、ぐと締め付けを増すキズナの力に、男が泡を吹いて白目を剥いた。

「一丁上がりつと」

料理を客に出すようにあっさりと言つてのける。

キズナが建物の影にいるイリスに手招きすると、イリスはとことこと駆け寄ってきた。屍となった男二人を遠回りに裂けるとキズナの傍らにやってくる。

（おい、この門はどうやって開けるのだ）

小声で尋ねる俺に、キズナが鼻息を落としてくる。

「ふん、そんなの簡単よ。イリスお願いね」

「……うん」

おい、お前達はいつの間にそんな意思の疎通が出来るようになったんだ？

「鳶色リコリス」

丘でみせた単詠唱魔法をイリスは再び詠唱する。

魔法文字が喜ぶようにイリスの周囲を周り、青白い残像を描く。

まもなく発動した魔力は、真つ赤な炎で門に風穴を開けた。

溶鉱炉につつこんだように、鉄の門扉が風穴に沿ってぐにやりと溶けてひしゃげている。丘で見たよりも精度が上がっている。

イリス、お前には一度真剣に魔法を教えてやりたいものだ。

時間の経過と共に霧散した魔力の残滓を肌で感じながら、キズナは興奮を抑えられないように門をくぐる。

「……すごい屋敷……なの」

「まさに金持ちのやりそうなことね」

屋敷までは百メートルほど。

屋敷へ続く舗装道路を幾つもの街灯が照らしている。ライトアップされた中央の噴水を中心点に、武装した騎士の石像と、天使をモチーフにした石像、手入れの行き届いた植木がそれぞれシンメトリになるように配されていて、家主の金満さをこれでもかとアピールしている。

正直いくらかかっているかなど考えたくもない。

全焼した【旅人の止まり木】など何百軒も建てられるのではないだろうか。

「きたきたきたわ……期待通り雑魚がぞろぞろとね」

門をくぐるまで半分以上電気が落ちていた屋敷は、あっという間に全ての部屋に電気が灯り、さながら敵襲にあった砦のようだ。

事実、無鉄砲な馬鹿弟子に襲撃されているのだが。

敵は正面の門を開け放ち、次から次へ湧いて出た。手に手に様々な獲物をたずさえている。

ざっと五十人はいるだろうか。

全員、慇懃なスーツ姿ではなく、いかにも酒場で飲んだくれてい



る荒くれ者といった風情だ。

門番は外面的な体裁上、スーツ姿だったのだろう。

ペランが色々と裏の事情に通じているのもうなずける。叩けばほこりがいくらかでも出てきそうだ。

「イリス、隠れてなさい」

「うん……キズナ……頑張つてなの」

サムズアップするキズナ。

「襲ってくるような奴がいたら、容赦なく魔法を使っちゃいなさい」

イリスが首を振る。

「……魔法を……そういうことには……使いたくないの……」

門を壊しておいてなんとも偽善的な発言だが、それがイリスの良さなのかも知れなかった。人を傷つける魔法、そういう使い方をしたくないという意味なのだろう。

「そ、なら、そのときは全力で逃げなさい。降りかかる火の粉ぐらいは自分で拭わなくちゃ」

お前が半ば強制的に火の粉に飛び込ませたのだろうが。

正面突破をすることは愚かなお前の性格上明らかだが、イリスのことを少しは考えてほしかった。敵の狙いはイリスなのだぞ。

俺の頭痛などお構いなしに、キズナが両手をぱきぱきと鳴らす。

「ヘイデンは……ペランもないみたいね」

一通り敵の姿を見渡したキズナは残念そうにため息を吐く。

「やっぱり、雑魚を掃除しないと、ボスは出てこないのかしら」

ゆっくりと敵集団へ歩き出す。

……彼我戦力比、一対五十。

屋敷の中にはヘイデンとその部下達、ならびに魔法使いが控えているだろう。

完全なる多勢に無勢。単詠唱魔法の使えないキズナにしてみれば自殺行為。しかし、当のキズナは興奮を抑えきれない様子で、足取りを徐々に早めていく。

身構える敵集団。獲物を握る手に力が込められていく。

それを見たキズナは鳥肌を立てながら笑う。

俺は胸ポケットからそれを見て、頼もしさを通り越してあきれかえっていた。

「お前は変態か」

ゆっくりとした歩みが、早歩きへ。

早歩きが、小走りへ。

抑えられない衝動が、キズナを戦いへ引き寄せる。

唇をなめるキズナが、小走りから駆け足へとスピードを上げる。

迎え撃つ敵集団も、キズナが手ぶらで向かってくるのを見て警戒心を強めていた。妖艶に舌なめずりするキズナに空恐ろしさを感じ

ているのだろう。その内の一人が恐怖を振り払って、キズナに仕掛けてくる。

それに続けと、数多くの男達がキズナに大挙して押し寄せる。

今、嚆矢は高らかに放たれた。

雄叫びを上げて剣を振り上げる先頭の男。

その勇気は褒めておこう。だが、それは無謀というものと知れ。

歩き、小走り、全速…… トップギアへチェンジしたキズナと男がぶつかり合う。

正確に言えば、ぶつかり合うというのには語弊がある。ぶつかり合ったのはキズナのつま先と男のあごだからだ。鉄板の仕込まれたキズナのブーツが、男のあごを破壊した。つま先はめりこみ、衝撃は下あご、上あごを突き抜け、鼻骨までも破壊した。

男の意識が碎けた前歯と一緒に飛んでいく。だらりとあごを垂らした男が鼻血を飛び散らせながら海老ぞりに宙を舞う。キズナは男の手からこぼれる剣を地面に着地する直前にすくうと、次に襲いかかってきた男の手首を切り落とす。手首からほとばしる血に目を丸くする男の叫びが、耳に不快な反響を残す。

キズナは手首を失った男を無視して、剣で突いてくる男の刃を、半身になることで回避する。伸ばされた男の腕を脇腹に抱えて、男の肘の関節に膝蹴りを入れた。

逆関節となった男の肘はぼきりと折れて、武器を取り落とす。すぐさまその足で前蹴りを突き込むキズナ。

後ろから飛び込んでくる男達を大勢巻き込んで、男は吹っ飛ぶ。

キズナのスピードは敵を圧倒する。

一撃でしとめようと力む敵の力を利用して、的確な打撃を、的確

な箇所に加えて、速やかに致命傷とする。

戦闘技術は俺の目から見ても一流だ。

……魔法もこのくらい出来ると良いのだが。

俺は飛んできた返り血をポケットに隠れることで避ける。

剣を振るう音が聞こえた。

再び顔を出す。

絶叫を上げる男の顔面が飛び込んできた。キズナが振るった剣を首の半分まで食い込ませた男が、キズナに向かって倒れ込んでくる。絶叫の半分は切り裂かれた喉から空気となってもれていく。

キズナがその男を優しく胸で受け止めるはずもない。

これ幸いと、踏み台にして軽やかに宙を舞った。

ブーツの足跡が男の顔面に残されていく。まるでスタンプラリーだ。

一、二、三……と男の鼻の骨を潰し、四人目は男という踏み台を利用したかかと落とし。

脳天を鉄板入りのブーツで割られた男の頭蓋骨から、ピンク色の中身が見え隠れする。注射器の先から飛び出る液体のように、ぴゅぴゅっ、と血潮が飛び散った。

周囲はまさに四面楚歌。

後ろから殴りかかってきた男の打撃を背中に受けて、キズナは舌打ちをする。打撃の方向から男の顔の位置を素早く読み取り、神速の回し蹴りを放つ。

頬骨を眼孔ごと破壊された男が、視神経を飛び出させる。目玉がブランコのようにぶら下がっていた。キズナはさらに一回転し、男の胸板に掌底を打ち込む。

地面を離れた男の身体が噴水に飛び込んで、盛大な水しぶきを上げた。

## 第二十五話・「一応アンタだけなんだからねっ！」

キズナのツインテールが鞭のように回る。短いスカートがひるがえし、華麗な足技を披露する。血を求めて振り下ろされた大鉈。キズナはそれを、逆立ちをしてのブーツのかかとで受け止める。地面についた手を巧みに動かすことによって、身体を回転させる。まるで旋風だ。キズナが両足を最大限に広げて、横回転する。長い足が男達の胴を蹴り、武器を弾き、頭蓋を破損させる。武器を飛ばし、意識を飛ばした。

しかし、それだと黒いパンツが丸見えだぞ。

「目が回るぞ、キズナ」

「奇遇ね、私もよ」

逆立ちから跳ね上がるようにして着地すると、男の背後に回り込み、腰を抱き締めしめる格好になる。

困惑したのは男の方だ。

こんな密着した体勢から何をしようというのか。そのまま腕で締め上げる気だろうか。

そんな考えが頭に浮かんだのだろう。男は我が身に力を入れ、筋肉を膨張させた。さすがのキズナもこの鋼のような筋肉を締め上げるのは容易ではないだろう。

だが、残念だ。

キズナの狙いはそんなことではないぞ。

馬鹿力は男の身体を強引に持ち上げ、キズナはそのまま身体を反らす。

持ち上げた男の後頭部を地面に叩き付けると、舗装された道路にヒビがはいる。

バックドロップとはなかなか古典的だな。男の首の骨がどうなっているのかなど考えたくもない。男の身体が痙攣しながら弛緩していく。

キズナは反らした身体に切り下ろされる剣から身をよじって逃げるが、避けきれなかった髪が数本持つて行かれる。宙を舞う栗色の髪の毛をいらだたしげに睥睨すると、キズナは背後からタツクルしてきた男によって身動きを封じられる。

「う……ぐっ、セクハラがつ！」

暴れるように男の顔面にひじうちを入れて引きはがすと、その男の股間をブーツで蹴り上げる。何かがつぶれるような鈍い音の後で、男は股間を押さえてうずくまる。

……申し訳ない。どうしてか謝罪の言葉が出、俺はなぜか自分までも痛みを感じてしまう。周囲の男達もそれは同様だったようで、苦い顔をして一瞬だけ時が止まった。

「汚いもの蹴っちゃったっわね」

ニヤリと笑って挑発する。

お前は、男の敵だ。

「にしても、今日はあんまりしゃべらないんじゃない？ リニオ？」

「ふん……雑魚相手では何も言うことがないからな」

空振りした男の腕を持ったまま、関節とは逆の方向に回転するキズナ。

肩と肘、二力所から鈍い音が聞こえた。男の肩が脱臼し、肘はあらぬ方向に曲がってだらりと垂れ下がる。

腕を破壊された男に握力はない。

転がしたナイフを拾い上げ、キズナは振り返りざまに投てきする。綺麗な直線を描いたナイフのきらめきは、後方に控えた男の首筋を抜け、さらにその背後でナイフを投げようとしていた男の眉間に突き立つ。

「免許皆伝ってことね？」

「……残念だが、この分野ではそうかもしれない」

壊れた腕を垂れ下げた男に前蹴りを入れて吹き飛ばすと、その男で作った花道をずかずかと通っていく。

鬼のような強さを誇る少女に男達がたじろぐ。

しかし、そこは男である矜持がそうさせるのか、獲物をぐっと握りしめ、雄叫びと共に向かってくる。

「だが、魔法を加えた戦闘ではそうはいかんぞ。一分一秒でだめ出しをさせてもらおう」

剣の間合いを把握しているのか、スウェーして避けると、空振りした男の懷に潜り込む。

男の胸に触れそうな距離から、両の拳を気合いと同時に繰り出した。

どんな原理か、男の身体は通常の打撃よりも大きな衝撃を受けて、軽々と宙に舞った。胃袋がつぶれ、背骨が背中から飛び出す。

二メートルは浮き上がっただろうか、口から盛大な吐血をして噴水に飛び込んでいった。



噴水に落ちた男は二人。彼らの流した血で噴水が赤く染まっていた。

「何をした？」

「寸頸よ。昔、その道の先生に教わったの」

裏拳で小柄な男を沈めながら答える。

「……お前は魔法学校に通っていたのではなかったのか？」

「ちょっとした火遊びよ」

どうりで魔法の知識がないわけだ。

俺がキズナのポケットで息を吐くと、遠くに隠れているイリスが目に入ってくる。

「おい、キズナ！」

「なによ」

俺が指差す方向を見るキズナが、歯ぎしりをする。

イリスに向かっていく男達が数名。

やはり、目的はイリス。

キズナが派手に立ち回っているおかげで十分注意を引きつけることが出来ていたが、キズナを取り囲んでいる人間以外は、攻撃すら出来ず戦いを見ているしかないのが現状だ。

冷静に物事を見ることが出来る人間がいても不思議ではない。

「鬼のいぬ間に何とやらね！」

敵から奪った鉄パイプで周囲の男達の足を払う。

鉄パイプを頭上でぐるぐると回転させると、そのままの勢いで振り下ろし、転んだ男に頭を鉄パイプで横殴りにした。首をキリンのように伸ばして男が転がっていく。

「リニオ、頼める？」

横様に斬りつけてきた敵の刃を鉄パイプで受け止めて、ぎりぎりとつばぜり合う。

「……かなり嫌なのだな」

イリスが庭の隅へ必死に逃げていくが、男達はイリスを囲い込むような陣形を取っている。

逃げまどうイリス。ついには足をもつれさせ、転んでしまう。青い髪の毛が乱れ、紺碧の瞳がおびえるように震えていた。

「キズナ、なるべく格好良くて強そうな奴を五体満足で気絶させる」

「ふざけっ」

直後に横風にされたサーベルを、頭をかがめてぐり抜ける。

「ないでよっ！ 注文が多いわねっ！」

壁際に追い詰められていくイリスに、俺の心が急く。どうやらイリスは自分の宣言どおり、魔法を使う気はないらしい。

使えば簡単に窮地を脱せるというのに、難儀な美少女だ。

視線を巡らし、襲いかかる男達を吟味するキズナ。

あえて二度、三度と攻撃をかわして、氣にくわなければしたたかに撃退する。

「にしても、いざって言うときに便利な力よね、まさに」

言いかけながら鉄パイプを男のみぞおちに命中させる。

「備えあれば嬉しいなねっ！」

「……備えあれば憂いなしだ、馬鹿者」

鉄パイプを食らった男の黒い眼が、ぐるりとまぶたの裏に隠れる。よだれを垂らしてうつぶせに倒れ込む。

これがお前の選んだ男か？ どれどれ……少々不格好な男だが、贅沢は言っていられない。

にしても、キズナよ……。

「俺はお前の男を見る目を疑うぞ」

「うつさいっ！ さっさとしなさいよ！」

分かった分かった。

ぴくりとも動かない男。あの威力で絶命するはずはないから、上手い具合に気絶したようだ。ふむ……コイツで良いだろう。

「よし……【スワップ】」

俺の意識が引き延ばされる。

自分の体の感覚がなくなっていく。

やがてズームアップするように気絶した男に接近したかと思うと、真つ暗闇に捕らわれる。俺は神経が引き延ばされ、浸透していくのを感じてまぶたを開ける。世界が小さくなったように感じ、俺は男の身体を【スワップ】することに成功したのだと確信する。

早速イリスの元に向かおうと身体に力をみなぎらせると、水を差すように腹部に激痛が走った。

身体をくの字に曲げてもがき苦しむ。

「おうっ……！ く……が……腹部がどうしようもなく痛いぞ……っ！」

精神を交換するということは、当然、交換先の痛みのフィードバックも受けることになる。先程この身体の主である男はキズナから一撃を受けた。その痛みを、俺はまさに味わっているというわけだ。

理不尽な痛み。

……かなり切ない。これだから嫌なのだ。

キズナがよろよろと立ち上がる俺を見る。

「リニオ！」

高速の回し蹴りを放ちながら、キズナが高らかに声を上げた。蹴りを受けた男はきりもみ回転をしながら、石像に背をぶつけて

昏倒する。

「分かってるんでしょうねっ！ アンタがいないと張り合い無いんだからっ！」

ブラウンの瞳が訴えかけてくる。  
アンタ言っな、師匠と呼べ。

「私の胸で目覚めていいのは、一応っ！」

胸ではない。胸ポケットだ。間違えるな。

「一応アンタだけなんだからねっ！」

だから師匠だと言っているだろうが。

キズナが言うところを説明するところだ。俺が男の身体を借りているということは、ハムスターの身体の中には男の精神があるということになる。男が気絶から回復すれば、ハムスターである自分に驚き、自我を崩壊させるだろう。故人が書いた小説のように、朝起きたら虫になっていた……それぐらいのショックがあってもおかしくない。

だから俺はむやみに人と身体を交換しないし、それなりに認めている身体としか【スワップ】しない。

これは偉大なるリニオとしてのプライドだ。

……なにより、ハムスターである愛らしい自分もそこそこ気に入っている。

「ちゃ、ちゃんと……戻ってきなさいよねっ！ この身体に！」

……言われなくとも戻るさ、絶対にな。

血風の中で奮闘するキズナに背を向け、俺はイリスの元へ駆け出す。

## 第二十六話・「俺はロリコンじゃないぞ」

血風の中で奮闘するキズナに背を向け、俺はイリスの元へ駆け出す。

腹部の激痛に堪えながら、【スワップ】した身体のスペックを把握する。

弟子であるキズナの身体を十とするなら、この身体は一にも満たない。

肝心の魔力量は、雀の涙ほどもない。ふむ、本当に雀も泣くぞ。だらしないチュン……などと言いそうだ。いや、雀が語尾にチュンとつけるかは知らないがな。

脳内のイメージに身体が追いつくまでに相当のラグがある。キズナの身体では思うがままに出来たことがこの身体では出来ない。

……これは厄介だ。

イリスに警戒心を与えない極力の配慮で、俺は服の袖を破って顔にぐるぐる巻きにする。

ナイスアイデアとは言わないが、ないよりはマシな程度だろう。覆面の内側から、イリスを確認する。

敵は五人がかりでイリスを包囲しつつあるようだ。壁際に追い詰められ、尻餅をついておびえるイリス。

子羊に襲いかかるハイエナのように、じわりじわりと包囲網を狭めていく。

「お嬢ちゃん、かわいいなあ……お兄さんとちょっと遊ばないかい？」

いかにもな卑しい台詞を吐いて、味方の薄ら笑いを誘う。その声を聞いたイリスはぎゅっと身体を縮めて、いやいやと首を振る。迫り来る悪漢どもに恐れながらも、青い瞳の内では小さい反抗心が灯っていた。

「私には……恋人がいるから」

泰然とした声音。

「そうか……恋人か！ クク……じゃあ、そのロリコンな恋人はきつと助けに来てくれるぞ。そうだなあ、きつと助けに来てくれるに違いないだろうよ。危ないところを助ける……なんせ恋人だもんなあ……いや、お兄さん達も残念だよ。恋人が助けに来るんじゃないかな……でも、危ない目に遭わないと恋人も助けに来られないだろう？」

欠けた歯からよだれがこぼれ落ちる。

無精髭と羞恥心を忘れた下半身がイリスに突きだされる。

「……………ムス太……………」

毅然とした瞳をまぶたの裏に隠し、身に訪れる数秒後の恐怖に堪える準備をする。

「それじゃ、お兄さんと危ない目に遭おうか、お嬢ちゃん……………」

「……………おい」

「なんだア？」



イリスに触れようとした瞬間を咎められ、睨みをきかせてくる。

「悪いが、イリスは俺の女だ」

疑問符を浮かべる男の顔面に、俺の言葉と拳を叩き付ける。

欠けた前歯が折れて、歯茎から血が滴る。折れた歯を手のひらに乗せて愕然とする男の顔面に、問いかける。

「それに俺はロリコンじゃないぞ」

「口……ヒ……が……」

「俺は覆面マン……改めデスマスクだ」

歯がないので発音がままならない。

自己紹介もそこに、さらに顔面に追撃の膝を入れる。歯の次は鼻骨がへし折れる番だった。鼻からの出血を盛大にまき散らせて、仰向けに気を失う。俺はその男の腰からなまくらの剣を抜き放ち、イリスをかばって残り四人となった男達を見すえる。

……少し、頭に血が上っているな。自分としても悪い傾向だ。

「イリス……少し目をつぶっている」

「……ん」

「ふむ……いい子だ」

意外にも、おとなしく従うイリス。疑われたり、拒絶されると思っていたので意外だった。

「おい、覆面野郎！」

「覆面マ……デスマスクだ」

「センスねえんだよ！……ってどう言うつもりだ、テメエ！」

センスがないとは心外だ。

「どう言うつもりも、こう言うつもりだ」

俺は欠けた剣の切っ先をそれぞれの男にゆっくりと見せつける。

「イリスは俺の女だ。俺以外に何人たりとも手を出すことは許さん。手を出すなら、あっちの女にしろ。それならいくらでも許す」

遠くで大立ち回りを演じているキズナを指し示す。

示した先では、キズナが石像に男を吹き飛ばしているところだった。激しい勢いで石像に激突した男の上に、壊れた石像がのしかかってくる。男はキズナを見て汗をしたたらせる。すでに大勢いた敵の大半は地面に沈んでいた。

「手を出すの意味が違」

「よそ見をしているのか？」

振り返った男の肩口に剣を振り下ろす。さすがはなまくらだけのことはある。

剣は胸の半分を切り裂いたところで骨に引っかかって止まってしまい、半ばで折れてしまった。男は自分の身体の一部になってしま

った剣の切っ先をぽかんと見つめながら、吐血する。

訳も分らず俺に救いの手を求めてくる男を無視して、俺は向かってきた残りの三人と戦闘に入る。

不意打ちが聞いたのはここまでだ。あとはこの【スワップ】した身体と折り合いをつけるしかない。

「この裏切り者が！」

この身体ならそう思われても仕方がないな。身体の主には申し訳ないが。

「死ねやッ！」

手に持った折れた剣の鏑を向かってきた男に投げつけ、隙を作ろうとする。男はそれを難なく避けると、ショートソードを小脇に抱えて突進してくる。

直線的な攻撃はスピードがものをいう。

俺は速度とタイミング見極め、闘牛士の要領でそれをひらりとかわす。俺の脇を通り過ぎていった男の後に、白髪の男がトンファーを繰り出してくる。

腹部に走る激痛。キズナがつけた傷だ。それに加えて、なぜか避けたはずのショートソードの傷でもある。

じくじくと血がにじみ、痛みは腹部をはい上がる。

「むう……やはり、イメージと動きに差があるか……」

キズナ、お前は男を見る目以上に、人を見る目がないな。

「ぶつぶつ言ってるんじゃない！」

トンファーが顔面に迫っていた。かろうじて身をよじるが、それで終わりではない。トンファーを取っ手の部分でくると回転させて、突きから殴打へと形態を変える。

なかなかトリッキーだ。

傷ついた腹部一撃をもらってしまい、俺は地面に膝を突く。さらに背中にも攻撃を加えてくる男のトンファーを避けるべく、俺は地面を転がった。颯爽と登場した割りには劣勢を強いられている。

……俺としたことが、格好悪いぞ。

何か無いかと懷をまさぐれば、面白いものに指がぶつかる。俺はそれを素早く手に装着すると、向かってくる白髪の男に指を振るった。

夜の月明かりに、数条の輝きが走る。

きらりきらりと白髪の周りを回ったと思えば、男は突然自分の首を押さえて苦しがる。俺はその光景に唇を歪ませ、五本の指をくいと操作する。トンファーを落としながらもがいた男は、まもなく常闇へと意識を飛ばした。首には真つ赤な一線。

首をつったような絞殺の痕からは、だらだらと血が滴る。

……訂正しよう。キズナにも、意外に見る目があったというわけだな。

まさか【スワップ】した男が鋼系使いだっただけだな。

仲間の不意な死に驚きを隠せない男達。

残念ながら俺がその隙を見逃すほど俺は甘くはないぞ。戦闘馬鹿のキズナほどではないが、俺もそれなりの知識と経験がある。戦い

の機ぐらひは引き寄せられる。

右手に装着したグローブから鋼糸を射出し、鋼糸を泳がせる。見えざる手となった鋼の糸は、素早くショートソードを持った男の手首を取る。

俺が複雑な指示をすると、あっさりと男の手首を切り落とした。

そのままの勢いで、三人目の男の調理にかかる。及び腰となっていた男は破れかぶれで武器を振り回した。

俺の放つ鋼糸をはじき返すが、それも数本止まり。

幾重にもからみつく蜘蛛の糸に、男はなすすべ無く身体を締め付けられる。

「ステーキは好きか？」

武器を落とし、恐怖にうちふるえて失禁する。湯気を立てる液体が異臭を放っていた。

「サイコロステーキと、ハンバーグステーキどちらがいい？」

サイコロ状になった自分と、ミンチになった自分を思い浮かべたのだろう。

どすをきかせると男はころりと失神してしまう。手首を切られ戦意を喪失していた男も、すでに出血多量で血の海に沈んでいる。

俺はそれを見届け、男の身体に巻き付けた鋼糸を解いた。

「目を開けていいぞ」

イリスに向き直る。一応、片は付いたようだ。【スワップ】したこの男が鋼糸使いでなかったらと思うと少し怖い。

知識というのも無駄にため込んでおくものだ。いつどこで役に立

つか分からない。

「……ありがとう……覆面マン改めデスマスク」

立ち上がってぺこりと頭を下げるイリス。顔を上げると、俺の目をのぞき込んでくる。

「……。覆面マン改めデスマスクは……」

全てが名前ではないのだが。

「……ムス太なの？」

いきなりだった。頭に血が上っていたとはいえ、軽率な発言をしてしまったことが悔やまれる。俺はいくらか逡巡しながらも、自分の身体が【スワップ】してあるものだと思い出して、首を振る。  
ごまかせるか……？

「……恋人が助けに来るって……その人が言った」

お前はそこの悪漢の言うことを信じるのか。

「それに……さっき言ったの。……俺の女って」

判断するのはそこなのか。

「……ムス太……なんでしょ？」

つぶらな瞳が純粹な光りを帯びる。

「……そ、そうだ」

俺は、その瞳に負けていた。

第二十七話・「愛しているから……？」

「……でも、ムス太……いつものムス太じゃない」

俺は頭をぽりぽりとかく。

「私……いつもの……ムス太がいい」

柳眉を下げるイリス。

イリス……お前はどんな表情でも美しく映えるのだな。一度、そんなお前のアホ面を拝んでみたいものだ。

「いいか、イリス。これは俺の仮の姿だ」

ハムスターも仮の姿だな。

「お前の力になるために、一時的にこの姿になっているに過ぎないのだ」

「私の力に……？」

「ああ、そうだ」

「一時的に……？」

「ああ、そうだ」

「愛しているから……？」



「ああ、そう　　じゃない、ティアナのためだ」

おい、今、舌打ちしなかったか、イリス。

「リニオ……俺の女だって……言ったの」

顔を伏せる。

「ふむ……確かに。しかし、お前は数多くいる俺の女の中の一人に過ぎないのだ。そこを良く理解しておくことだ」

「……そうなの？」

媚びるような目は止めて欲しい。おねだりをする子犬のような、豊潤なつやを称えた目は、一国の主をも夢中にさせる。さしもの俺とて大ダメージは避けられない。

「……一言付け加えるならば」

だから口が勝手にフォローしてしまう。

「星の数ほどいる俺の女の中でも、イリス、お前はトップテンに入る……ということは言っておこう」

「……キズナは？」

「キズナは下から数えた方が早いぞ」

「ふふっ……」

まるで主人に頼ずりする子犬のように微笑むイリス。

「……嬉しいの」

ランクアップだコノヤロウ！

無表情から微笑みへの移行は、新月から満月への満ち欠けを思わせた。

「ティアナが待っている、行くぞ」

イリスを従わせると、正面玄関へと駆ける。キズナを見れば、残り二人となった敵兵が逃げる様を、腕を組んで眺めているところだった。

「ちゃんと戻ってきたようね」

「当たり前だ」

「……当たり前なの」

「イリスは無事？」

「無事に決まっているだろう」

「……無事に決まっているの」

「……」

「おい、真似をするな」

「……うん、真似なの」

「……。ふん……」

俺、イリス。

イリス、俺。

俺、イリス。

キズナの視線が往復する。

「リニオ、アンタばらしたのね」

「む……ぐ……。……やむを得なかったのだ」

「やむを得、ね……」

キズナの疑うような視線に堪えられなくなり、俺は目をそらす。

そこは一面の血の海。

五十人はいた敵は、最後の二人を残し全て地に伏している。真っ白な石像は血しぶきに染められ、前衛的なアートを思わせた。噴水の水は赤々として、潤いと言うよりはぬめりに満たされている。

死屍累々とした庭の風景は、地獄絵図。手、足、胴体、首に内蔵……死体と肢体が転がる中で、返り血を浴びて薄ら笑いを浮かべているキズナは、まさに虐殺の赤い天使。

「……悪趣味な……光景」

「ランクダウンだ、キズナ」

「何を言ってるの?」

首をひねって疑問符をひねり出す。

「ま、どうでもいいわ。それよりリニオ、身体は無事よ。まだ目を覚ましてはいないみたい」

キズナの胸ポケットではハムスターが眠っている。この身体の持主はまだ目を覚ましていないらしい。

「早く戻りなさいよ」

「……ふむ」

腕を組んでしばしの熟考。

「俺に考えがある。耳を貸せ」

正面玄関の強大な扉を前にして、キズナとイリスを手招く。これから突入しようという直前でミーティングを開く。一分間の短いミーティングの後、キズナが一言で締めくくった。

「なんか面倒ね」

「……そんなこと……ないの」

「我慢しろキズナ、これが一番手っ取り早いのだ」

深呼吸を経て、俺はイリスに向き直った。

「イリス、許せよ」

イリスのメイド服をつかむと、胸元を強引に引きちぎる。露わになった胸は、薄手のキャミソールに覆われていた。真っ白なキャミソールは内側がかすかに透けていて、わずかに押し上げるふくらみの頂点がかすかに判別できた。肩まで裂けてしまったメイド服が、なんとも言えない。

まるでいかがわしい事件に巻き込まれてしまった事後のようだ。

……イリス、喜べ。お前は相当にいい女だぞ。

「……その行為に意味があるとは、到底思えないわ」

俺はキズナの拳が震えているのを無視して、即座に玄関の扉を蹴り開ける。

「助けてくれ！」

蹴破った先には、エントランスホール。

中央に大きなホール、その奥には幅広な廊下があり、その左右から円を描きながら二階への階段が続いている。磨き上げられた大理石の床が、きらびやかに光沢を放つ。天井にある巨大なシャンデリアは威容を誇っており、階段を上がる度に、珍品、骨董品などが飾られていた。古今東西のあらゆる武器の数々も壁に飾られている。何とも一貫性のない趣向。

その中央の廊下に、奴がいた。

筋肉に固められた巨躯が、スーツの中で苦しそうだ。帯剣してい

るが、その刀身は先日の戦いで失っているので、刀の柄だけが不自然に腰元にぶら下がっている。太い腕を組み、軽く足を広げて大地に根を張る。胸を張った威圧感は、まるで仁王像のようだ。部下は従えていない。

ただひたすらに　ヘイデンはまぶたを閉ざしていた。  
待ち人いまだ来ず、そんな声が聞こえてきそうだった。

「おい！　女を捕まえたぞ！　俺はコイツをペラン様のところへ連れて行く！　だから、アイツを何とかしてくれっ！」

俺は息を切らした振りをして、イリスを乱暴に引きずり回した。手首を握りながら、見せつけるようにヘイデンの前に投げ出す。足をもつれさせてイリスが転ぶのを心苦しく思いながらも、俺は手を抜いたりしなかった。

「ペラン殿はこの先だ。早々に行くがいい。きっと喜ばれるだろう」  
微動だにせず、ヘイデンは告げた。

「さっさとしろ、馬鹿女！　早く来るんだ！」

ぐいぐいとイリスの手を引っ張って、中央の廊下を行こうとする。イリスはしつこく転びながら抵抗するふりをした。俺はそれをさらに引っ張ろうとする。

ただでさえボロのメイド服だ。玄関口で破いた箇所からさらに服が破れ、布の破れる音が広いエントランスホールに響く。  
演出としてちょっと大げさだったろうか。

「……………茶番だな」

ヘイデンが笑ったような気がした。

「茶番じゃないわ、本番よ」

遅れて玄関からエントランスホールへと飛び込んだキズナが、会話の時間も与えずヘイデンに斬りかかった。

ヒップバックに手をつ込み、使い慣れた愛刀を握りしめる。

ヘイデンのまぶたがゆっくりと持ち上がった。

眼前まで迫るキズナの加速を目にしながら、それでもゆっくりと帯剣した刀に手をかける。

刀と刀。

接近と斬撃。

激突と鏑迫り合い。

【鵲鴿】と【朱雀】。

それら二つの魔法刀が、同時に刀身を顕現する。

青い魔法文字がキズナの周囲を躍り、二つに結った髪の毛を蒼く燃えるように波打たせる。

白刃を出現させたヘイデンの周りも白い魔法文字が泳ぎ、蒼と白の文字は互いに相殺しあう。

「ぶしつけたな！ 【恩寵者】キズナ！」

「戦いにヨーイドンなんていらないでしょ？」

ホールの真ん中で切り結ぶ。

「確かに。生きることこそが戦い、戦うことこそが生きること！」

ヘイデンの咆哮が、エントランスを震わせる。

ヘイデンが罅迫り合いからキズナの剣戟をはじめた時、俺とキズナの視線が交錯する。キズナの顔は誇らしげで、自信に満ちあふれていた。

……分かっている、ティアナは俺に任せろ。

俺は振り返らない。

キズナをその場に任せて中央廊下を進むだけだ。



## 第二十八話・「ホント、面倒な女」

運の良いことにペランのいる場所はすぐに分かった。

表札に、ペランの部屋、と書いてあったわけでもないし、特別大きな扉があつたわけでもない。扉の前を警護しているヘイデンの部下がいたからだ。

扉の前の二人は、俺の姿を目に留めると、その汚れた服装と覆面に訝しげに顔をしかめるが、隣に連れているイリスを見つけると、その意味を解いたらしい。

「ペラン様が待ちかねているぞ、来い【恩寵者】イリス」

俺とイリスを引き離そうとする。おっと、それでは困る。

「ちよい待ち、直接ペラン様に渡したいんだけどな」

軽い感じで手を広げる。

「貴様らには相応の報酬を払っているだろう。あまり調子に乗らないことだ」

「へへ……そこを何とか頼むよ」

拝むように手を合わせて目をつぶる。

慣れない仕草に背中がむずがゆくなる。

中身が違えば人のしぐさにも変化が生じる。俺ぐらいになると高貴なオーラを自動的に纏ってしまうからな、それを隠すためにわざと軽薄な振りをしないといけないわけだ。

「少し待っている」

いらだたしげに扉の内側に消えるヘイデンの部下。数十秒後、扉の内側から入室の音がかる。

「ペラン様の寛大な処置に感謝するんだな。……入れ」

「ありがてえ、ありがてえ」

盗つ人猛々しいという言葉は、こういうときに使っても良いのだろうか。

俺は粗野な笑いを浮かべるよう苦心しながら、扉の中に入ろうとする。

「待て」

後ろから突き刺さるような声がした。

……バレたか？

「覆面を取れ」

「おっと、こりやけねえ、癖なもんでね……」

巻き付けた布を取っていく。もともと俺の身体ではない。顔が割れたところで何の不都合もないのだ。

……まあ、この身体の主には迷惑がかかるかも知れないが。

瞬間、イリスが俺を不安そうにみ上げているのに気がつく。

俺はヘイデンの部下達に分からないようにイリスの耳元に口を近

付け、大丈夫だ、と元気づけてやった。

「こんばんはですね、【恩寵者】イリス。まさか来ていただけないと思いませんでした」

黒革製の高級そうなイスに、ペランは微笑みながら足を組んで深く腰掛けていた。

整った顔立ちは、相変わらず貴族の王子と言った風体。スーツを着込んでいるが上着とネクタイはなく、シャツは着崩れしていて、第三ボタンまで開襟されていた。まるで何か運動をしていて、慌て着込んだような……。

「本当はもっと早く、かつ穩便に事を進めたかったのですが……。ですから、謝らせてください。手荒なまねをしてしまったこと、家を燃やしてしまったこと、大変申し訳ありませんでした」

「そんなことは……いい。……姉さんを返して」

イリスの平板な言葉が、ペランの笑みをよりいっそう深いものにした。

「いいですよ」

意外にもペランは軽く応じた。当然の如く取引にでも発展するかと思えたが。ティアナの無事さえ確認できれば、残りは行動するだけだ。

俺は周囲の状況を確認する。部下は二人。一人は【旅人の止まり木】で生き延びた男。もう一人は新顔だが……考えるまでもなく魔法使いであろう。

幸いにして二人とも鋼系の攻撃範囲内にいる。

隙を見て鋼系を飛ばすことさえ出来れば、一瞬で首を切り飛ばせる自信はある。速度は単詠唱魔法には及ばないとしても、それを補うだけの隙とチャンスをたぐり寄せるのが、偉大なるリニオたる俺の手腕の見せ所というやつだろう。

顔は動かさず、眼球の動きだけで見極める。

広い間取りの部屋には、アンティークな調度品も多く、棚には年代物ワインやウイスキー、輸入が制限されている倭国酒まである。足首にまで及びそうなふかふかの絨毯と、テーブルに置かれた様々な書類。

窓の代わりにテラスがあり、月夜が窓の向こうに浮かんでいた。満月はまるで汚されるように黒い雲に覆われていく。

そして、最奥には天蓋付きのベッドが一つ。

その中で何かが蠢くのが見える。うつすらと浮かび上がるシルエットで、それが誰だか分かった。

あの大きな胸のシルエットは……間違いない、ティアナだ。

……よし、あとは鋼系を繰り出すチャンスだけ。

ポケットにつっこんだ手でグローブの調子を確認する。

いつでもいける。慌てるなりニオ。慌てるな。

お前は偉大なる男だ。出来ないことなどない。落ち付け、俺。

「本当に……姉さんを……返してくれるの……？」

信じられないとばかりに言葉を反芻するイリス。

いいぞイリス、奴の意識をそらすのだ。

「ええ、もちろんですよ」

笑顔を浮かべるペラン。

隙だらけだ。あとは部下のみ。

「ただし」

ペランが視線を別方向へ。二人の部下も無意識のうちにそれを追う。

俺を見ている人間はいない。

千載一遇。今しかない。

ポケットから手を抜き出そうとする。

「ティアナがうんと言え、さすがね」

……なんだと？

俺は手を止めてしまっていた。

「ティアナ、あなたの妹が来ましたよ」

天蓋付きのベッドに声をかける。

衣擦れの音が聞こえ、シルエットがのそと動き出す。

天蓋をぬって現れたのは、あられもない姿をしたティアナだった。シーツを適当に身体に纏わせ、こぼれんばかりの胸元を手で押さえている。ポニーテールだった髪の毛は、留めるものを失ってだらりと下ろされている。

天蓋をかき分けるときにちらりと見えたベッドの上には、脱ぎ捨

てたボロのメイド服と髪留め、巨大なカップ数を誇るブラ。

「……姉さんに……なんて……ことをしたの……！」

憤慨を込めた視線でペランを見るイリス。

ペランはそれになぜか困ったように肩をすくめていた。

「だから言っただじゃない、イリスは来るって。私の勝ちよ、ペラン」

胸元を押さえたまま軽い足取りでペランに近付き、ティアナは耳元に唇を寄せた。

彼女の言葉には、のほほんとした雰囲気も、語尾を伸ばす癖のある声もなかった。かわりに自信と矜持をあわせもった強気の声が、耳に不快なほどに入り込んでくる。

「ははは、参りましたね」

「これでやっと解放されるわけね……いい加減疲れちゃったわ」

「今までありがとうございます。これからは思う存分羽を伸ばしてください」

「もちろんそうさせてもらうつもりよ。いい加減、ボロい服とか、他人の世話とか、ガキの面倒なんてこりごりなの。肩凝っちゃって仕方がないわ」

「おやおや、それはこれはあなたの胸のせいではないのかな」

ペランは微笑んだままティアナのくびれた腰元を引き寄せる。

「……んっ……もう……セクハラね。さつきしたばかりじゃない」

……そうか。これは意外だったな。すでに先約がいたとは。

「姉さん……どうして……」

「どうしても何も、初めからそうだったわよ。わたしはペランに雇われているの……違うわね、今は恋人なのかしら？」

「おや、大胆発言だね、ティアナ」

ペランのあごのラインを細い指でなぞるティアナ。  
妖艶で、それでいて手慣れた仕草のように見える。

さすがに……女は怖いな。裏に幾つもの顔を持っている。単純明快なキズナとは大違いだ。

「ホント、面倒な女。もっと唯々諸々と私に従っていれば、手荒なことはしなかったのに。無愛想で、何考えているのか分からないんだから。根回しにも顔色一つ変えないんだもの、本当に血が通っているの？ イリス」

棘のある口調で、イリスを突き刺す。

「おじいさんとおばあさんは……」

「そうね、今だから真実を教えてあげる。仕事に邪魔だから始末したわ。もちろん、内々にね。ペランのことを話したら反対するんだもの……馬鹿な夫婦。話した時ね、二人で意外そうな顔をしていたわよ。まさか私の口からそんなことを聞かされるなんて思っても見なかった、なんて顔」

「恐ろしい人だね、君は」

そんなペランの顔に頼寄せて、ティアナは悦に入った声を出す。

「今回は良い機会だったわ。キズナとか言う女がこの町に来てるっていう情報があつて、利用させてもらったの。色々他の町でもやらかしているようだしね、その女」

テーブルの上の書類をめくると、俺達の方に投げてよこす。クリップに挟まれていたキズナの間抜け面の写真が、イリスの足下にふわりと舞い降りる。

書類には、なにやらかつて訪れた町での記録がびっしりと書き込まれているようだった。

「案の定、私の出した条件に、疑いなく飛びついたわ。バカな女。今回の事件の責任を全部取ることになるとも知らずにさ。シナリオとしては、旅先で問題ばかり起こす旅人が宿を燃やし、住人を殺害したあげく、この屋敷に強盗に入った。そんなところかしら」

「そんなの……誰も……信じない」

うつむくイリスの声が震えている。

「ふふ……信じるわよ。だって、キズナは実際に来たわ。気にするなと言えば気になる……それが人間でしょ？ 私の演技が一流である証拠ね。思わせぶりの演技にころつと騙されてくれちゃって」

残念ながら、ティアナの言うとおりだ。

大衆とはいつの世も曖昧で騙されやすく、感情的なものだ。たと



え嘘でも、大衆がそれを信じ込んでしまえば、それが真実となる。  
おうおうにして現実などはそんなものだ。

どうやら、人の見る目がなかったのはキズナだけではないらしい。  
悔しいが、私も騙されてしまったわけだ。

「……………」

今だから言えるが、確かに不自然な点はあった。

ボロ屋で、客も来ないのに、なぜか食費だけが尽きない。キズナ  
が毎日大量に食べても、次々に豪華な食事が出てきた。

イリスが身に纏っていた小綺麗な下着なども、おそらくはティア  
ナの言う根回しの一種なのだろう。お店の人にもらったとイリスは  
言ったが、その店の人もおそらくはペランの手が回っていたに違  
いない。

キズナならば物欲で簡単に釣られるが、イリスはそうではないか  
らな。

「【恩寵者】 イリス、私はこう見えて寛大です。悪いようには決し  
てしません。ここは見て分かるとおり清潔ですし、お金だってあり  
ます、あなたはここで自由に暮らしていけるのですよ？ 【恩寵者】  
として私にに遣えるだけでいいのです」

「あら、妬けちゃっわ」

うふふ、と笑うティアナ。

そうなのだ……俺が感じた違和感は、本当はこれだったのだ。強  
い女……そう勘違いした自分自身が少々腹立たい。

俺達が燃える宿屋の前でかわした決意も、イリスの叫びも、全て意味のないこと。

その頃、このティアナという女は、のうのうとベッドの上でペラッと快樂にふけていたわけだ。

滑稽だ。あまりにも滑稽で馬鹿馬鹿しすぎる。

「……………寂し……………かったの」

イリスの頬を透明なものが伝っていく。

「……………姉さんが……………何かを隠していたことは……………知っていたの……………」

大粒の雫だった。

お前がティアナになかなか心を開こうとしなかったのはそういうわけか。そう言えばティアナもそんなことをキズナに相談していたな。

「でも……………それでも……………姉さんは姉さん……………だから……………」

「あら、私、好かれていたの？ あはは、気がつかなかったわ。だったらそう言いなさいよ、面倒なことしちゃったじゃない」

落ちそうになるシーツをたぐり寄せてせせら笑う。

今はその大きな胸も、悪性の固まりに見える。

ランクダウンだ、ティアナ。底なしにな。

「……………ひとりぼっちだった私の……………唯一の絆だから……………」

それが寂しかったイリスをつないだ。

性根が悪くとも長年共に過ごしてきた生活。腐れ縁は、たとえ腐っていても縁なのだ。イリスにとってその生活は、ひとりぼっちだった寂しさを埋めてくれる唯一のつながりだったのだ。

「……誰にも……いなくなつて欲しくなかったの……」

頬を流れ落ちる透き通った涙は、頬を流れて顎の先へ。

「でも………分かったの」

顎の先に溜まった大きな涙の雫が、重力に堪えられなくなる。

「もう……いいの……」

落涙。

「もう……疲れたの……」

一滴がぽとりと落ちて、弾けた。

「………つながりがなければ……寂しさも生まれないの……！」

背筋が凍るような魔力の胎動が、弾けた涙から溢れ出る。

あのとときと同じだ。

屋根の上でイリスが抱えていたもの。必死に我慢してきたもの。その全てがイリスの中から溢れ出ようとしている。ぽとりぽとりと次々に涙は落ち、直後、世界を揺るがすような振動が発生する。屋敷はきしみ、柵からワインが落ちて割れる。地響きが鼓膜を痛めつ

け、立っていることすら困難となる。

「な、何事ですか!？」

慌てるペランと部下達。

ティアナはペランのイスにしがみついたまま声も出せないでいるようだ。

俺はイリスに手を伸ばそうとするが、その手がイリスの肩に届く前に震度がさらに上がった。

突き上げるような揺れ。

窓が割れる。破片が散乱する。そして、テラスの向こう、広がる裏庭の真ん中に地割れが発生した。舗装された道が石畳ごと吹き飛び、宙を舞う。植えられた木が根こそぎ弾き飛ばされ、石像を押しつぶす。

違う。これは地割れではない。噴火に近いものだ。

何かが起きようとしている。

揺れる視界で、思考がままならない。石畳の一部が窓を突き破って、ペランの部下を直撃した。ペランの部下は単詠唱魔法を唱えて防御しようとするが間に合わず、石をまともに受けて顔をくぼませる。飛び散る血痕にティアナが悲鳴を上げた。

イリスは涙を流し続ける。

吹き荒ぶ魔力の奔流は、部屋中を駆けめぐり、やがて噴火の穴に吸い込まれていく。魔力の爆発と、収束。そこから浮かび上がってくる存在があった。

この世のものとは思えない巨大な身体。そこからほとばしる禍々しい魔力は、畏怖さえ覚える。蛇のような身体は、青白く燃えさかる魔力に覆われ、何者をも寄せ付けない荘厳さに溢れていた。深遠なる眼光がイリスを目にして細められる。

愛おしそうに見つめるその瞳は類い希なる愛情に彩られているように見えた。

青白く燃える長い身体が、地面の割れ目から飛び出してくる。

龍。

俺の頭にはその言葉が浮かんでいた。刹那、龍の周りに幾重にも魔法文字が飛び交う。間違いない。あれは魔法だ。それもとてつもなく強力な。

「イリス！」

発動されたのは、同時に五つの無詠唱魔法。ただの一つの詠唱も必要としない最先端の魔法だ。それを同時に五つ。冗談ではない。

はっきり言おう、キズナの身体を借りても俺には出来ない芸当だ。せいぜい二つ同時が限界。

悪寒がして見回せば、部屋の全てに高密度の業火が発生するところだった。逃げる暇すらなく燃え上がるペランの部下。消し炭すら残らないだろう。

なりふり構ってなどいらなかった。

イリスを抱えて逃げようとする。だが、イリスの身体はすでにそこにはない。揺れる視界の中で必死に探せば、イリスは龍の袂にいる。

イリスは龍の中にゆつくりと吸い込まれていく。  
表情はない。涙だけが美しく目尻にきらめいていた。

「まさかこの目で青龍を拝めるとはな……！」

ただ膨大な魔力を持つだけの【恩寵者】ではない【寵愛者】……  
精霊に愛されし者。世界に四人しかいない希有な人間。

精霊、四神に対して一人ずついるとされる、まさに伝説の存在。

さしずめ、愛しの【寵愛者】の涙に呼ばれて精霊が助けに来たところか。

蒸発する汗。

身体が恐怖に震えていた。

## 第二十九話・「キズナ……俺は限界のようだ」

俺は震える足に拳を打ち付け叱咤する。

動かなければ確実に灰になる。精霊、青龍は無差別に無詠唱魔法を繰り出し続け、ペランの屋敷は瞬く間に炎に覆われた。

炎はまるで餌に群がる肉食獣の如く、屋敷に真っ赤な牙を突き立て続ける。

崩れ落ちる天井。

割れる窓。

吹き飛ぶ壁。

倒れる柱。

ぐずぐずしているとあつと言う間に瓦礫の下だ。

俺は崩れてきた天井と炎に鋼糸を走らせ、直撃を免れる。この身体で出来る最大限で、何とか命をこの世に繋ぎ止める。

見れば、ペランとティアナが地面に倒れ伏している。二人とも苦しそうに身体をかきむしっていた。

炎に焼かれているわけでも、煙にまかれているわけでもないのに、  
どういうわけか。

俺が流れる汗を飛び散らせながら、思考に気を取られそうになったとき、それは襲ってきた。

身体の中から生命が抜かれていく感覚。

かわりに冷徹な何かが体中に浸透していつて五感を消失させる、  
いかんともしがたい感覚。

死の匂いがした気がした。

俺は足かせでもされたように鈍重になる身体に足を引っ張られて、崩れてきた破片に頭を打ち付けてもんどり打つ。額から流れ落ちる血液で世界は赤に染まった。なおも身体は何かを失い続ける。体温

さえも吸い取られていくような感じがした。

「……こ、これは……魔力を……吸い取っているのか……？」

広大な裏庭に火柱を打ち立てる神々しい精霊をにらみ付ける。

青龍は長大な身をつねらせて、手当たり次第に無詠唱魔法をほとばしらせている。

尾は地面を裂き、叫びは大地を震わせ、波動は瓦礫を吹き飛ばした。

大小様々な魔法文字が、幾つもの輪になって、まるで竜巻のように滞空している。

「そうか、契約を……利用しているのか……っ！」

魔法文字とは、古代精霊文字に他ならない。

人が己の中にある魔力を形にして放出するために、精霊と契約し、その手段である古代精霊文字を授かった。

魔力が魔法文字に変換され、それからやつと魔法として体现できるのはそのためだ。

ならば逆に、精霊はその契約を破棄し、魔法文字から人の魔力を吸い出すことも可能なはずなのだ。青龍の周りを延々と回り続ける魔法文字は、おそらく人々から吸い上げた魔力なのだろう。

俺も例外ではない。

この身体の持主に魔法の素養はない。すでに虫の息となったペランとティアナ同様、魔力を吸い尽くされミイラにでもなってしまうのが関の山だ。

「やってくれるな……っ！」



必死の形相で匍匐前進する。

もはや雀の涙ほどの魔力もない。死が足下からはい上がってくる。真っ黒な蟻走感をともなつて、もぞもぞもぞと半身を奪っていく。

青龍はさらなる無詠唱魔法を唱えた。

同時に十を数えただろうか。もはやその文字列から発動した魔法を数えることさえ出来ない。

霞む視界。その先にあるのは冷たい世界。

死。

紺碧の炎が俺を容赦なく包み込む。ペランとティアナはすでに真っ青に燃えていた。断末魔の悲鳴もない。干からびたミイラのように眼窩をくぼませ、必死に手を伸ばしていた。

だが、生の最後、その手が互いにつながれていたことが、なぜか俺の目に焼き付いた。

痛みが俺に断末魔を要求する。

俺の手が焼けてただれていた。足がくすぶり、内側の真っ赤な肉と骨が見えた。

血液が蒸発する。髪の毛の焼ける匂いがした。

「……すまないキズナ……俺は限界のようだ」

せめてもの仕返しに、青龍をにらみ付けてやった。

「……【スワップ】……解除……！」

意識が途絶える寸前。

俺は身体の持主に謝罪した。燃える手で十字を切り、せめてもの冥福を祈る。視界が収縮し、俺は身体からギリギリのところまで抜け出した。

意識が廊下を走る。

壁を突き抜け、部屋を抜け、立ち上る炎を突っ切り、火の粉を横切った。

時間を止めるほどの速度でもとの身体に戻る。  
世界が拡大し、身体の隅々から痛みが消える。

だが、目を開けても、あるのは暗闇だった。

俺は気が動転しかけて、自分が死んでしまったのではないかと焦る。まもなく杞憂と悟るのだが。

「く……苦しいぞ」

どうやら俺はポケットの中で何かに押しつぶされているようだ。  
酸素不足で気を失いかけながらも、何とか力の限りでポケットから抜けだし、暗闇の正体を探ろうとする。

思い切り酸素をむさぼる。

ふむ……生きているって素晴らしいな。

「むっ………？」

冷静さを取り戻した俺の目に映ったのは、満身創痍でうつぶせに倒れているキズナだった。

刀身のない【鵲鴉】を握りしめたまま、だらしなく横たわっている。血がエントランスホールを赤く染め、今もその領土を広げている。所々焦げた対魔法制服は、スカートも上着も燃え、あるいは破れていて、まるでボロ雑巾のようだ。キズナお気に入り黒の下着も破れた制服の隙間から見えてしまっている。

おいおい、やられすぎではないのか、キズナ。

俺はぴくりとも動かないキズナの頭を足蹴にする。

「おい、死んだふりはよせ」

キズナの指がぴくりと動く。

「……なによ……戻ったの……？」

地面にこすりつけていた顔をわずかに傾け、俺の姿を瞳に納めるキズナ。

「……イリス……は？ ティアナは……どうしたのよ？」

強気の名残がある声。

俺はわずかに頭を下げると、ティアナが実は敵だったこと、イリスが【寵愛者】で、今は精霊と共にいること、そのイリスの暴走を止めなければいけないことを告げる。馬鹿なキズナでも理解しやすいように要約して手短かに話してやる。

「そう……散々ね、リニオ」

「お前もな、キズナ」

師弟でため息をつき、師弟でわずかに笑いあう。

……やれやれだ。

毎回新しい町を訪れる度にこんな目にばかり遭う。

いい加減にしろ、馬鹿弟子。

お前が動けば半分の確率で事件を起こし、もう半分の確率で事件に巻き込まれるのだぞ。

「……よい……しょつと」

ふらふらしながら立ち上がろうとする。生ける屍のように足下がおぼつかない。

「まだ立ち上がるか、【恩寵者】キズナよ」

腕を組んでふんぞり返っているヘイデンがいた。炎の広がるエントランスホールを中心であっても、その身体は雄々しく猛々しい。キズナほどではないが、身体のそこかしこに切り傷があり、血を足下に滴らせていた。だが、その口調や立ち居振る舞いには、痛みや出血など微塵も感じさせない。

「……ちよつと……休んでいただけよ……あと五分つてね」

（お前は朝に弱い学生か）

俺は頭を痛める振りをする。

「単詠唱魔法すら使えぬお前が、ここまで私と渡り合ったのだ。若くしてそこまで至った自分の才能を誇るのだな」

やはり、俺の講義は身に付かなかったようだな。  
分かっていたようだ……少し悲しい。

「この私が断言しよう……お前は天才だ【恩寵者】キズナよ」

「……知ってるわ」

頬を伝う血液を乱暴に袖で拭くと、フェイスペイントのような赤いグラデーションが出来上がる。

ほ、ほう……お前は自分が天才であるという自覚があったのか。  
この私を差し置いてよくも言つてのけたものだ、未熟者め。

「そんなことより、その上から目線……ムカツクわ」

（褒められて遠慮しないお前もムカツクがな）

キズナは足の裏を見せつけて俺を踏みつぶそうとする。

（貴様……師匠に対して手をあげようというのか？）

「あつそ……でもあけているのは足よ」

（貧乳のくせに生意気だぞ）

「貧乳はステータスよ、基本的人権の尊重よ」

（ついに開き直ったなっ！）

ああいえばこういう女め。達者なのが口だけではなく、胸もだよいのだな。

キズナは眉根をぴくぴくさせる俺に満足したのか、あげている足を下ろすと、俺に手をさしのべてくる。

「そこにいると踏みつぶすわよ、ほら……アンタの指定席、来なさいよ」

腕を伝う血で、手のひらは赤い。

……まったく強がりだけは上手いな、お前は。少しだけ……ランクアップさせてやる。

俺は血に濡れるのも構わずキズナの胸ポケットの中へ。

何だろうな……ここからの景色、とても安心する。

「見られてないと、なんだか調子でないのよ」

（嫌な性癖だな）

「そうね、アンタがしたのよ、こんな私にね」

（……ふん、責任は取らんぞ。俺には俺を待ったくさんの美女達がいるからな）

「はいはい、脳内脳内」

（違うもん！）

「いきなり口調変えるんじゃないわよ……気持ち悪いわね」

（……溢れんばかりの可愛らしさをアピールしてみたぞ）

「私にアピールされても困るんだけど」

（そうだった、貧乳だしな）

「……クロス」

俺達が交わす会話に、いつものペースが戻り始める。

「【恩寵者】よ……お主は先程から独り言が多いな。それと」

巨軀をもてあます男の眼光が、俺をとらえる。

「ちよろちよると目障りなドブネズミだ。私はドブネズミが一番嫌いなのだ」

「私も同感」

「ヒドイっ!」

あまりのショックに、思わずわめき散らす。

「……でも、これドブネズミじゃないから。ハムスターだから」

魔力をみなぎらせ、【鵲鳩】の刀身が蘇る。

何度でも、何回でも。

キズナの心が折れぬ限り。

「よく聞きなさい!」

【鵲鴿】でヘイデンを指し示す。

「こいつはね……こいつは……世界で一番可愛いハムスターなの。私の自慢のペット。だから、今のは少しむっと来たわ。こいつを馬鹿にしているのは飼い主である私だけ。他の誰にも馬鹿にされたくない。ていうか、馬鹿になんてさせない」

「キズナ……」

何だろうな、言い方は雑だがほのかに嬉しいぞ。  
満身創痍はかわらない。流れ出た血は戻らない。  
それでもとびきりの強がりで炯眼を燃え上がらせる。

「……頭が馬鹿にでもなったか？　だが、病院に行く必要はない。馬鹿は死ななければ治らぬからな。……頃合いも頃合いだ、終わりにしてやろう」

燃えさかるエントランスホールをぐるりと見回し、組んでいた腕を下ろす。

右手には魔法刀【朱雀】がある。

「言つて……くれるじゃない！」

体勢を落として突きの姿勢に構えたキズナが、言葉と同時に飛び出した。



### 第三十話・「口は達者なようだな……！」

突き出された切っ先は、紫電一閃。

速い。

それだけがわずかな時間で俺が出せる感想だった。捕らえたかに見えたキズナの一撃は、ヘイデンの脇をかすめたに止まる。スーツの切れ端がキズナの眼前をたゆたう。

【鵲鴿】に付着したヘイデンの血が刀身の熱によって蒸発していた。ヘイデンは齒を噛みしめてうなると、短く言葉を発する。

「風障！」

反転して横に薙ごうとするキズナの【鵲鴿】が、猛烈な風の壁によってその速度を落とす。

目を開けていられないほどの暴風がヘイデンの周囲に巻き起こり、キズナはなすすべなく体重を軽々と宙に舞いあげられた。

ヘイデンの単詠唱魔法が。

キズナはエントランスホールの天井に吊られている巨大なシャンデリアにぶら下がると、ためらいもなく吊り金具を切り落とす。シャンデリアを蹴って重力加速度に手心を加えてやれば、シャンデリアは最高の圧搾機に変貌した。

キズナは切り落として天井に残った金具部分に捕まるのを止めて、すぐさま天井を蹴る。先行したシャンデリアを盾する格好で、ヘイデンに襲いかかった。

【鵲鴿】が獲物を求めて刀身を青白く輝かせる。

キズナの魔力が変換された魔法文字が、シャンデリアの輝きと共に

にきらきらと輝く。

「疾風！」

ヘイデンの高声がキズナの舌打ちを引き出す。

目に見えない刃がシャンデリアを幾千のガラス片に分解していく。正面から襲ってくる刃は真空。

自然現象で言うところのかまいたちにも似た波動は、シャンデリアをもともせず、キズナの身体を切り刻んだ。動物的な直感で空中で身をひねるが、避けきれぬわけがない。

ガラスの芥子粒に混じって、血風が舞う。

キズナが体勢を崩して地面に叩き付けられそうになるところに、ヘイデンの追撃が飛び込んでくる。右手に握りしめた魔法刀が目覚めた。

【朱雀】、ヘイデンはそう言っていた。

白刃がキズナの太もを切り裂き、キズナは構わずにバックステップする。太ももからにじむ血同様に、悔しさをにじませるキズナ。切られた太ももはもう少しで骨に達するところだった。

そうなたら機動力は失われる。類い希なる反射神経が、かろうじてキズナの生命を繋ぎ止める。ヘイデンは一振りで【朱雀】の刀身を消失させると、今度は素手でキズナを追撃してくる。

……魔力の節約のつもりか。

巨大な右の拳がキズナの顔面を狙ってくる。キズナは水の動きでゆらりとこぶしを回避すると、ヘイデンの頬にカウンターパンチをお見舞いした。クリーンヒットした拳だったが、ヘイデンは拳を受

けたままニヤリと笑ってみせる。

ヘイデンの左手に握られているのは【朱雀】だ。

いつの間に右手から左手に持ち替えたのかを思い出そうにも、視界に映らなかったものは思い出せない。

「来るぞ、キズナ！」

「……っ！」

胸ポケットで叫ぶ俺の声に、キズナが応える。伸びてくる真っ白な刃を青い刃が受け止めた。

漏電した電流のような音をたてて二振りの魔法刀が鏝迫り合うが、それも一瞬。キズナは力の押し合いへし合いには付き合わない。相手の力を流して、零距离から突きを繰り出す。

吸い込まれるようにしてヘイデンの胸元に入り込んでいく。

だが、その必殺でさえ、魔法によって阻まれる。

「障風！ 烈風！」

キズナの刃が胸板まで数センチと言ったところで急停止する。風圧によって動きを封じられてしまい、身動きが取れなくなる。

慌てて間合いを取るうとするが、遅い。

ヘイデンの纏う魔法文字がキズナを覆い尽くす。

むむ……かなりの魔力を込めたな。

「ふざけ」

罵声を浴びせようとするキズナが風に押しつぶされる。屋敷を覆う炎を吹き消すどころか、屋敷を破壊しかねないほどの風速は、も

はや暴風域だ。

きりもみ回転しながら、キズナは階段に叩き付けられ、ごろごろと転がり落ちてくる。

立ち上がるうとする身体は、きしみをあげ、動かせば何かが壊れる音がする。

満身創痍の上にこれだけ身体を酷使すれば体は悲鳴を上げる。

崖っぷちで何とか止まっていたられるのは、キズナの負けん気と【恩寵者】故の魔力の補助があつてこそ。

汗を蒸発させるほど火照ったキズナの身体から湯気が立ち上る。

「やはり……天才か」

ヘイデンがゆらりとよろめく。

時間遅れではだければスーツの内側には、深い切り傷の痕。

キズナが吹き飛ばされるわずかな時の中。魔法が消失する一瞬の隙を見逃さず、キズナは【鵲鳩】を振り抜いていたのだ。

かなり苦し紛れではあったが……。

「……肉を切らせて骨を断つ……か、よくもやるものだ」

「次は骨だけじゃ済まさないわ」

（……その前に切らせる肉がキズナに残っていればいいのだがな）

俺の皮肉への解答はなされず、キズナはヘイデンに【鵲鳩】を突き出す。ヘイデンは上着を脱ぎ捨て、その鍛え抜かれた筋肉を露わにさせる。

「脱いだって強くはないわよ」

「強がりを吐いたところで、強くはなれはしない」

キズナとヘイデンの言葉が、【鵲鴿】と【朱雀】のぶつかり合いに取って代わる。

キズナの繰り出す突きは神速。身体を沈ませ、スピードと無駄のない動きから放たれる【鵲鴿】は全てを貫く。

ヘイデンの単詠唱魔法ですら速度で凌駕し、次第にヘイデンの身体に傷を増やしていく。しかし、致命傷を与えられないでいた。

経験に勝るヘイデンの巧者ぶりが光る。

キズナの直情的な性格を読み、かつキズナの手元をよく見ている。刀の行く先を見なくとも、ある程度経験則で補うことでキズナの神速を高速にまで貶めているのだ。

対するヘイデンも防御一辺倒というわけではない。単詠唱魔法が圧倒的に有利なのは揺るがない。所々に単詠唱魔法と魔法刀【朱雀】を交えて、キズナの体力を確実に削っていく。単詠唱魔法を盾にキズナに突進、魔法をなんとかしのぐも、キズナの肩は【朱雀】によってえぐられてしまう。

ヘイデンと交錯する刹那、明らかにキズナの踏み込みが甘かった。太ももからの激しい出血。

足が使い物にならない域にまで来ていることを如実に示していた。えぐられた肩をだらりと下げながら、キズナは歯を食いしばる。

青白い顔を不敵な笑みで上書きし、キズナはさらに踏み込もうとする。ゆらりゆらりと歩く様子は、方向感覚を失った夢遊病者のそれだ。

「キズナ……手を貸してやろうか？」

「イヤよ」

脂汗を大量に流しながら、キズナは吐き出す。

「まだまだ……こんなもんじゃ……私は倒せないわよ」

【鵲鴿】はいまだに青く燃えさかる。

魔法文字はキズナの状況を知らないのか、子供のように身体の周りを周回する。まるでけらけらと笑っているようだった。

「見なさい。私の魔力はまだ戦えるって言ってるわ……アンタもそうでしょ?」

口を真一文字にひき結んでいたヘイデン。半死半生のキズナからすればマシな方だが、出血量はキズナに勝るとも劣らない。

口の端をつり上げるように笑うキズナに、ヘイデンは楽しそうな笑い声で応えた。

「これほどの高揚感……大陸同盟との戦でも得られなかったぞ!」

腹部から血をまき散らしながら笑うヘイデン。額から流れる汗を拭いもしないで、【朱雀】をキズナに向けた。

「……ペランの犬だけあって、よく吠えるわね」

ぼたり、ぼたり。

二人の血液が炎の猛る屋敷の中で、時の流れを紡いでいく。

「ふん、確かにペラン殿には雇われている。……だが、私は任務に忠実なのではない。任務を執行する自分自身に忠実なのだ。自分の

意思なく、ただ闇雲に付き従うだけの忠犬ではない」

示し合わせたように、キズナもヘイデンに【鵲鴿】を向けた。  
顎からしたたったキズナの血が【鵲鴿】にぶつかって蒸発する。

「フン、馬鹿じゃないの？ 犬が自分はなぜ吠えるのかを考えるようなものね。犬は所詮犬。野良犬だろうが、血統書付きの犬だろうがね。犬は犬らしく、負け犬として遠吠えていればいいのよ」

「口は達者なようだな……！」

「口だけじゃないわよ、刀の腕も達者」

（……魔法の腕は達者ではないがな）

蒸し焼きになりそうな熱の中でひとりごちる。

「……いいだろう。お主のその比類なき傲慢さ、この【雲雀】で切り伏せてやろう！」

「そういうアンタの自負による傲慢さも……この【鵲鴿】で叩ききってあげるわっ！」

崩落してくる天井の下。

火の粉降り注ぐ炎の海の中で、互いに蒼と白の刀身を構える。

遠くから青龍の咆哮が聞こえた。

地面をわずかに揺らす爆発の音を聞きながら、最後の火ぶたが切って落とされるのを待つ。エントランスホールに充満した熱気と鬼気の狭間で、陽炎が二人の姿をばやけさせた。

互いの纏う魔法文字が、エントランスホールに舞い踊る。

キズナの栗色の髪は、発散される魔力で、まるで燃えているかの  
ように青白く揺れていた。

自重に堪えられなくなつた天井が、炎を連れて崩れてくる。

瓦礫と粉塵もそれに加わり、二人の中間点に落下。

その轟音を火ぶたに、二人の影がかき消える。



第三十話・「口は達者なようだな……！」（後書き）

残り五話ぐらいです。頑張ります。

### 第三十一話・「見せてやるわよ、講義の成果！」

二人をさえぎるように崩落した天井が大量の煙と、熱気を膨れあがらせる。

肌を焼く熱の圧力は、吸い込んだ空気にさえ引火していて、肺をかきむしるような痛みさえ催させた。

視界が零の煙の中なのに、キズナは苦もなく【鵲鳩】を振う。一合、二合と刀身がぶつかり合い、キズナが煙の外へ転がり出てくる。大腿部からの出血はキズナのスピードを殺している。スピードこそがキズナの生命線であり、ヘイデンに唯一劣ることのない部分。こうなってはヘイデンにとってキズナなど、まさにまな板の上の鯉か。

続いてヘイデンが煙から飛び出してくる。

床に膝を突くキズナに、【朱雀】が振り下ろされる。キズナはそれをひらりとかわして、距離を取りざま【鵲鳩】を薙ぐ。ヘイデンの肩口に血の花が咲き、ヘイデンが低くうなる。キズナはそれを見てヘイデンの背後に回り込み、高速で突きを繰り出す。

地を這うような突きは、大胆不敵にヘイデンの心臓を狙っていく。ヘイデンは半身になって高速の刃を交わして、通り過ぎようとするキズナの身体に左の拳をめり込ませた。

めきめきとキズナの身体が壊されていく。

血を吐き、地面を転がっていくキズナ。

折れた肋骨が肺を傷つけなければよいが……。

一方のヘイデン。

刺突でつけられた切り傷は、ヘイデンの胸に赤い一線を描き、先程の傷に交差して十文字を描いていた。吹き飛ばされたキズナは地

面に【鵲鴿】を突き立て、吹き飛ばされていた自分を繋ぎ止める。

キズナが笑った。

バカにするような、何かを確信したような笑みだった。

（何を笑っている？）

「……悔しいけど、アンタの言う通りじゃない」

（ふむ……）

顎に手を当てる。確かにそのようだな。

「だったら、やるしかないようね……！」

キズナが手の甲で唇の血を拭い、【鵲鴿】を引き抜く。

「見せてやるわよ、講義の成果！ 私の単詠唱魔法をねっ！」

……おい、嘘はいかんぞ。誰より師匠である俺が一番よく分かる。

爆発するように魔力を加速燃料に変えて、風のように走る。

無意識とは恐ろしい。キズナの魔力が、キズナにわずかな体力の回復を促している。小さな擦り傷切り傷ならばたちどころにふさがっていく。

殴りつけた体勢のままのヘイデンが、懲りずに向かってくるキズナに歯ぎしりする。消失させていた【朱雀】の刀身を呼び戻そうとする。

しかし、どうもその動きが芳しくない。

「疾風！」

【朱雀】の刀身を復元させぬまま、単詠唱魔法を唱える。

距離を取ろうとしてはなつた単詠唱魔法なのだろう。重なり合う真空の刃がキズナの周りを取り囲むように強襲する。

膝を切られ、肩から血液を走らせ、頬に一筋の赤がひかれる。執拗な風に切り裂かれながらも、キズナのスピードは揺るがなかった。挑戦的な笑みと、自信過剰な瞳の炎をぎらつかせ、体勢をさらに低くする。

愚直……だが速い。

単詠唱魔法を放つたヘイデンはその愚行までも予測できなかったのだろう。所詮、経験則など俺の弟子には通用しない。

何せ……馬鹿だからな。

いつの世も、世界を動かしてきたのは一握りの天才と一握りの馬鹿だ。

馬鹿と天才は紙一重　要するにそういうことだ。

「いくわよ、単詠唱魔法っ！」

……なんだと？　ま、まさか、本当なのか！？

手のひらを突き出すキズナ。

腕を盾にするヘイデン。

単詠唱魔法、発動。

驚愕する俺。

「……………やっぱり無理ね」

ヘイデンが絶望を隠せない。俺も同じ表情をしていただろう。そこにあつたのは、キズナを除く全員の停止だった。

「謀ったな！ 【恩寵】」

「騙される方が悪いのよ」

俺も悪いのか！？

ヘイデンの隙を見逃すキズナではなかった。【鵲鳩】が最高最短の軌跡でヘイデンの腕を切り飛ばした。宙を回転するヘイデンの腕。丸太のような左腕が炎の中に消えていく。

「まだだ！」

俺の警告とヘイデンの雄叫びは、奇しくも同じ。乾坤一擲とばかりに、全力で振り抜いた【鵲鳩】。キズナは死に体。

【朱雀】が主の叫びに呼応して白刃を取り戻す。腕の出血などお構いなし。捨て身の一撃を繰り出すヘイデン。防御は出来ない。不可避。俺も、キズナも。

胸ポケットにいた俺ごと【朱雀】は切り裂くだろう。

ふむ……意外な最期だったな。

一刀両断。キズナの胸が切り裂かれた。

目に鮮やかな鮮血の花。キズナは床の上に仰向けに倒れていく。振り切ったヘイデンも血溜まりの床に沈んでいた。

双方床に倒れ伏し、焼失していく屋敷の中で力を失っていく。火の粉がまるで粉雪のように降り注いでいた。屋敷が崩れていく轟音が、他人事のように聞こえているのが不思議だった。

「キズナ………なぜかばった」

ポケットから這い出し、喘鳴をあげるキズナの顔に近づく。

「……かばってなんかいないわ………避けようとしただけよ」

「そうか。そうだな」

キズナらしい返答に微笑む。

「そ………そうよ」

鼻白むキズナが痛みと顔を隠す。どちらも俺に見られたくないのだろう。

「ねえ………リニオ………」

木材が爆ぜる音と、ガラスが割れる音、壺が碎け散る音。

「なんだ？」

様々な音が俺とキズナの会話に混じっていた。

「私……負けたの……？」

「引き分けだ」

ぼそりとした声に、俺はきっぱり言い返す。

「……私、負けたのよね……？」

「引き分けだと言っているだろう」

しつこいぞ、馬鹿弟子。

「そっか……引き分けか……そっか……」

乾いた笑いを耳にしながら、ヘイデンを見やる。

ヘイデンは床に大量の血痕を残したまま忽然と姿を消していた。

血痕を点々と残しながらエントランスへと消えていったようだ。生かされたのか、生かしたのかは分からない。

「キズナよ」

俺はヘイデンからキズナへと視線を戻す。

小さな身体、小さな手でキズナの頭を撫でてやった。

「泣くな」

震える肩。

傷だらけの弟子。

ふむ……これで死なないのだから、悪運だけは強いようだな、キズナ。

「あとは俺が何とかする。……返答がないな。俺を誰だと思っている？ 俺は偉大なるリニオだ」

キズナの方から鼻をすする音が聞こえた。  
俺は腕を組んでふんぞり返る。

「そして……俺は、そんな自分が大好きだ」

「知ってるわよ……バカ」

「そうか、知っているか」

「……知っているわよ」



第三十二話・「お前は間違っているぞ！」

崩落するエントランスホールに、天井を支える力はない。

炎と煙に身を焼かれ、なすべ無く崩壊していく末路が待っている。遠くから響いてくる爆音を、天井から崩れてくる瓦礫の轟音が上書きする。

俺とキズナの隣に落ちてきた壁の破片が、俺の髭をかすめていった。

「……時間がない。キズナ、手を貸すのだ」

「アンタの場合、手じゃなくて身体を貸して欲しいんでしょう？」

「ふむ、確かに」

顎に手をあてる。

なかなか上手いことを言うじゃないか。

「……ったく、師匠のくせに弟子の身体が目当てなんてね」

「そういう言い方は人聞きが悪いと思うのだが」

この切迫した状況で誰も聞いてはいないだろうが、一応釘を刺しておく。

「いいわ、身体は貸してあげる……でも、条件があるわ」

「全ての条件をのめるというわけではないが、一応言ってみる」

腕を組んでキズナの言葉を待つ。キズナは溢れる血と、こみ上げる痛みを飲込んで、ゆっくりと言葉を吐いた。

「……アンタの戦い、胸ポケットで見させて」

「……」

精霊と言えば、世界で最強の存在だ。

精霊相手では、人間など束になっても及ばない。たとえそれが魔法使いだとしても。俺が偉大なるリニオで、【恩寵者】であるキズナの身体を借りようとも、勝てる見込みはないだろう。

もしもこの世に神というものが存在するのならば、きっと俺は神に挑もうとしている。

それぐらい無謀な戦いなのだ。

そんな死地にわざわざ自ら進んで赴くこともあるまい。

……だが、それもいいだろう。

この身体を失えば、キズナお前は人としての存在を捨てて、ハムスターとして生きることになってしまふのだから。

「……腰を抜かすなよ」

「馬鹿言わないで」

それがキズナの覚悟だった。

眠るように目をつぶるキズナ。

俺はそのキズナの覚悟を受け止めた上で、ハムスターの姿で出る、唯一の魔法を思い描く。

「……【スワップ】」

つぶやくと、ついに天井が崩れてきた。

真っ黒な煙を纏いながら、炎で埋め尽くされたエントランスホールに最期の崩壊音が響き渡る。

俺の意識がハムスターから切り離され、全くの宙ぶらりんの状態となる。神経が根本から引き抜かれて、空気中に溶け出してしまったかのような感覚。

頭上に落下してくる巨大な瓦礫は、人を骨ごと軽々と踏みつぶすだろう。

キズナの身体に意識が入り込んでいく。視界がキズナと重なり、見ている風景が共有される。

俺の視界がキズナの視界へ。キズナの視界が、俺の視界へ。頭のとつぺんから、指先、つま先まで、隅々に俺の神経が張り巡らされていく。脊髄を通して、命令系統が確立されていく。

瓦礫が迫る。炎に巻かれた暴虐の固まりは、破壊音をともなうて盛大に落下した。

柱は次々に倒れ、屋敷は崩れ去る。吐き出した噴煙は屋敷の吐血であり、断末魔だ。

「いくぞ、キズナ。落ちるなよ」

周囲に視線をくれる。

魔力は一瞬で変換された。

ただの一つとして詠唱を必要としない、最先端の次世代型魔法詠唱方式、無詠唱魔法。大蛇のような太い蔓が周囲から次々に生い茂り、俺を覆うようにして成長していく。俺はそのさなかに単詠唱魔法を唱えて、ヘイデンから負ってしまった身体を治癒していく。

傷口を応急処置し、出血だけはせき止める。

「ダメージは残るが、仕方ないだろうな」

足下から生えてきた太い蔓に飛び乗ると、痛みの残る身体で蔓の上を駆ける。落ちてくる瓦礫に目を馳せて、周囲から急激なスピードで伸び続ける蔓に自動的ににはじかせる。

火の粉舞い散る蔓の上、俺達は崩れ落ちた屋敷を抜け、蔓の上を駆けながら町へと飛び出す。

「なによ、これ……！」

胸ポケットでキズナがうめいた。

「まるで戦争だな」

夜空は紅に染まっていた。

町には何十力所と火の手が上がり、人々の悲鳴と怒声が聞こえてくる。絶叫できればまだマシな方だ。魔力を根こそぎ吸い取られて骨と皮だけになってしまえば、声すらも発せない。絶望にも似た風景を瞳に移して絶命するだけだ。最悪、走馬燈すらも灯らないだろう。

「イリス、それがお前の望んだことなのか？」

問いかける先は精霊、青龍。

「……悪いが全力で行かせてもらっぞ」

【恩寵者】であるキズナの魔力をふんだんに注ぎ込んで、ヘイデンの屋敷跡から直径三十メートルはあろうかという巨木を出現させる。ぐんぐんと天を突き抜けんばかりに巨木は幹を太らせ、生い茂り、枝葉を伸ばす。町を覆い尽くさんばかりに伸び広がる梢や葉は、生命の根源とされる伝説の木に例えても引けを取らないだろう。キズナの魔力を与えて肥大化させた魔法の木だ。

「リニオ！ 後先考えてやりなさいよねっ！」

魔力の消費量に驚きを隠せないのだろう。

「後先考えないのは、お前の専売特許だと思ったがな」

高空五十メートル。

青龍の火にあぶられて温度の増した夜風に、栗色の髪を揺らす。揺れる木々のざわめきは、鎧と鎧の触れる音に聞こえた。

否応なしに、鼓動が高まる。

俺は【鵲鴿】に青白い刀身を出現させる。密度の濃い青い魔力の固まり。

「いつぞやお前は言ったな……」

……魔法は、人を傷つけるだけ……なの。

少女の面影が離れない。

「確かに、そうかも知れないな」

青龍の周りには幾つもの魔法文字が浮かんでは消える。

人々から吸い上げ、破壊として再変換する。青白い魔法文字は命の文字そのもの。何人の命がその中に吸収されていたのだらう。魔力量から逆算すればすでに何百人単位。

青龍が尾を激しく地面に叩き付ければ、町の中央に立っていた時計台が盛大な鐘の音と共に崩れ去る。転がった鐘は地面に這いつくばっていた住民を押しつぶし、民家につっこむ。

逃げまどう人々。青龍の袂にさらされた瞬間、強制的に魔力を吸われていく。

圧倒的で、残酷な搾取。

町から立ち上るたくさんの命の灯火と、燃ゆる町の灯。

青と赤の幻想的な対比の中で、俺は青龍に宣戦布告する。

「リニオ・カーティス……魔法の限りを尽くさせてもらっぞ」

「カッコつけてないで、さっさとやりなさいよ」

お前は師匠の見せ場を潰すのか……なっていないぞ馬鹿弟子。

俺の与えた魔力に反応し、巨木は次々に枝と、枝にからみついた蔓を伸ばす。何十本という極太の枝が、ぎりぎりという音をあげて青龍に突撃した。俺はその一つに飛び乗って、【鵲鳩】を構える。

青龍が俺達と、枝の襲撃に気がつく。

深い青で燃え上がる眼光が、無詠唱魔法を発動させた。魔法文字が激しく回り出し、俺達の乗っていた枝を盛大に燃やした。周囲に踊り出す炎で、枝があつと言う間に灰になっていく。

俺は崩れ去る数秒の間に次の枝に飛び乗ることができた。

バランスを整え、今度は青龍に向かって駆けだす。その間に五つ

の枝が青龍を取り巻き、攻防を始めていた。青龍の身体をぎりぎりと締め付け、自由を奪おうとする。

俺はそれを横目に見ながら、イリスの所在を確かめようとする。燃え上がる町を遙か下に見下ろしながら、俺達は枝で作られた空中回廊を疾走する。

蟻のように小さく見える人々が通りに倒れ伏しているのが見えた。

小さな我が子を抱きしめた親が、消えゆく命をかえりみずに悲嘆に暮れている。必死に住民を避難させようとする兵士が、青龍の放つ無詠唱魔法で、誘導した人々ごとこの世から消え去った。

無差別であり、無慈悲。

青龍にとって人々など魔力を吸い上げるだけの微々たる餌としか見えていないのだろう。俺は歯ぎしりし、叫んだ。

「イリス！ 聞こえるか！」

燃えさかる青龍の鱗に、枝が次々に焼失していく。俺はそれが一時的に過ぎないとしても次々に枝を青龍に向かわせた。

大蛇のように食らいつき、突き刺そうとする枝は、青龍の無詠唱魔法によって爆砕する。

粉碎された木片が民家にバラバラと落ちていく。煉瓦造りの壁を壊し、屋根をぶち破った。しばらくして魔力が霧散し、木片は消える。そして、破壊痕だけが残る。

「お前は間違っているぞ！」

「そうよ！ アンタは間違っているわ！ イリス！」

俺の走る蔓に襲いかかる無詠唱魔法。

俺の前方で炎が膨れあがったかと思うと、それは一気に収束し、閃光を放つ。俺はとっさに脳内で無詠唱魔法をくみ上げる。キズナが唯一使える魔法など足元にも及ばない高等なものだ。

激突する俺の魔法と青龍の魔法。

爆発が夜空に花火を打ち上げ、俺の足下を壊していく。俺は木片ごと落下し、すんでのところで蔓にぶら下がる。魔法としては同じ無詠唱魔法。だが、威力では及ばなかった。巨木を操りながらでは無詠唱魔法は一つが限界だ。それが人間としての限界でもある。だが、青龍を見れば、軽々と何重もの無詠唱魔法をひっきりなしに発動し続けている。

化け物。怪物。もはや形容しがたい生き物だ。

俺は盛大に舌打ちして蔓の上にはい上がると、全速力で蔓を駆け上がっていく。螺旋階段のように青龍の周りを回りながら、徐々に頭へと近付いていく。

枝と青龍の攻防は圧倒的に青龍の有利。魔力の絶対量に差があるのは明白。枝は青龍のうねりによって次々にへし折られてしまい、止めに燃やされて塵になる。

「聞こえているのか、イリス！ お前は間違っているのだ！」

「無視するのは自分が無力な証拠なんだからね！」

【鵲鴿】を握りしめて叫ぶ。

キズナも俺の叫びに続き、胸ポケットに必死にしがみついている。

「お前のしていることは、魔法で人を傷つけることなのだぞ！」

近くで起きた大爆発に、青龍に巻き付いていた蔓がへし折られる。あまりの爆風に身を吹き飛ばされそうになった。それでもつたを蹴



り、走り続ける。

「確かに魔法を使えば、誰かが傷つくことになる！ 誰も傷つけない魔法など詭弁に過ぎない！」

「もうっ！ 魔法を使えるくせに、いつぱしに悩んでるんじゃないわよ！ 私なんか、そんなことを悩む以前の問題なんだからねっ！」

「論点がずれている！？」

青龍の身体が激しく動き、蔓の枷を外そうとする。

尾が激しく振られて、俺達ごとたたきつぶそうとする。俺は力の限り跳躍して炎を纏うしつぽを飛び越える。風切り音と熱風が汗をも蒸発させる。身体の痛みは、緊張と集中で後ろに置き去りだ。

今はそれでいい。全てが終わった後で、ベッドに縛り付けるなりされてもいい。

「……どうせ、縛り付けられるのはキズナだからな。構いやしないさ。」

「今の何！？ 悪寒がしたわっ！？」

「……そうか、気のせいだろう」

### 第三十三話・「傷つけるだけが魔法ではないのだ！」

どきりとする心臓にかかる、さらなる負担。

青龍の繰り出す無詠唱魔法が、俺を四方から囲い込む。赤い球体が俺を追いかけるようになってくると動いたかと思えば、突然球体の中心から直線的な光が放たれた。俺は直感的に触れてはならないと即断し、身をそらす。

案の定、その光線を受けた部分は綺麗さっぱり両断され、燃え上がる町へと落下していく。切り口が真っ赤に変色しているところを見ると、かなりの熱を帯びているようだ。

球体はそれぞれに独立して動き、それぞれの死角を補うように機敏に動く。赤い光が脇をかすめた。俺は蔓の上で前方宙返りを繰り返し、ギリギリのところで避け続ける。

触れてもいないのに熱さを感じる。かすめた服の裾は、耐熱仕様なのにもかかわらず、ぐずぐずに溶けて無くなった。

「くっ……！ 背筋も凍る熱量だな！」

「何で凍るのに熱いのよ」

それもそうだな、などとは返せない。

そんな軽口を聞いているうちに身体には風穴がいくつも空いてしまっただろう。

駆けていた蔓の先が光線によって切り落とされてしまい、俺は行き場をなくす。追い詰めてくる赤い球体。

俺は魔力量を増やして、急いでさらなる足場を作り出す。枝葉が伸び、足場を増やしていく。

数打ちや当たるとばかりに光線が小刻みに発射され、さながら銃撃戦の様相。

強引に身体を曲げながら、俺は光線から身体を逃がす。肌をかすめただけで火傷の痛みが全身に行きわたった。激痛と、遅れてやってきた吐き気に足が膝を付きそうになる。

「リニオ!?」

「……どうやら、この身体の魔力も吸い取られているようだな。分かっていたことではあるが、厄介極まりないぞ……!」

【恩寵者】ゆえに魔力量に余裕があるとはいえ、吸い取られ続ければいつかは尽きる。遅いか早いかの違いでしかない。戦い続けた代償か、キズナの魔力量にもついにそこが見え始めた。魔法の木を維持している以上、長期戦は絶対に避けたい。

「リニオ! 上!」

キズナの言葉を聞かなくとも俺は動くつもりでいた。

頭上から発射された熱線。俺は枝から飛び降り、蔓にぶら下がることで難を逃れる。逆上がりの要領で身体を跳ね上げると、次の蔓に飛び移る。そうして二、三本と渡り歩いたところで、俺はやっとその姿を目にすることが出来た。

「いたわ! あそこっ!」

ハムスター姿のキズナが胸ポケットから青龍の頭の上を指差す。そこにはうつろな表情で青龍の頭上に佇立するイリスがいた。

宝石ラピスラズリを太陽に透かしたような美しい輝きを全身にたたえている。

「イリス!」

喉が張り裂けるぐらいに叫ぶ。でなければ、木々がはじけ飛ぶ音や、枝葉が爆発する音にかき消されてしまいそうだったからだ。

俺は飛んできた梢を【鵲鴒】ではじき落とすと、もう一度叫ぶ。

「魔法は傷つけるために存在するのも知らない！ 血を流させ、住み家を奪い、絶望を導くのかも知れない！」

避けきれなかった光線が、胸に迫る。

完全なる直撃コース。

俺はとっさに【鵲鴒】で迎え撃ち、奇跡的にも弾くことに成功した。弾けなければ確実に心臓を貫かれていた。

まだ、運はあるようだ。

「だが！ 傷つけるだけが魔法ではないのだ！ 確かに傷つける力を秘めてはいる！」

俺は蔓の上を高速で移動しながら、追いかけてくる球体が放つ細かい光線を【鵲鴒】で防いでいく。

「その一方で！ 守る力も秘めているとは思わないのか！」

武器を振う代わりに言葉をぶつける。

「少なくとも！ 俺はそう思うのだ！」

真っ赤な直線は絶え間ない。

目の筋肉がつりそうになるほど眼球を動かし、全てを視認して迎撃していく。

こういうのはキズナの方が得意なのだな……。

「リニオ！ 下よ！」

【鵲鳩】で光線を弾くと、青白い火花が散った。

「右から来るわ！ 次いで右下！ 左斜め下！ 右、左、後方斜め左45度！」

おい、キズナ、ちょ……。

「上上下下右左右左BA！」

「BAってなんだ！？」

「……ちよつと言ってみたかっただけ」

「やかましい！」

逃げ場のない無詠唱魔法の連発に、俺はたった一回の無詠唱魔法で身を守るしかなかった。

身体前方を視認し、魔力を最大限に込める。空間を歪める透明な壁を出現させ、何とか当座をしのごう。

二発で碎け散った壁に半ば愕然としながら、俺は転がって緊急回避するしかない。

雷撃が蔓を直撃し、伝導してきた電流が足下からはい上がってくる。あまりのしびれに自分の身体がどこかへ飛んでいきそうになる。そこへ追撃してきたのは、無詠唱魔法ではなかった。

月の光が隠れる。

暗闇に埋め尽くされた背後に戦慄を感じ、肩越しに振り返る。視

界に大写しになったのは、青龍の巨大な口腔だった。  
そそり立つ牙が俺とキズナを噛み砕こうと迫る。

「私なんて食べても美味しくないわよっ!？」

「俺なんて食べても美味しくなんか無いぞっ!？」

火の輪くぐりさながらに、牙の隙間からぎりぎりで抜け出す。

「食べるならリニオの方にしてよねっ!」

「食べるならキズナの方にするのだなっ!」

蔓にぶら下がっていると、さらに青龍が大口を開けて迫ってくる。

「師匠のくせになんてことを言うのよ!」

「弟子のくせになんてことを言うのだ!」

叫び、慌てふためき、なぜか最後にはいがみ合った。

魔力の供給にかけりが見え始めたせいか、青龍は自由に動き始めている。蔓の拘束を払いのけ、地面すれすれを飛び回れば、炎の暴風で町全体に火が放たれる。蔓を口で引きちぎり、口に引っかけたまま動き回る青龍。

俺達は足場の蔓を青龍に食いちぎられてしまう。さらなる足場を見つけるより先に蔓を青龍にくわえられてしまったため、蔓をつかむ俺達はいいように振り回されている。

地面を這うように飛ぶ青龍。

地面が、民家の屋根が俺達に迫る。

いかん、叩き付けられるぞ。

俺は吹き付ける風にまぶたを落としながらも、身を守るべく、無詠唱魔法を防御に回す。身体全体を鋼鉄で覆うイメージ。

風を切る音と、燃えさかる町並み。高速で飛び回る青龍。俺達は蔓につかまったまま、民家の中を突き抜けていく。

二階のクローゼットをぶち破り、武器屋の窓を突き破る。飲食店で棚を引き倒すと、その隣の民家のベランダを破壊した。再び舞上がった青龍に、俺達は疲弊を隠すことが出来なかった。

突き抜けた家々の土産か、頭に被っていたパンツとブラジャー（おお、巨乳だ）を引きはがす。

蔓が今にも燃えてちぎれそうだ。俺はありったけの声でイリスに届ける。

「お前の耳に俺達の声が聞こえないのなら、その目に見せてやろう！ 傷つけるためではない、守るための魔法というものを！」

青龍の頭上でただ何をするでもなく立っていたイリスの肩が震えた気がした。

「そして……！ お前が持つ心の恐怖を……俺が！ 俺が払拭してやる！」

……いや、確かに震えた。

何かにおびえ、それを指摘されたときのような小さな震えだった。

「お前は一人じゃないのだ！ 寂しくなんかないのだ！」

蔓がちぎれて高空に投げ出される直前。

「……ムス……太……」

そんな弱々しい声を。

「……助け……て……！」

俺は聞いた。



**第三十三話・「傷つけるだけが魔法ではないのだ！」（後書き）**

一日二話更新です。ラストまで一気にいきます。頑張ります。

### 第三十四話・「今更だが」

「……キズナ、聞いたか!？」

「……聞きたくないけど、聞こえたわ」

青龍から振り落とされ、俺たちは炎上する民家に落下していく。  
熱い風に身体を叩かれながら、俺たちは自分が落ちているのも忘れて会話する。胸ポケットから飛び出してしまっているハムスター姿のキズナは、逆さまのまま腕を組んでそっぽを向いた。

「待っているのだ、イリス! 必ず俺が救い出してやるぞ!」

「……なんでそんなに必死なのよ……」

「ふん、嫉妬とは単純だな」

「し、嫉妬じゃないわよっ! 馬鹿じゃないの!？」

「キズナよ、おまえはどうも分かっていないようだな。……俺は、俺を愛する全ての女に危害を加える者を許さない」

握り拳で力説する。

「俺を愛する女が苦しんでいるのならば助ける! 泣いているのならば涙を拭ってやる! それが信念だ。揺るぎのない正義なのだっ!」

「愛されること前提って……一体どこまで自信過剰なのよ……」

「だから、イリスも助ける！」

「……力説中悪いけど」

落下しながら大声を張り上げる俺に、キズナが半眼で指さす。

「着地は心配することはないぞ。魔法でどうにでもできる」

キズナの顔が徐々に引きつっていく。お前は百面相か。

「第一、師匠を指さすな」

注意してやるが、キズナの顔は引きつっているだけでなく、みるみるうちに青くなっていく。よく見ればキズナの指さす方向は、微妙に俺の顔とは角度がずれていた。キズナは指差すのを止めて、空中で必死にクロールし始める。まさに溺れる者は藁をもつかむ。じたばたじたばた。

……空中遊泳とは実はこういうことを言うのではないだろうか。涙まで流して……。

そんなに空中を泳げまねをすることが楽しいのか、キズナ……と、冗談はここまでにしておこう。

何となく状況が読めたぞ。

自由落下する中、俺はブリキの人形のように、ぎぎぎ、と首を回転させる。

「……□？」

青白い炎をまとった巨大な口がそこにあつた。背筋から駆け上がってくる寒気に脳の温度が一気に低下する。パニックになりかけた頭に折り合いを付け、俺はキズナをひつつかむと胸ポケットに押し込んだ。

コンマの時間で【鵲鴒】の刀身を一瞬のうちに復元し、青龍の口がかみ合わされないように、つつかえ棒にする。

口から俺を吐き出そうと、空中できりもみ回転する青龍。

脳みそが揺さぶられて頭骨に叩き付けられる痛み。加えて、青龍の口の中は青白い炎の渦だ。身体そのものが実体のある炎でできているのだろう。ブーツの底は溶け始めている。

ブーツに仕込んである鉄板が、炎の熱を吸い込んで最高に熱い。焼き肉の鉄板の上に立っているような感覚に、俺は飛び上がりそうになる。

落ちた汗はじゅうと音を立て、肌はぐずぐずと焦げていく。

「く……これ以上は……【鵲鴒】が持たないか……！」

信じられないことに、つつかえ棒にしている【鵲鴒】の刀身にひびが入り始めていた。

青龍の魔力を秘めたあぎとと、青龍自身の力に【鵲鴒】の魔力で作られた刀身が悲鳴を上げてしまっている。

驚異的な膂力。

さらに最悪なことに、青龍ののどの奥から青白い光が激流のごとく押し寄せてくる。気がついたときにはすでに遅かった。

最高純度の魔力が直接吐き出されていたのだ。飲み込まれば、骨も灰も残らない。存在そのものを消滅させる魔力の溶岩。それだけで町一つを一年間、光で輝かせておくことすら可能という魔力量。

俺は咄嗟に背を向けて胸ポケットからキズナを取り出す。

「今更だが」

「え……？」

「お前の胸、嫌いではなかったぞ」

キズナを青龍の口の外へ放り投げた。

「なんで！？ 嫌よっ……私ほっ！ リニオおおおおっ！」

キズナの叫びが口の外に消えていく。

許せ、キズナ。

俺は無駄とは分かっていても、急造の無詠唱魔法を展開する。青龍が吐き出す魔力に比べたら、薄紙のような盾でしかない。五秒もつかどうか。

津波にのみこまれるように、俺は真っ青な波の中に飲み込まれていった。

### 第三十五話・「イリス」

脳みそまで焼けるような灼熱。

キズナのなめらかな肌も、二つに結わえた栗色の髪の毛も、消滅していくだろう。無詠唱魔法で構築した薄紙のような防壁が、青龍の放つ青の奔流に簡単に浸食されていく。

俺は魔力の波に飲み込まれた。ただそれだけがはっきりと分かっていた。

ふむ……キズナには悪いことをしてしまった。

お前の身体を借りていたというのに、お前の身体を失ってしまう結果になったのだから……。

だが、キズナよ、ハムスターの身体というのも存外快適なものだぞ。

お前にもそれが分かる日が来ると良いのだが……。

目をつぶろうとする俺の視界を影がよぎる。白い魔法文字が青龍の口内で広がり、つぶされそうになっていた俺の無詠唱魔法の後方に、さらなる防壁が築かれる。

「あきらめるには早いぞ！ 【恩寵者】！」

剛胆な声が俺の鼓膜を直撃した。現れたのは、厚い胸板と、二メートルはあるつかという巨軀だ。躍動する筋肉男が、ぼろぼろの身体でにやりと口の端をつり上げる。

「ヘイデン！」

スーツの胸ポケットには大層ご立腹なハムスター。

「……と、おまけ」

「誰がおまけよっ！」

問答無用、ヘイデンは左腕で俺の襟首をぐいと引っ張ると、先ほど俺がキズナにしたように青龍の口内から放り出した。

ヘイデンもそれに続いて青龍の口から飛び出してくる。青龍の口から吐き出される魔力は、俺たちのコンマ一秒前にいたところを消滅させていく。

「【恩寵者】キズナよ！」

ヘイデンの身体から放出される真っ白な魔法文字が、青龍へと流れ込んでいく。

「私の魔力では刀は振るえぬ！ それゆえ、お主にこれを預けるぞ！」

一足早く落下していくヘイデンが、残った右腕で【朱雀】を投げてよこす。

「……イリスが待ってるわよ」

キズナがヘイデンのポケットで寂しそうにつぶやく声に重なって、俺は【朱雀】をがっちりとつかみ取った。

ふむ、色々なものを受け取った気がする。

……やらねばなるまい。

「イリスよ……俺をここまで手こずらせた女はお前が初めてだぞ」

青龍をにらみつけ、身体に残った残り全ての魔力を爆発させる。

右手に【鵲鴿】。

左手に【朱雀】。

両方の魔法刀に魔力を込め、青白い刀身を顕現させる。

さらにペランの邸宅跡から生える魔法の木を鳴動させた。

巨木に燃え移った劫火が、葉に燃え広がり、まるで紅葉のように世界に散っていく超常的な光景。

炎の落葉。

そこから伸びる一本の太い枝。同時に、キズナの身体から吹き上がる魔法文字。大小様々な魔法文字が狂喜乱舞し、身体の隅々から吹き出す。

魔力を羽のように身体に従わせながら枝に着地、俺は青龍をイリスを見据える。

「よく見ておけよ、キズナ。魔法刀にはこういう使い方もあるのだ」

魔法刀は、魔力を加えれば、道具の方が勝手に刀身を制御してくれる。

オートマチック・マジック・レギュレーター  
魔力を一定に保つ自動魔力制御装置。通称AMR。

その制御を自動制御ではなく、手動制御する。



「リミッター……解除だ」

AMRを解除した魔法刀が、際限なく魔力を吸収していく。刀身は激しく太く揺れ動き、魔力を盛大に垂れ流しにする。俺は二振りの魔法刀を構えて、一本の枝を疾走する。

青龍までの……イリスまでの一本道。

俺は駆ける、最大速で。青龍は高らかに咆吼し、無詠唱魔法を手当たり次第に放ち出す。赤い球体が青龍の周囲に滞空し、まるで弾幕を張るかのごとく光線を放ち出す。

目の前は真っ赤な豪雨。その一つ一つが殺人級だ。遠く、背後では、魔法の木はその大部分が霧散し始めている。もう維持するだけの魔力はない。

青龍の炎に焼かれた木、それに対抗するだけの魔力など、この世の誰も持ち合わせてはいない。

枝がきしみ始める。

まだだ、まだ折れるには早すぎる。

「イリス！ 聞こえるだろう！」

近づいてくる青龍の頭上には、人形のように立ちすくむイリスの姿。

意識はない。破壊の限りを尽くす青龍に支配されてしまっているのだろう。

だが、声は確かに聞こえた。

あのと看聞こえた声は、イリスの深層からの声に違いない。

「寂しさは誰にでもあるものだ！ 寂しさのない者などこの世にはいない！」

寂しさ、その言葉にイリスの肩が再び震える。

「過去のこと！」

深い闇をたたえていた蒼い瞳は、鮮やかさを取り戻し、一心に俺を見つめる。

「ティアナのこと！」

青龍が近づいてくる俺をとらえた。冷酷な眼光で俺を見据える。

「つらいことも、寂しいことも、たくさんある！ 今までも、これからも！」

赤い弾幕が、俺の身体をかすめていく。

頬をかすめ、髪の毛を燃やした。

太ももを突き抜け、腹部を焦がす。

「だからこそ！」

激痛に齒を食いしばる。止血に魔力を割くことはできなかった。もう、そんな魔力は残っていない。

今は最後の最後のためだけに。

俺はのどをからして、イリスの胸のドアを叩く。

「寂しかったら寂しいと言え！俺がそばにいてやる！」

暗い部屋に閉じこもったイリスの心を。

「悲しかったら悲しいと言え！俺が嬉しさに変えてやる！」

ドアを必死に叩いて、話しかけて。

「泣きたかったら泣いてもいい！俺が涙を拭ってやる！」

青龍が猛り狂う。口腔を最大限にあけて、魔力の光を収束させる。

「痛かったら痛がつていい！俺が傷を癒してやる！」

イリス、扉を開けてくれ。

「お前の全部を俺が抱きしめてやる！」

青龍がのどの奥から膨大な魔力を放出した。

「だめええええええええええつ！」

イリスの叫びに青龍の動きが緩慢になる。

吐きだされた魔力の溶岩は少ない。

イリスの叫びに青龍が戸惑ったのだろうか。冷酷な龍の瞳が微かにける。

ここだ。

俺は全力を振り絞って【朱雀】にあふれさせた魔力を解放する。

### 第三十六話・「雨」

これが最後の攻防になる。  
出し惜しみはなしだ。

【朱雀】から魔法文字がほとばしる。

限界を超えて増大していく剣閃。地平線を貫くほどに伸びた刀身。俺は強烈な重さを感じながらも【朱雀】を横に払う。

閃光と轟き、そして、燦然と輝く文字列が、衝撃波の中で弾け飛ぶ。

意識と身体をつなぎ止め、足を何とか枝の上にとどまらせる。魔力の溶岩を切り裂き、文字通り進路を切り開く。

イリスが見える。道は開けた。

開けた先にある宝石のような蒼い瞳に、俺が写り込んでいた。青龍の眼前に迫った俺は、地面に落ちていく枝を蹴って舞い上がる。【鵲鴿】を天にかかげ、魔力を解き放つ。

天を突く光。渾身の力で【鵲鴿】を青龍に振り下ろした。

イリスの声が青龍の動きを止めていた。絶叫は青龍の魔力を消失させ、炎の勢いを減退させる。

吸い込まれるように【鵲鴿】が青龍の首筋に食らいついた。

青龍を斬首する【鵲鴿】は、キズナと魔法の講義をした丘を半分まで両断し、そして青い燐光となって霧散した。

首と胴体が離ればなれになった青龍の身体も、青い残り火となっ

て空に消えていく。

俺は途中でイリスを捕まえて落下の衝撃に備える。

ペランの豪邸のあった場所には、すでに魔法の巨木はない。魔力の寄る辺をなくした木はあつけないもの。

燃えるような紅葉とは自分で言いながらに、言い得て妙。

青龍の残り火に燃え尽くされて、僅かな秋をもの悲しむようにゆっくりと消失していった。

「まさか……」

空中に投げ出された俺たちは、未だ燃えさかる民家の屋根に着地させられていた。

「最後の最後、着地までお前に助けられるとはな」

「助けたのではない。ただ……お主との決着がこのような形で決してしまうのが、惜しいだけよ。二重人格の【恩寵者】」

隣の民家の屋根に着地していたヘイデンが、腰に手を当てて不適に笑む。

右腕はない。傷口には包帯が厚く巻かれていて、赤が大量に滲んでいた。

「二重人格だと？」

「違うのか？」

そうか、気がついていないのか。

鋭いのか、豪快なのか分からないヤツだ。

「あ……いや、何でもないぞ。それより忘れ物だ、ヘイデン」

【朱雀】を投げてやる。

「ふん、こちらからも忘れ物だ」

スーツの胸ポケットから乱暴に放り投げられたものをキャッチする。

「……世界で一番可愛いのだろうか？」

「……」

頬袋をこれでもかというほどにふくらませたキズナだった。血管の浮いた額。頭からは湯気が立ち上っていた。

「何というか……よかったなキズナ」

「リニオ、格好つけたところ悪いんだけど……一つ言わせてもらっていいかしら」

「駄目……と言ったら？」

「いいのね、ありがとう」

俺に了解を得るつもりは元から無かったらしい。だっただけ聞くな、と言いたい。切に言いたい。

「……うおっほん」

微妙な咳払いだな。

「ふざけるんじゃないわよっ！ 馬鹿っ！」

ないわよ、のタイミングで殴られた。  
ハムスターの小さい拳なのに、少しだけ痛かった。

「あんな空中から放り投げられたって、けっきょく地面に叩き付けられて即死なのよ！」

「おお……気がつかかったぞ」

「て言うか、この身体は私の身体じゃない！」

「おお……」

「気がつかかった　って言ったら殺す」

「気づいていました」

「ごめんなさいは？」

「ごめんなさい」

怒髪天をつく勢いのキズナに俺は土下座する。

「私の身体で土下座されると、微妙に心苦しいのはなぜかしらね……」

……」



腕を組んでぷんぷんと怒るハムスターに土下座をする人間。構図としては最悪の部類に属するが、今回ばかりは俺が悪いと思えたので、素直に謝る。

ふむ……師匠としての威厳はすでに失墜してしまったのだろうか。悲しい。

以上、自問自答終わり。

「おかしなものだな【恩寵者】というのも……」

会話までは聞こえていないだろうヘイデンが、俺たちの様子を見て顔をしかめる。

左手を顎に当てて考え込む姿は、娘に困らせられる父親のようだった。

「それに……」

怒っていたキズナが突然背中を向けて尻込みする。

「あのとき……今更っ……今更嫌いじゃないって言われても困るんだからっ……」

怒りがしぼんでいくようだった。

今度は困るのか。それは大変だ。

「おお……勘違いさせて済まなかった、キズナ」

俺は困っているキズナを安心させるために必死に言葉を巡らせる。ご機嫌取りというのもなかなか大変なのだ。

「嫌いではないが、もちろん好きでもないのだ。好きなわけがないだろう？　俺は巨乳好きだぞ。こんな微乳、貧乳には興味はないのだ」

スワップしたキズナの胸を、手のひらで持ち上げて見せる。  
ふむ、持ち上げるほどなかったな。

「……」

しばらくはいくはずの怒りが、ぴたりとしぼむのを止める。

「殺す」

ハムスターの姿で拳を振り上げるキズナ。

……けれど、その拳は振り下ろす直前で止まっていた。

「……殺していたわ、イリスを助けられなかった時はね」

キズナの拳が脱力するのと、俺の胸にイリスが飛び込んでくるのは、ほぼ同時だった。

俺の胸の中で大粒の涙をこぼして泣きじゃくるイリスを俺は優しく抱きしめてやる。

「……ム……ス太あ……む……す……たあ……」

耐えてきた涙が決壊していた。

滂沱として流れ出す涙はとどまるところを知らず、ぐっしょりと俺の服を濡らしていた。

「雨だわ……」

大火の後には必ず雨が降る。  
確かキズナと出会ったときも同じ雨だった。

立ちこめた雲からぽたぽたと雫が落ちてくる。それは炎上した店や、倒壊した家屋をぬらし、一時の休息を与えるようだった。

「よしよし……好きなだけ泣くのだイリス」

目を真っ赤に腫らして、鼻水をすすり、頬をぬらし、赤ん坊のようにくずる。

泣きじゃくる姿は醜いものと相場は決まっているが……。  
さすがは傾国の美少女、絵になるな。

「……ちなみに言っておくと、俺はリニオであってムス太ではない。  
そこ、間違えるなよ」

雨の中、俺はいつまでもイリスの涙を拭っていた。

### 第三十六話・「雨」（後書き）

次回最終回です。やっとここまで来ました。一日二回更新です。誤字脱字ありましたらお許しください。

## エピローグ

痛々しい傷をさらしながら【鵲鳩】を構えるキズナを、肌から立ち上る闘争心で受け止めるヘイデン。

俺はハムスターの身体に戻っており、イリスの頭の上でその様子を見ていた。

丘の上、早朝の涼やかな風が平等に四人の頬を撫でていった。

「イリス……どう思う？」

頭上から問う。

「……キズナは、他にコミュニケーションの手段を知らないの」

「悲しい人間だな」

「うん……私もそう思うの」

「聞こえてるわよ、アンタ達……！」

キズナがにらみつけてくる中で、俺とイリスは目を合わせてやれやれと首を振った。

「やるのか？ やらないのか？」

ヘイデンは腰に帯刀した【朱雀】に左手で触れながら、右の眉をぴくりと上げる。

「……やめるわ。言っておくけど、臆病風に吹かれたとかそういうのじゃないんだからね？」

【鵲鴿】をヒップバックにつっこむキズナ。それを見たヘイデンも、手をだらりと下げて、闘争心を霧散させた。

「お主が臆病風に吹かれるところを、一度で良いから見てみたいものだな。青龍を打ち倒す人間など、聞いたことがない」

ヘイデンは【鵲鴿】が切り裂いた丘の切断面を眺めて、感嘆の息を漏らす。

昨夜の戦いで、俺は【鵲鴿】のAMRを解除した。最後の魔力を費やした長大な一撃は、青龍の首を切り落としたにとどまらず、丘の半分をも両断した。

「あれは、アイツが……なんでもないわ」

俺をちらりと見て、齒がみする。

「さて、戦わないというならいつまでもここにいない必要はないな」

「やけにあっさりしてるじゃない」

「右腕がないというのは、思っていた以上に負担を強いるものだ」

失った右腕に巻かれた包帯を見せてくる。

「残念だが……このまま戦ったところで、お主には勝てぬだろう。一から見直さねばなるまい、我が剣術を。……その前に、新たなスポンサーも探さねば、飯にもありつけぬ。この年で無職だけは勘

弁願いたいところなのだな」

太い眉を崩して豪快に笑った。

そそり立つ石壁のような、ごつごつした背中を向けて丘を降りていく。

「傭兵のつらいところだな。ペラン亡き今、そこまでして戦う理由はないということか」

「身につまされる話よね」

「身につまされる話だぞ」

「身につまされる話なの」

「ごめんなさい。俺たち全員無職です。」

「……だが、ハムスターは元々無職だ。愛玩動物はどちらかという  
と与えられる側なのだ。俺を愛し、至れり尽くすがいい」

「……うん、健やかなときも、病めるときも、豊かなるときも、貧  
しきときも、ムス……リニオを愛し、これを敬い、これを慰め、こ  
れを助け、その命の限り、固く節操を守ることを約束するの」

頭上にいた俺を手のひらに移し、宣誓してくるイリス。

……だが、その宣誓は何か特別な他意を感じるようで少し怖いぞ。

「お前は素直でよろしい……が、今のままのお前では俺の満足する  
女には到底及ばない」

手のひらの上で腕組みし、鼻を鳴らす。

「俺は色気のある大人の女が好みなのだ。出るところは出、引つ込むところは引つ込む。上から下まで平板では駄目だぞ」

「うん……頑張る」

「お前はまず胸を大きくするのだ」

「うん……頑張る」

「背も大きい方がいいな」

「うん……頑張る」

「……イリス、お前はどこの誰かと違い本当に素直だな。どこの誰かに見習わせたいくらいだ、どこの誰かに」

横目に見れば、どこの誰かの血管がすごいことになっていた。

「……私、素直。……素直な恋人なの」

「いや、恋人ではない」

「……恋人なの」

「断じて違う」

「……恋人……なの……っ！」



「い、痛い痛い痛いっ！？ 身体が潰れるっ！？ おいイリス！  
手の力を抜くのだ！ おおうっ！ 何かよからぬものがはみ出てし  
まうっ！？」

握り合わされた両手の中でじたばたする俺を、馬鹿弟子は乱暴に  
イリスの手から奪い取る。

「スプラッタはやめなさいよ」

息も絶え絶えになった俺を胸ポケットに放り込む。

「む……キズナ、夫を返して」

キズナに手を伸ばすイリス。

「アンタが甘やかすからこうなるのよ」

「お、俺のせいなのか……？」

「リニオ……ひまわりの種なの」

「ひゃっほう！」

「このくそネズミ！」

歓声を上げながら胸ポケットから飛び出す俺を、キズナががつち  
りとつかむ。

「油断も隙もあったもんじゃないわ……イリス、舌打ちするんじゃ

ないわよ」

「はっ！ ……俺は一体何を……」

意識を取り戻す。

ひまわりの種……なんて恐ろしい魅力！

「それよりもイリス、アンタは無職じゃないでしょ？ 全焼したとはいえ【旅人の止まり木】はどうするの？」

「……」

わだかまっていた明るい雰囲気、丘の風が残らず連れ去っていた。

イリスは表情もなく、無言のまま、丘からの町の眺望を視界に納めていく。

「……ティアナの優しさは……偽りだったのかも知れないけど……それでも優しさだったような気がするの」

青龍の付けた傷跡があちこちに見える。

半焼、全焼、半壊、全壊……それを免れた家の方が数少ない。

「私は……ティアナに感謝しなきゃなの」

【旅人の止まり木】の跡地に向かって語りかける。

「アンタ馬鹿じゃないの？」

あきれ果てて、ため息を吐くキズナ。

理解できないとばかりに肩をすくめる。

「……だからと言って、ここで今まで通りには……きっと生きていけない……そんな都合よくないの。だから……私はこの町を出て生きていくの。私が暮らしてきた【旅人の止まり木】とは……さよならするの」

「それは逃げじゃないの？」

キズナの顔が引き締まる。

イリスは町を見下ろしたまま首を横に振った。

「うん……逃げじゃない。……旅立ちなの。【寵愛者】として本当の自分の役割を見つける旅の始まり……」

イリスの決意に、キズナは引き締めた顔の筋肉を弛緩させた。満足したようにイリスの横に並び、同じ町の風景を眺める。

「ま、確かにそうね。【寵愛者】であることを無かったことにして、今まで通り宿屋を続けようなんて無理。自分がそうしたくてもきつと周りがそうさせない。それが力を持って生まれた人間の宿命なのよ。それに……周囲の目も違うだろうしね。二度と同じような目では見てくれないわ」

「……うん」

古の精霊……青龍。それは国一つを揺るがすに足る力だ。

個人意志の自由が許される範疇の話ではない。

「来る者は拒まず、去る者は追わず。一緒に行くか行かないかはア

ンタの自由よ」

「いいの……？」

キズナを見、俺を見るイリス。

紺碧の瞳の奥では、戸惑いと期待が揺れ動いている。

「お前の自由だ、イリス」

「行く……一緒に行くの」

張りのある声が、風を押し返す。

「そうと決まったらさっさと行くわよ。次の町でこの服修繕しなきゃ」

ぼろぼろになった服をつまむと、町に背を向けるキズナ。

おい、感慨に浸らせる時間ぐらい与えてやったらどうだ。長年暮らした町との別れなのだぞ。

俺がキズナにもの申そうと、口を開きかける。

「……さよなら、なの」

そこには、町に向かってぺこりと深くお辞儀をするイリスがいた。たつぷりと十秒を費やして頭を上げると、振り切るようにぱたぱたと駆けてきて、キズナの横に並ぶ。

「そつえば、俺の身体はここでも見つからなかったな……。いつになったら、あの美しい肢体に戻るのだろうか……」

かつてあった自分の身体に思いを馳せる。

「鬱陶しい死体？」

「そうそう、さっさと土に還った方がいい……って、おい！　そんな馬鹿弟子、わざと間違えただろう」

「……リニオは、ずっとハムスターでいて欲しい」

「そうね、アンタは一生ムス太のほうがいいわよ」

「ムス太、かわいいから好き」

ムス太と呼ぶな、無礼者。

「そして、そのほうが世の中にとって、百害あっても二利ぐらいはあるし」

そっぽを向くキズナ。

「……二利？　かわいいのは一利……もう一つは？」

イリスが首をかしげる。

「そうね……少なくとも……わ、私の師匠でいてくれるぐらいの……利も、あるから……」

「む……」

嬉しくなどない。嬉しくなど無いぞ。

「キズナ、顔赤い」

「夕焼けのせいよ」

「今は朝だぞ」

「朝焼けよ！」

「……でも昼にも近いの」

「日焼けよ！」

「訳が分からん」

【恩寵者】と【寵愛者】が並んで歩く。

今後俺たちに降りかかる災いは増えるばかりだろう。

丘を抜ける涼風と静けさの向こうに待つ嵐を予感する。

俺は、お前達に何もしてやれていないのかもいれない。

俺は、本当に、本当に駄目で、矮小で、哀れで、どうしようもない存在なのかもしれない。救いがたい存在なのかも知れない。

……どうか許して欲しい。いや、許さなくてもいい。きっと許されるはずなどないのだから。

そう、俺は馬鹿だ。大馬鹿なのだ。愚か者なのだ。

でも……でも俺は……。

キズナ、イリス。

そんなお前達が、自分と同じぐらい好きなんだ。

《終わり》

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5355e/>

---

魔法とキズナと身体の関係

2010年10月10日19時59分発行